

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第664集

おもつべ
重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書

河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の滝線
沼の浜地区整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第664集

重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書

2017

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
(公財)岩手県文化振興事業団

2017

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
(公財)岩手県文化振興事業団

重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書

河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の滝線
沼の浜地区整備事業関連遺跡発掘調査



序

本県には、旧石器時代や縄文時代をはじめとする遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化を理解するのに欠くことができない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民にとっても財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用してゆかなければなりません。

また、未曾有の震災被害からの復興、将来の豊かな県土づくりのためには社会資本の整備が必要です。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本書では、宮古州市道整備事業に関連して、平成27年度に発掘調査を実施した重津部I遺跡の成果を報告いたします。調査の結果、縄文時代前期の集落跡や弥生時代、古代の遺物が確認され、当地にも豊かな郷土史を語る貴重な資料が包蔵されていたことを明らかにすることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター、宮古市教育委員会、岩手県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例 言

1. 本報告書は、宮古市田老重津部地内（字重津部北 37 ほか）に所在する重津部 I 遺跡の調査成果を収録したものである。
2. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。
重津部 I 遺跡 遺跡番号：KG84-1259 遺跡略号：TROM-15
3. 調査は、河川等災害復旧事業二級市道沼の浜青の滝線沼の浜地区整備事業に伴う緊急発掘調査である。沿岸広域振興局土木部宮古土木センターとの協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
4. 発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。
面積：8,700 m² 期間：平成 27 年 8 月 3 日～11 月 20 日
担当者：主任文化財専門員 星 雅之・高橋 工
期限付調査員 對馬利彦
5. 室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。
平成 27 年 11 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 担当者：對馬利彦
6. 本報告書は、第 I 章は沿岸広域振興局土木部宮古土木センターに依頼している。
7. 各種鑑定・分析は次の外部機関に依頼した。
石材鑑定：花崗岩研究会
テフラ同定：(株) 火山灰考古学研究所
8. 基準杭打設は、(株) 東北プランニングに委託している。
9. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った（順不同、敬称略）。
菅 常久、千葉正彦、茅野嘉雄、藤原秀樹
10. 野外調査では宮古市田老重津部地区の方々にご協力いただいた。
11. 本遺跡の調査成果は、当センター発行の平成 27 年度発掘調査報告書(概報)などで公表しているが、遺構数や遺物量など本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 本書における遺構図の凡例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。
- (2) 土 層 基本土層はローマ数字、遺構内の堆積土は算用数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。土色の観察には「新版標準土色帖」2000年版を使用した。
- (3) 標 高 海拔標高を示す。
- (4) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (5) 破 線 遺構平面図では、短破線は遺構の推定線を、細破線は柱穴配列を示す。
- 短破線 - - - - -
- 細破線 - - - - -

2 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 縮小率は遺物の大きさと性格により適宜決定し、スケールの右に示した。
- (2) 遺物番号 遺跡毎に通し番号を付した。
- (3) 法 量 遺物の法量については、観察表に表記した。推定値は()、残存値は<>内に示した。

3 本書で使用した記号（略号）やトーンは以下のようである。



目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の概要	1
1 遺跡の位置	1
2 地理的環境	4
3 周辺の遺跡	4
III 野外調査・室内整理の方法	8
1 野外調査方法	8
2 室内整理と報告書作成	9
IV 検出遺構	13
1 基本層序	13
2 沢跡	14
3 竪穴住居	14
4 土坑	19
5 焼土	21
6 柱穴状土坑	22
V 出土遺物	37
1 土器	37
2 土製品	39
3 石器	40
4 石製品	43
VI 自然科学分析	79
重津部I遺跡出土火山灰分析(株)火山灰考古学研究所	80
VII 総括	85
1 遺構	85
2 遺物	85
3 まとめ	94
報告書抄録	135

図版目次

第1図	岩手県図・遺跡の位置図	2	第27図	沢跡、遺構外(1)土器	50
第2図	地形分類図	3	第28図	遺構外(2)土器	51
第3図	周辺の遺跡	5	第29図	遺構外(3)土器	52
第4図	遺跡全体図・グリッド図	10	第30図	遺構外(4)土器	53
第5図	中央調査区遺構配置図	11	第31図	遺構外(5)土器	54
第6図	基本層序・沢跡土層断面	12	第32図	遺構外(6)土器	55
第7図	1号住	23	第33図	土製品・3号住剥片石器	56
第8図	2号住	24	第34図	4・5・6号住剥片石器	57
第9図	3号住(1)	25	第35図	2・3号土坑、遺構外(1)剥片石器	58
第10図	3号住(2)	26	第36図	遺構外(2)剥片石器	59
第11図	3号住(3)	27	第37図	遺構外(3)剥片石器	60
第12図	4号住	28	第38図	3号住(1)礫石器	61
第13図	5号住	29	第39図	3号住(2)礫石器	62
第14図	6号住(1)	30	第40図	3号住(3)、4号住(1)礫石器	63
第15図	6号住(2)	31	第41図	3号住(4)、4号住(2)、 5号住(1)礫石器	64
第16図	7号住	32	第42図	5号住(2)、6号住(1)礫石器	65
第17図	1・2・3号土坑	33	第43図	6号住(2)、7号住、2・3・5号土坑、 遺構外(1)礫石器	66
第18図	5・6・9・10号土坑	34	第44図	遺構外(2)礫石器	67
第19図	5・9・10・11・12号焼土	35	第45図	遺構外(3)礫石器	68
第20図	柱穴状土坑	36	第46図	石製品	69
第21図	1・2号住、3号住(1)土器	44	第47図	重津部I遺跡出土縄文前期土器	87
第22図	3号住(2)土器	45	第48図	小松I遺跡20号住居跡、24号住居跡、 26・52号住居跡、27号住居跡出土土器	88
第23図	3号住(3)土器	46	第49図	千鶴遺跡第17号竪穴住居跡出土土器	89
第24図	3号住(4)、4・5号住、 6号住(1)土器	47			
第25図	6号住(2)土器	48			
第26図	6号住(3)・7号住、2号土坑、 沢跡土器	49			

写真図版目次

写真図版1	着手時状況と遺跡遠景	99	写真図版12	3号住(3)	110
写真図版2	調査地航空写真	100	写真図版13	4号住	111
写真図版3	中央・南調査区トレンチ調査	101	写真図版14	5号住	112
写真図版4	北調査区トレンチ調査	102	写真図版15	6・7号住	113
写真図版5	沢トレンチ調査	103	写真図版16	土坑	114
写真図版6	基本層序(1)	104	写真図版17	焼土・柱穴状土坑	115
写真図版7	基本層序(2)	105	写真図版18	調査風景	116
写真図版8	1号住	106	写真図版19	1・2号住、3号住(1)土器	117
写真図版9	2号住	107	写真図版20	3号住(2)土器	118
写真図版10	3号住(1)	108	写真図版21	3号住(3)、4・5号住、 6号住(1)土器	119
写真図版11	3号住(2)	109			

写真図版22	6号住(2)土器	120	写真図版30	遺構外(3)剥片石器	128
写真図版23	7号住、2号土坑、 遺構外(1)土器	121	写真図版31	3号住(1)礫石器	129
写真図版24	遺構外(2)土器	122	写真図版32	3号住(2)、4号住(1)礫石器	130
写真図版25	遺構外(3)土器	123	写真図版33	4号住(2)、3~4号住、5号住、 6号住(1)礫石器	131
写真図版26	遺構外(4)土器・土製品	124	写真図版34	6号住(2)、7号住、 2・3・5号土坑、 遺構外(1)礫石器	132
写真図版27	3号住、4・5号住剥片石器	125	写真図版35	遺構外(2)礫石器	133
写真図版28	3~5・6号住、2・3号土坑、 遺構外(1)剥片石器	126	写真図版36	遺構外(3)礫石器・石製品	134
写真図版29	遺構外(2)剥片石器	127			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡表	6	第9表	石器観察表(1)	76
第2表	土器観察表(1)	70	第10表	石器観察表(2)	77
第3表	土器観察表(2)	71	第11表	石器観察表(3)	78
第4表	土器観察表(3)	72	第12表	石製品観察表	78
第5表	土器観察表(4)	73	第13表	重津部I遺跡出土土器の厚さ	90
第6表	土器観察表(5)	74	第14表	重津部I遺跡出土石器組成表	91
第7表	土器観察表(6)	75	第15表	縄文前期初頭~ 前葉の石器組成比較表	92
第8表	土製品観察表	76			

I 調査に至る経過

重津部I遺跡は、二級市道沼の浜青の滝線沼の浜地区道路災害復旧事業内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

二級市道沼の浜青の滝線沼の浜地区道路災害復旧事業は、平成23年3月11日の東日本大震災津波により全線が被災した二級市道沼の浜青の滝線を復旧する事業である。当該線は青の滝漁港と小港漁港を結ぶ重要な路線であり、震災後は全線が通行止めとなっているため、漁港間の移動において大きく迂回をする必要があり、地元からは早期復旧を求められている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、沿岸広域振興局土木部宮古土木センターから平成26年10月14日付宮土セ第568号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成26年11月6日から試掘調査を実施し、工事に着手するには重津部I遺跡の発掘調査が必要になる旨を平成26年11月11日付教生第1172号「埋蔵文化財の試掘調査（回答）」により沿岸広域振興局土木部宮古土木センターに報告した。

その結果を踏まえて当センターは、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成27年7月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター

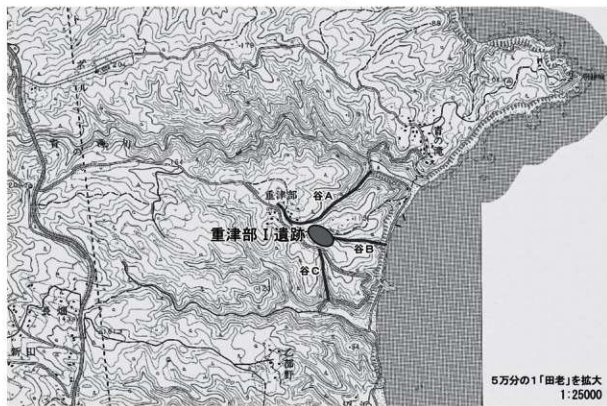
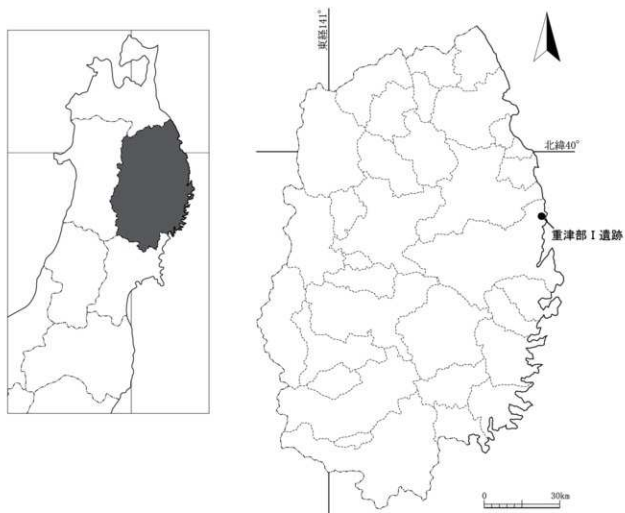
II 遺跡の概要

1 遺跡の位置

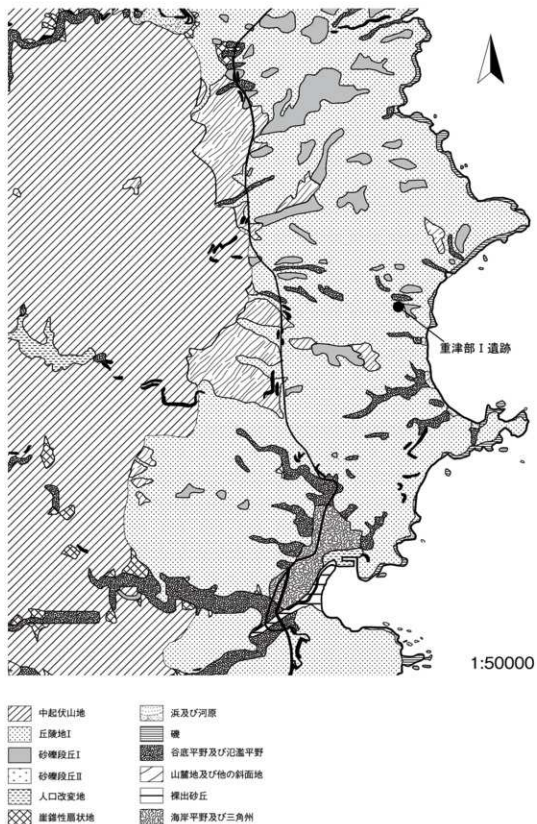
重津部I遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東には太平洋、西には北上山地を擁する。平成17年6月6日に田老町、新里村と新設合併、平成22年1月1日に西に隣接していた川井村を編入合併し新制の宮古市となった。現在の面積は1,259.15km²、人口は56,436人（平成28年2月1日現在）である。隣接する自治体は北に下閉伊郡岩泉町、西に盛岡市、南西に遠野市、花巻市、南に上閉伊郡大槌町、下閉伊郡山田町となった。

本遺跡の所在する田老地区は宮古市北部に位置し、宮古市田老字重津部地内に所在する。三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約2kmに、真崎海岸からの直線距離は約2kmである。調査区中央における緯度・経度は、北緯39度45分59秒、東経141度59分02秒である。国土地理院発行の5万分の1地形図「田老」及び、2万5千分の1地形図「田老鉾山」の図幅に属する。

1. 遺跡の位置



第1図 岩手県図・遺跡の位置図



第2図 地形分類図

2 地理的環境

本遺跡の所在する田老地区の地形分類図を第2図に示した。大勢として西側が高く、東側に向かって低くなる。図幅内では、大きくは捉えれば山地・丘陵・台地・低地に区分されるが、海岸線に沿って見られる小本丘陵（※第2図の丘陵地1）は、海岸段丘が開析されて形成されたもので、段丘面も残存することで、本来は台地として扱うべき地形のようである。

この小本丘陵は、西側の山地（※第2図の中起伏山地）とは、海岸線にほぼ平行して走る高度不連続線を持って境し、北は岩泉、南は宮古市までの南北に延びて分布する。そして、東端では比高約100mの海食崖が形成されている。丘陵頂部にかなり広い段丘面を残存するが、全体的には保存状態が悪く、大半は失われている。従って、古生界や、中生界の堆積岩、花崗岩類からなる基盤岩の露出地帯となっている。

ここで本地域の段丘区分に触れると、段丘面高度180～240mが頂待段丘、同100～160mを田老段丘、同70～90mを古里段丘に分類されており、各段丘面高度は南方方向に向かい低下する傾向が指摘されている。遺跡周辺は、田老段丘に相当すると考えられるが、一段低い古里段丘との区分は明瞭ではなく、従って一括して上位段丘とされる。

本調査区の周辺は、谷と丘陵が複雑に入り組んだ地形で、約700m北には青野滝川が東流し、太平洋に注いでいる。

調査地は概ね東方に開く3条の谷を跨いで立地しており、北側の谷Aにかかる部分を北調査区、中央の谷Bにかかる部分を中央調査区、南の谷Cの南向き斜面部分を南調査区とした。標高は北調査区の最も高い箇所約113m、同調査区の最も低い箇所約91mである。

3 周辺の遺跡

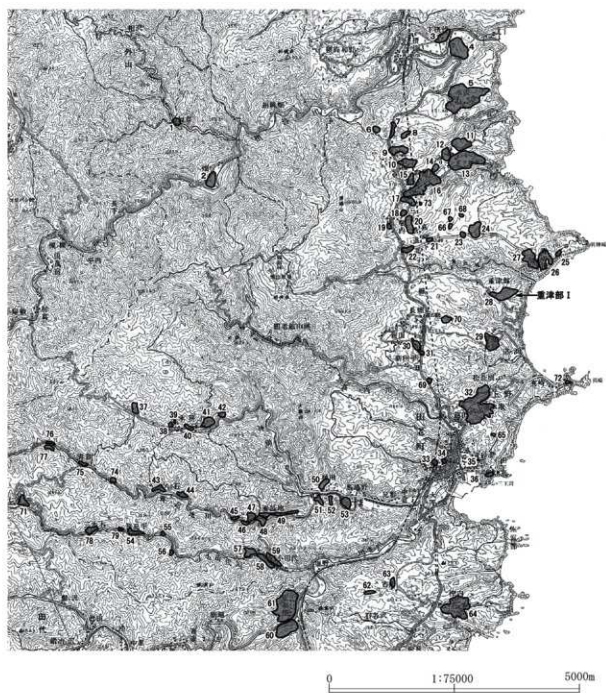
昭和36年から昭和49年にかけて行われた分布調査の成果に基づいて、田老地区では平成18年度時点で63箇所の遺跡が所在していた。その後、平成18年から行われた宮古市教育委員会による分布調査や、三陸沿岸道路建設に伴う試掘調査によって遺跡の新規発見や統合・範囲変更が行われた。平成27年度の岩手県遺跡情報検索システムによると、田老地区の遺跡は81箇所である。

第3図には本遺跡を中心に図幅中の範囲に分布する遺跡を図示した。

田老地区においては、近年まで開発等に伴う大規模な発掘調査が行われた事例が少なく、内容が明らかになっている遺跡が少なかった。その中で比較的大規模な調査事例として、昭和56年度に行われた田老大規模年金保養基地（現在のグリーンピア三陸みやこ）建設に伴う発掘調査がある。この調査では縄文時代早期～前期の土器、石器が出土しているものの、これに伴う遺構は確認されていない。なお、この発掘調査の成果は「小堀内I遺跡発掘調査報告書」（岩手埋文：1983）として刊行されているが、現在はそのような名前でも岩手県遺跡台帳に記載されている遺跡はない。報告書に記載された遺跡の位置と現在の遺跡分布図を照合すると、向新田Ⅱ遺跡付近と思われる。

平成23年から平成25年にかけて、宮古市教育委員会による樫内I遺跡の発掘調査が行われた。樫内I遺跡は平成18年の分布調査により樫内里遺跡と樫内沖遺跡が統合された遺跡である。平成23年に2次・3次・4次調査、平成24年に5次調査、平成25年に6次調査が行われた。通年の調査で縄文時代中期の堅穴住居跡と遺物（おおよそ大木8a式～10式）が出土した。

近年では、三陸沿岸道路建設に伴う緊急発掘調査として、乙部遺跡（平成25・27年度）、青野滝北



第3図 周辺の遺跡

3 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡表

No.	遺跡名	種類	時代	内容	調査年・備考
1	稲荷	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて範囲特定。
2	伊	数寄屋	縄文	石籠, 縄文土器	
3	神作	数寄屋	縄文(中期)	厚手土器, 石籠, 石斧	2007年11月, 範囲調査(小・分布調査), 確認, 宮古志連分布調査報告書(宮古志連発掘7)。
4	船の跡	城跡跡(石・数寄屋)	縄文(早期)	縄文土器(石)	分布調査
5	水戸1	数寄屋	縄文(前期・中・後・晩期)	縄文土器, 厚手土器, すり石, フレーク	分布調査(2005年度)
6	河内田Ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器(早期)	
7	河内田Ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中期)	分布調査(2005年度)にて河内田Ⅴ, 河内田Ⅴ後遺跡を統合し, 範囲調査(2007年度)。
8	河内田Ⅵ	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中期)	分布調査(2005年度)にて河内田Ⅵ, 河内田Ⅵ後遺跡を統合し, 範囲調査(2007年度)。
9	河内田Ⅶ	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2005年度)にて河内田Ⅶ, 河内田Ⅶ後遺跡を統合し, 範囲調査(2007年度)。
10	河内田Ⅷ	数寄屋	縄文	縄文土器(石)	分布調査(2007年度)にて範囲特定。
11	河内田Ⅸ	集落跡	縄文(晩期)	縄文土器(前期), 厚手土器	小規模1区遺跡発掘調査報告書(宮古志連発掘8)。
12	河内田Ⅹ	数寄屋	縄文	縄文土器(中期)	
13	河内田Ⅺ	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)	すり石, 石斧, フレーク
14	河内田Ⅻ	数寄屋	縄文	縄文土器(中・晩期)	石籠
15	河内田Ⅼ	数寄屋	縄文	縄文土器(早期)	
16	河内田Ⅽ	数寄屋	縄文	厚手土器, 縄文土器(中期)	分布調査(2005年度)にて河内田Ⅽ, 河内田Ⅽ後遺跡を統合し, 範囲調査(2007年度)。
17	河内田Ⅾ	数寄屋	縄文	縄文土器(後期)	
18	河内田ⅰ	数寄屋	縄文	縄文土器(中・晩期)	
19	小瀬内Ⅱ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
20	小瀬内Ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器(前期)及び磁器土器(縄文(中・後期))土器	
21	野見野原	キャンプ地	縄文	縄文土器(前期)	
22	乙部	数寄屋	縄文	縄文土器(中期)縄文土器前期土器-特殊器石	平成22年度範囲調査(2013年1月)宮古志連発掘6(300㎡)・2015年1月調査報告書。
23	野見野原	キャンプ地	縄文	縄文土器(中期)	石斧, ユラ
24	野見野原	集落跡	縄文	縄文土器(前期)	
25	青野成1	キャンプ地	縄文	土器, 小瀬内Ⅲとは紀下, 次期, 土器, 完成品, フレーク	
26	青野成2	集落跡	縄文	縄文土器(中期)	青野成2・青野成3・青野成4・青野成5遺跡を統合し, 範囲調査(2007年度)。
27	青野成3	集落跡	縄文	縄文土器, フレーク, 石籠	青野成2・青野成3・青野成4・青野成5遺跡を統合し, 範囲調査(2007年度)。
28	墨津原1	数寄屋	縄文	縄文土器(中・後・晩期)	石籠, 石斧, フレーク
29	乙部野上	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)	石籠, 石斧, フレーク
30	新田	数寄屋	縄文	縄文土器	
31	城之内1	数寄屋	縄文	縄文土器	
32	城之内Ⅱ	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中期)	石籠, 縄文土器前期土器・石器
33	田代野山	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中期)	平野器, 石, 石斧, 石籠, 771目, 伊ノ井
34	本志(田代野山)	数寄屋・城跡跡(石)	縄文(中・後)	縄文土器(前期)	石籠, 土器(前期)
35	野見野原	数寄屋	縄文	縄文土器	
36	三上田	城跡跡(石)	中世	遺物等(7)	分布調査(2006年度)にて発見。
37	木前1	数寄屋	縄文	縄文土器(中期)	石籠
38	木前2	数寄屋	縄文	縄文土器(後)	分布調査(2006年度)にて木前遺跡より名称変更。
39	木前3	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
40	木前4	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2005年度)にて発見。
41	木前5	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
42	森崎遺跡	数寄屋	縄文	縄文土器	平成17年度分布調査で発見。平成18年6月一部調査(発掘調査)。平成18年6月発掘調査の結果報告(2, 9, 5)にて詳細な発掘で遺物, 遺構が明らかになった。
43	六ノ石	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	昭和80年代調査, 東郷土佐助調査(2002年度)・分布調査。
44	河内田ⅰ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
45	奥川上	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
46	小川田ⅰ	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
47	奥川上	数寄屋	縄文	縄文土器(中期)	石籠, 遺物, 埴輪
48	小川田ⅱ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	奥川上遺跡から名称変更, 後継範囲調査(2007年度)・分布調査。
49	小川田ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
50	津田	数寄屋	縄文	縄文土器	昭和80年代調査。
51	津田	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中・後期)	石籠, 石斧
52	川崎(津田)	数寄屋	縄文	縄文土器(前期)	土器, 土器(前期)区画(300㎡)・分布調査。
53	津田	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
54	野見野原	数寄屋	縄文	縄文土器	昭和80年代調査。
55	小川田ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
56	鎌倉1	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
57	小川田ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器, フレーク, 土器, 埴輪	小川田ⅲ遺跡から名称変更, 後継範囲調査(2006年度)・分布調査。
58	小川田ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
59	小川田ⅲ	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
60	高平	数寄屋	縄文	縄文土器(中・晩期)	
61	高平	数寄屋	縄文	縄文土器(中・後期)	石籠, 石斧
62	高平	数寄屋	縄文	縄文土器(中・後期)	石籠, 石斧
63	古田	数寄屋	縄文	縄文土器(前・中期)	石籠, 石斧
64	野見野原	集落跡	縄文	縄文土器, 石籠, 石斧	分布調査(2006年度)にて野見野原跡内中遺跡を統合し, 平成21年度分布調査報告書。
65	乙部ⅰ	集落跡	縄文(古代)	厚手土器, 縄文土器, 土器	2013年度範囲調査にて発見。
66	野見野原ⅰ	集落跡	縄文	厚手土器, 土器, 縄文土器, 石器	2013年度範囲調査(津田)遺跡にて発見。平成21年度報告書。
67	野見野原ⅱ	集落跡	縄文	厚手土器, 土器, 縄文土器	2013年度範囲調査(津田)遺跡にて発見。平成21年度報告書。
68	青野成北ⅰ	集落跡	縄文	厚手土器, 土器, 縄文土器	2013年度範囲調査(津田)遺跡にて発見。平成21年度報告書。
69	野見野原ⅲ	集落跡	縄文	厚手土器, 土器, 縄文土器	2013年度範囲調査(津田)遺跡にて発見。平成21年度報告書。
70	野見野原ⅳ	集落跡	縄文	厚手土器, 土器, 縄文土器	平成20年3月11日(土)田代野山(野見野原)遺跡発掘調査委員会(2)土器調査報告書, 平成20年3月11日(土)田代野山(野見野原)遺跡発掘調査委員会(2)土器調査報告書。
71	野見野原ⅴ	集落跡	縄文	厚手土器, 土器, 縄文土器	平成20年4月2日(土)田代野山(野見野原)遺跡発掘調査委員会(2)土器調査報告書, 平成20年4月2日(土)田代野山(野見野原)遺跡発掘調査委員会(2)土器調査報告書。
72	森崎	数寄屋・城跡跡	縄文(中世)	厚手土器, 土器, 縄文土器	土器の類ともいわれる。昭和90年代調査, 東郷土佐助調査(2007年度)・分布調査(2008年度)にて範囲特定。
73	河内田ⅳ	数寄屋	縄文	縄文土器(晩期)	石籠, 石斧, 水玉
74	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器, 土器	平成21年11月11日(土) 調査発見。
75	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
76	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
77	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて発見。
78	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器, 埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。
79	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	縄文土器, 石籠, 石斧	分布調査(2006年度)にて範囲特定。
80	野見野原ⅴ	数寄屋	縄文	埴輪	分布調査(2006年度)にて発見。

I・II・III遺跡（平成26年度）、向新田III遺跡（平成26年度）、平成27年度には越田松長根I遺跡、重津部I遺跡、乙部野II遺跡の発掘調査が相次いで実施された。これらの調査では、主に縄文時代前期～後期の土器、石器が出土した。

乙部遺跡は、縄文前期前葉大木2a式を主体とした遺跡で、岩手県教育委員会による平成27年度の調査では堅穴住居跡などの遺構に加え、比較的多くの遺物も出土している。遺構の上部には十和田中振テフラ（To-Cu）も認められている。

青野滝北I・II・III遺跡は、青野滝川の北岸の丘陵（海岸段丘）が同川により浸食され形成された谷地形に立地する。3遺跡合せて8,500㎡が調査され、縄文中期後葉～末葉の堅穴住居跡が18棟検出（※Iが15棟、IIが1棟、IIIが2棟）された。加えて、早期中葉や後期初頭～前葉の土器も出土している。

向新田III遺跡は、縄文前期前葉4棟と縄文晩期末葉～弥生前期11棟の堅穴住居跡が検出されている。出土土器は、縄文早期後半、縄文中期の円筒上層式をはじめ、比較的多岐に亘る。

乙部野II遺跡では、縄文後期前半を中心に、縄文前期前葉及び弥生時代前期の堅穴住居跡が多く検出された。特に、縄文後期初頭～前葉期については、本県屈指の住居数である（※現在整理中なことから詳細な棟数の記載は避けることとするが、縄文後期初頭～前葉だけで60棟前後をみる）。

最後に、東日本大震災復興道路建設に関連して近年実施された発掘調査により、田老地区には新知見を発信する遺跡事例が相次いだ。特に、縄文前期前葉、縄文中期後葉～後期前葉、弥生前期においては、複数遺跡から堅穴住居跡が検出されており、上記時期において小本丘陵を舞台とする本地域全体的に、人的活動が展開されたことが明らかになった。特記事項の一つである弥生時代にふれるなら、過去に行われた田老地区の分布調査で水沢I遺跡と向井新田XV遺跡から弥生土器の破片は採取されていたが、集落跡が確認された事例は小堀内I遺跡の調査に先立って行われた昭和54年の試掘調査のみの状況であった。向新田III遺跡や乙部野II遺跡からまとまった資料を得られたことは、当地域における弥生時代の様相を解明する手掛かりに繋がると評価される。

Ⅲ 野外調査・室内整理の方法

1 野外調査方法

今回調査の調査地は、岩手県作成の「二級市道沼の浜青の滝線 宮古市田老沼の浜地区」計画平面図に基づき、路線計画範囲内に調査区を設定した。調査区は、南北約250m、東西約110mにわたり、面積は8700㎡である(第4図)。現況は基本的に山林で、一部が昆布漁の作業場、道路、小川であった。

調査区内には3本の谷がかかっており、本遺跡の地形形成に大きく影響する。北から谷A・谷B・谷Cと呼称する。谷Aは西方の重津部集落方向から南東に延びてきたものが調査地付近で屈曲して北西方向へ転じ、そのまま青野滝川に開く。谷Bは調査地のすぐ西側に発し、真東方向に延びて太平洋の海蝕崖に開く。谷Cは調査地のすぐ南側に発し、ほぼ直線的に南南西方向へ延び、乙部野集落の北を東に延びる深谷に開く。

調査区は前述のように広範囲であったので、谷Aに面する範囲を北調査区、中央の谷Bの北斜面～谷底～南斜面下部の範囲を中央調査区、それ以南で、谷Cに面する部分を南調査区として調査を行うこととした。

調査地内各地点は、大・小メッシュグリッドを設定して呼称した(第4図)。世界測地系の基準点測量成果により、西調査区の北西、 $X = -25140\text{m}$ 、 $Y = 98520\text{m}$ を架空の原点とし、原点を通る座標正東西線(X軸)をIライン、同南北線(Y軸)をAラインとした。Iラインから南方向へ、40m間隔でⅡ・Ⅲ…の順に、Aラインから東へも同様にB・C・D…の順で基準線を設けた。東西・南北基準線の交点は各ラインの名称を用いて呼び(AI・BⅡなど)、交点の南東側の40m四方を大グリッドとし、その名称は、北西の基準線交点の名称をもって代表した(AI・BⅡグリッドなど)。大グリッド内は、大グリッド基準線を起点に4m間隔で、東方向にa・b・c…の順に基準線(Y軸)を設け、南方向にも1・2・3…の順に基準線(X軸)を設け、これらで区画される4m四方の小グリッドを設定した。各小グリッドの呼称は、大グリッドのそれに準じ、大グリッド名称に続けて、4m方眼の北西側基準線交点の名称をもって代表した(AI7kグリッドなど)。

調査開始と共に草木などの雑物撤去を行い、北・中央調査区は調査範囲内に樹木が残った状態であったので、これを伐採し、枝木の整理を行った。伐採・枝木整理は調査と並行して行い、8月中旬には終了した。雑物撤去に続いて各所に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その際のトレンチ箇所やトレンチNoは第4図に示した(※第4図の等高線は現況地形段階のものであるが、基準点は表土除去段階で設置したことから、基準点の標高値とは矛盾するものがあることをお断りしておく)。その結果、遺跡の基本層序はI～VI層に分層可能(詳細はIV-1基本層序参照)と判断され、そのうち、主に遺物を包含するのはⅡ・Ⅲ層であることが把握できた。また、南調査区では、トレンチ調査で遺物がほとんど出土せず、遺構も確認されなかった。このため、岩手県教育委員会生涯学習部文化課埋蔵文化財担当職員の見地立会により、南調査区は8月21日に部分終了確認を仰ぎ、調査を終了とし、残土置き場とした。その際に北調査区は、谷底の平場にトレンチ調査を実施し、その結果次第で調査方針を決定することとした。9月中旬に同区のトレンチ調査を終了し、遺構・遺物ともに未確認であったことから、調査終了となった。

本調査対象とした中央調査区では、試掘トレンチの所見によって、Ⅱ層以上は重機を用いて掘削することが可能と判断し、地表面からⅡ層下面までを重機によって掘り下げた。その後の掘削作業は基

本的に人力により、遺物包含密度の低い箇所はスコップ、高い箇所は移植ヘラを用いて掘り下げ、同時に遺物の捕集に努めた。層理面においては、鋤簾・両刃鎌・移植ヘラなどを用いて遺構検出を行った。検出された遺構は、遺物の出土に注意しながら、移植ヘラなどで慎重に掘削した。遺構の規模に応じて4分法と2分法を使い分け、適宜にベルトを設定して土層観察を行いながら進めた。また、遺構の範囲や遺構間の重複関係の把握が困難な場合は、サブトレンチ掘削による地層の観察を行って対処した。

遺構の平面図作成は、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。遺構および地層断面図の作成は、オートレベルを用いた手測りで行った。これらの測量の基準点は、前述の世界測地系基準点である。現場の写真撮影については、キャノンEOS 50D（デジタルカメラ）を中心に使用した。

必要な記録保存が終了した平成27年11月12日に、岩手県教育委員会生涯学習文化課の終了確認を仰ぎ、若干の補足調査の後、同11月20日に機材等の撤収作業を行って全作業を終了した。

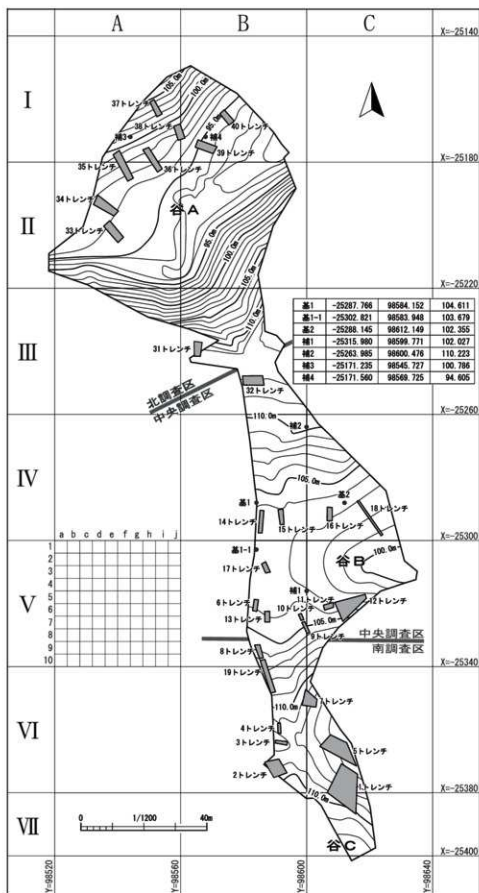
2 室内整理と報告書作成

本書の原稿執筆・表作成はⅡ章を佐々木が、それ以外は星・高橋が分担した。図版の編集作業は對馬が担当し、全体の編集は星が行った。

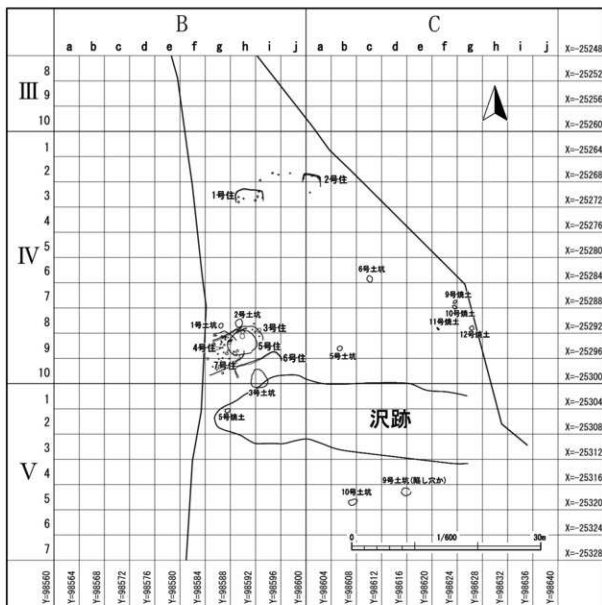
遺構図版は、電子平板のデータで作成した平面図を整理・修正した第2原図を作成し、現場で手測りにより作成した断面図と合わせてデジタルトレースして作成した。図版縮尺は、1/30、1/50、1/60など、遺構の性格に応じたものを採用した。

遺物の整理について、土器・陶磁器類は水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②遺構の時期推定になる層位的資料、③口縁部資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。土製品・石器は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。遺物図版は、手トレースによって作成し、土器類1/3、土製品1/2、剥片石器2/3、礫石器・石製品1/3で掲載した。石器類で磨痕や敲打痕が観察されるものはスクリーンで明示した。遺構写真図版は、本文や遺構図版と同様の掲載順とした。

報告書の編集は、編集ソフトIndesignを用いて行い、遺物実測図の一部を台紙貼りで入稿した。他はすべてデジタルデータで入稿し、印刷・製本を専門業者に委託して行った。



第4図 遺跡全体図・グリッド図



第5図 中央調査区遺構配置図

IV 検出遺構

重津部I遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡7棟、土坑7基、焼土遺構5基、柱穴状土坑5個である。遺構の時期は縄文時代前期のものが主体で、土坑には一部弥生時代のものもある。これらの遺構はすべて中央調査区で発見され、沢跡（谷B※II章を参照）をはさんで、谷の南向き斜面と北向き斜面の下方（沢跡寄り）に立地していた。III章で述べたとおり、調査区内には3本の谷がかかっており、北から谷A・谷B・谷Cと呼称する。北調査区内には谷Aの谷底と北斜面（南向き）と南斜面がかかっており、谷底の標高は92m、北斜面の最高標高は約103m、南斜面の最高地点は約112mで、その南は谷Bとなる。中央調査区内には谷Bの北斜面と谷底、南斜面がかかっており、谷底の標高は約100m、南斜面の最高所は115mで、その南は谷Cとなる。南調査区には谷Bの南斜面と谷Cの谷頭部がかかっている。

1 基本層序

表土層から地山層までを基本的に以下の6層単に分層した（第6図、写真図版6・7）。

I層：盛土層や腐葉土などからなる現地表構成層である。中央調査区では、2.5Y6/2灰黄色礫質シルトからなる盛土層、それ以外では現山林中に形成されたしりの悪い腐葉土層であった。層厚は、中央調査区谷底部で最も厚く、137cmを測る。それ以外では20cm程度であった。盛土は、おもに中央調査区の南向き斜面の上方を削って平地を造成するとともに、谷底に盛土をしたものとみられる。本層には肥前磁器の染付片が含まれ、形成された年代は近世以降に下る。

II層：10YR2/1黒色シルトからなる古土壌で、いわゆる黒ボク層である。調査地ほぼ全域に分布し、層厚は15cm前後であった。下位のIII層は縄文時代前期の地層であるので、本層の年代の上限は概ね縄文時代中期に求められ、下限については、沢内に堆積した本層中から平安時代の土師器が出土していることから、古代に求められる。

III層：5Y5/2灰オリブ色シルト質からなる古土壌で、中央調査区に顕著に分布していた。分布域では平均して15cmの層厚をもち、中央調査区の谷底付近では最大で40cmほどに堆積していた。土色は暗色を呈するが、上・下位のII・IV層ほどではなく、判別は比較的容易であった。層中には中振火山灰（本稿では以後To-Cuテフラと呼ぶ）の偽礫が混じることから縄文時代前期の地層である。中央調査区ではTo-Cuテフラの偽礫（10YR6/8明黄褐色テフラ）が濃集する箇所があり、こうした部分については、テフラを含まないIII層上部と、テフラを含むIII層下部とに分離し、分離ができない箇所についてはIII層として一括して扱った。

IV層：10YR5/1褐灰色粘土質シルト～10YR3/1黒褐色シルトからなる古土壌である。拳大の自然礫を多く含む特徴がある。中央調査区の最下部、沢に近い箇所を中心に分布しており、層厚は最大で20cmほどであった。III層とともに、中央調査区の沢を埋積する主要な堆積物を構成する。縄文前期の土器を含み、高且つTo-Cuテフラより古い地層である。

V層：10YR5/2灰褐色粘土質シルトからなり、地山層上部が草木根の擾乱を受けた部分である。調査地全域に分布しており、層厚は最大で15cmほどであった。

VI層：10YR6/6明黄褐色～10YR6/4にぶい黄褐色シルトからなる地山層である。

2 沢跡 (第5・6図、写真図版5)

【位置・検出状況】中央調査区の最も標高が低い箇所では沢地形が検出された。谷Bと呼称した谷の谷底部分に当る。中央調査区の地形は北・西・南方へはいずれも上り勾配の斜面になっており、東方のみ開けている。3方から雨水が流入し、東方へ流れ下ることによってできた浸食谷(沢)である。谷頭付近と南北方向のB・V・C・V大グリッド境界線上にトレンチを設定し(以後、谷頭トレンチと南北トレンチと呼称)、堆積状況と遺物の包含状況を調査した。

【平面形・規模】谷頭はB・V g2グリッドに求められ、ここから真東方向へ延びる。現地形を参考にすれば、谷Bはそのまま直線的に東へ延びて海蝕崖の上方に開くとみられる。検出した沢の幅は10m前後で、深さは、南北トレンチでは検出面以下(以下同)2.1mまで掘削したが底に達しなかった。谷頭はほぼ直角に近く急激に落ち込み、約1mの深さで沢底に達した。

【堆積状況】両トレンチの間では堆積状況に大きな違いがみられた。南北トレンチでは、上位に黄褐色砂質シルト～シルト質粘土(図中のⅢ層)が堆積し、下位には黒褐色シルト質粘土(図中のⅣ層)が堆積していた。両層とも土壌化が著しかったが、いずれも極細粒砂～シルト質粘土からなるラミナの薄層がみとめられ、陸上部から土壌が流入し、その後、沢の中で古土壌が形成されたものと考えられた。層相から、上位層は陸上部のⅢ層に、下位層は同Ⅳ層に起源するものと判断された。一方、谷頭トレンチでは、上位に黒色を基調とするシルト層(図中の1～3層)が堆積し、下位に地山層偽礫を多く含む明黄褐色シルト層(図中の4層)があって、その下が地山層であった。4層に含まれる地山層の偽礫にはおよそ人力では形成しえない大きさのものが含まれており、倒木による地層の攪乱がその原因と考えられた。沢岸の斜面にも部分的にオーバーハングした箇所がみられ、これも樹木根による変形とみられた。上位の黒色シルトは、層相からみて陸上部のⅡ層に酷似しており、倒木によってできた大きな窪みにⅡ層が流入して埋積したものと考えられた。つまり、谷頭付近でも南北トレンチと同様にⅢ・Ⅳ層の堆積によって沢がほぼ埋まった状態に樹木が繁茂し、これらが倒れたり腐朽したりしてできた跡にⅡ層が最堆積したと考えられるのである。

【遺物】沢内に堆積したⅡ層からは縄文前期前葉の土器から古代の土師器まで、時期幅が広く出土した。特記事項として、絶対量は少ないが弥生時代後期の土器が特徴的に出土している。遺物は弥生時代や平安時代の土器を優先して掲載した。

【時期】縄文時代前期に埋没した後、古代に倒木などによる変形を受けたものである。

3 竪穴住居

1号住(第7図、写真図版8)

【位置・検出状況】1号住の西約10m、B・IV h3グリッドに位置する。I層を除去した後、VI層の上で検出した。遺構上面と斜面下側に当る住居の南側に、土壌の流出などによって失われている。

【平面形・規模】残存部分の平面形は概ね方形を呈し、南部を失っている。残存規模は、東西4.40m、南北1.96mである。

【周壁・床面】竪穴の周壁は北辺と東・西の一部で検出された。立ち上り高は、最も良好に遺存する北辺で10cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】竪穴内の埋土は10YR4/6褐色粘土であった。

【炉】床面上で炉は検出されなかった。

【柱穴】堅穴内に7基が検出された（PP 1～7）。いずれも直径15～30cm、深さも10～20cmで、壁沿いのPP 1～4は主柱穴の可能性がある。

【遺物】（第21図1写真図版19）土器20gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器（1）を掲載した。

【時期】出土遺物などから、本遺構の年代は縄文時代前期前葉と推定される。

2号住（第8図、写真図版9）

【位置・検出状況】中央調査区の南向き斜面の上方、C IV a2グリッドに位置する。I層を除去した後、VI層の上面で検出した。遺構上面と斜面下側に当る住居の南側は、土壌の流出などによって失われている。

【平面形・規模】残存部分の平面形は整った方形を呈し、南部を失っている。残存規模は、東西285m、南北152mである。

【周壁・床面】堅穴の壁は北辺と東・西の一部で検出された。周壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する北辺で16cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土の遺存状況は全体的に不良で、北壁側に黒褐色シルトが薄く残存するのみである。地山層起源の偽礫の混入具合から人為堆積層の可能性もある。

【炉】床面上で炉は検出されなかった。

【柱穴】堅穴の北辺沿いに3基、西辺沿いに1基が検出された（PP 1～4）。いずれも直径30cm前後、深さ20cm以上はあり、主柱穴である。北辺中央のPP 3に対向する位置にはPP 5が検出された。これが本住居跡に伴うものとみれば、復元南北長約3mを得ることができ、約3m四方の堅穴住居が復元できる。

【遺物】（第21図2～5、写真図版19）土器153g、剥片石器3点（石鏃2点、コア1点）、礫石器1点（礫片スクレイパー）、チップ・フレーク67.3gが出土した。

【掲載遺物】このうち土器（2～5）を掲載した。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉と推定される。

3号住（第9～11図、写真図版10～12）

【位置・検出状況】中央調査区の南向き斜面の下方、B IV g9～h9グリッドに位置し、調査区西壁にかかって検出された。To-Cuテフラ偽礫を含むIII層を除去後、IV層をベースにして検出された。遺構は調査区外の西へ続く。

【平面形・規模】長楕円形を呈するとみられ、検出部分の規模は、長軸方向10.26m、短軸方向4.80mである。長軸の方位は南西～北東方向で、斜面の等高線に平行している。いわゆるロングハウスとみてよい。

【周壁・床面】堅穴の周壁は北側と東側の一部で検出され、南側は土壌流出のため、ほとんど残っていなかった。立ち上り高は、最も良好に遺存する北側で36cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】堅穴内の埋土もほとんどが流失していたが、10YR3/1黒褐色シルト（園中の1層）の上位にIII層が堆積していた。

【炉】住居内で7か所の焼土が確認された。このうち、焼土1～3とは北側の堅穴に平行して並び、

焼土6~7は竪穴中央から南側に散在していた。また、竪穴外で検出された焼土4も竪穴北側に並ぶ位置にあり、後述するように住居を東へ増築した際に住居内に営まれた1基とみられる。これらの焼土は、住居床面に築かれた地床炉で、平面形が径30~80cmの円形ないし不整な楕円形を呈し、厚さ2~12cmで床面が焼けて赤変していた。

【柱穴】 おもに周壁沿いに巡るかたちでPP1~18が検出された。周壁から離れたPP15・16は小規模で主柱穴とはみられない。周壁沿いの柱穴は、直径20cm、深さ20~30cm程度のものが多く、傑出して大きなものはない。住居内側に傾斜しているものはなく、柱は直立していたものとみられる。柱上部で桁材を受け、そこに竪穴外から垂木をかけて屋根を支えたものであろう。PP1は竪穴外にあり、住居東部を拡張した際の柱穴とみられるが、これに連続する柱穴および拡張後の周壁は見出せなかった。

【遺物】 (第21~24図6~65第33図301~309第38~40図351~369第46図411、写真図版19~21・27・31~32・36) 土器8,039g、剥片石器28点(石鏃2点、石匙4点、スクレイパー8点、力持型スクレイパー12点、Uフレ2点)、礫石器221点(磨製石斧12点、特殊磨石5点、特殊磨石片2点、磨石4点、磨石片150点、敲磨器5点、敲石8点、敲石片8点、石皿2点、台石2点、礫片スクレイパー7点、円礫1点、礫器15点)、石製品1点(軽石製石製品)、チップ・フレック4336gが出土した。

【掲載遺物】 そのうち土器(6~65)、石器(301~309・351~369)、石製品(411)を掲載した。

【時期】 出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉大木2b式期と判断される。加えて、To-Cuテフラ降下期より古い。

【その他】 大木2b式と白座式の共伴例となる資料が得られた。

4号住(第12図、写真図版13)

【位置・検出状況】 3号住の下位、西側に重複して検出された。調査区西壁にかかっており、遺構の西端は調査区外に続く。本遺構の南部は7号住を切っており、層位的に同住居より新しい。

【平面形・規模】 ほほ正東西方位をとる長楕円形を呈するとみられ、検出部分の規模は、長軸方向2.85m、短軸方向3.33mである。長軸の方位は斜面の等高線に平行している。これもいわゆるロングハウスで、その東端を捉えたときとみてよいであろう。

【壁・床面】 竪穴の壁は北側の一部で検出され、南側は土壌流出のため、残っていない。周壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する部分で25cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】 竪穴内の埋土は、10YR4/2灰黄褐色シルト(図中の1層)、10YR6/6明黄褐色粘土質シルト(同2層)、10YR3/1黒褐色極細粒砂(同3層)であった。いずれも偽礫構造がみられ、人為的に埋められたものと考えられた。

【炉】 検出した範囲内では炉はみとめられなかった。

【柱穴】 床面上と周壁の一部に36基の柱穴が検出された(PP20~56)。平面形は円形で、直径は20~30cm、深さ10~20cmほどのものが多く、斜めに掘られたものはなかった。これらには弧状の配列を複数見出すことができた。つまり、北西から、PP20・21・22・23・27・36・40・52・48が外側を巡り、内側に、PP53・29・31・38・41・44が巡る。さらにPP53から外側へ派生して、PP30・37・43が中間を巡る。こうした弧状の配列は、この部分が住居の妻側に当り、それが複数見られることは少なくとも2回の増築があったことを示している。

【遺物】(第24図66～69・第34図310～313・第40～41図370～374、写真図版21・27・32～33) 土器654g、剥片石器6点(石匙2点、力持型スクレイパー4点)、礫石器42点(磨製石斧3点、磨石1点、磨石片28点、敲磨器3点、敲石片1点、台石2点、礫片スクレイパー1点、礫器3点)、チップ・フレック47.2gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(66～69)、石器(310～313・370～374)を掲載した。

【時期】出土遺物からは縄文時代前期前葉大木2a式である。重複遺構との関係からは3号住より古く、加えてTo-Cuテフラ降下期より古い。

【その他】3・4号住出土遺物として、(第41図375、写真図版33)土器156g、剥片石器1点(力持型スクレイパー)、礫石器10点(特殊磨石1点、磨石片7点、敲石1点、礫器1点)、チップ・フレック32.9gを捕集し、そのうち石器(375)を掲載している。

5号住(第13図、写真図版14)

【位置・検出状況】3号住の東側でV層をベースとして検出された。3・4号住に切られており、層位的に両住居より古い。

【平面形・規模】平面形は不整な円形を呈し、東側は遺存していなかった。残存部分の規模は、東西3.70m、南北3.75mである。

【壁・床面】壁の壁は東側以外で検出され、周壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する北側で45cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。

【堆積土】壁内の埋土は、上位と下位に分層される(図10)。埋土上位の図中IV層は、垂角礫を含む褐色シルトが堆積する。この1層は基本層序IV層に相当し、To-Cuテフラ降下期より確実に古い土層である。埋土下位の図中3・4層は、にぶい黄褐色粘土質シルトで基本層序V層に相当する。人為的に埋められた可能性はあるが、明確には特定できなかった。

【炉】検出した範囲内では炉はみとめられなかった。

【柱穴】床面上と周壁の一部に12基の柱穴が検出された(PP1～12)。PP1はほぼ中央にあって、平面形は円形、直径約30cm、深さ28cmを測り、他よりやや大型で、中央柱穴とみられる。他はほぼ周壁に沿って巡り、規模は小規模で、直径20cm程度、深さ15cmほどであった。斜めに掘られたものはない。

【遺物】(第24図70～77・第34図314・第41～42図376～380、写真図版21・27・33)土器994g、剥片石器3点(力持スクレイパー2点、Uフレ1点)、礫石器43点(磨製石斧3点、特殊磨石片1点、磨石2点、磨石片25点、敲磨器1点、敲石1点、敲石片5点、礫器3点、礫片スクレイパー1点、板状礫1点)、チップ・フレック20.4gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(70～77)、石器(314・376～380)を掲載した。

【時期】出土遺物からは縄文時代前期前葉大木1式である。遺構の重複関係からは3・4号住より古い。これらの状況から前期前葉の中でも前半期である大木1式期と推定される。

【その他】3・5号住出土として、土器800g、礫石器7点(磨石1点、磨石片1点、敲磨器1点、敲石1点、敲石片1点、礫器1点、礫片スクレイパー1点)を捕集している。さらに、3～5号住出土として、(第24図78～80第34図315～316第46図412～414、写真図版21・28・36)土器6470g(袋27未計量)、剥片石器9点(石匙2点、スクレイパー2点、コア1点、力持型スクレイパー3点、Uフレ1点)、礫石器100点(磨製石斧6点、磨石13点、磨石片57点、敲磨器2点、敲石5点、敲石片2点、石皿片1点、台石1点、礫器4点、礫片スクレイパー8点、円礫1点)、石製

3 竪穴住居

品3点(石刀2点、石棒1点)、チップ・フレーク126.6gを捕集し、そのうち、土器(78～80)、石器(315～316)、石製品(412～414)を掲載している。

6号住(第14・15図、写真図版15)

【位置・検出状況】5号住の南、BVh10グリッド～BVj1グリッドに位置する。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。本遺構の北西側で7号住を切っていた。

【平面形・規模】斜下方に当る南側を失い、北側が遺存していた。平面形は隅丸の長方形とみられ、南西～北東方向に長軸の方位をとる。現存部分は長軸方向で7.68m、短軸方向で1.80mを測る。

【周壁・床面】竪穴は北半部が検出され、周壁の立ち上り高は最大で15cmほどであった。床面はⅣ層および地山層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。

【堆積土】竪穴内の埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト(図中の1層)、10YR2/3黒褐色シルト(図中の2層)、10YR3/3暗褐色～10YR2/3黒褐色シルト(図中の3層)であった。

【炉・柱穴】検出した範囲内では炉はみとめられなかった。竪穴の周囲では14個の小ピットが検出された。いずれも直径15～45cm程度の円形で、深さは15cmほどのものが多い。PP12～14以外は竪穴内の位置に当り、本住居跡の柱穴である可能性がある。PP1、PP2～4、PP9～11などは隅柱であるのかもしれない。

【遺物】(第24～26図81～122・第34図317～321・第42～43図381～389・第46図415、写真図版21～22・28・33～34・36)土器8,151g、剥片石器21点(石鎌5点、スクレイパー1点、力持型スクレイパー13点、Uフレ2点)、礫石器105点(磨製石斧5点、特殊磨石4点、特殊磨石片1点、磨石11点、磨石片57点、敲磨器9点、敲石5点、敲石片1点、石皿1点、礫器7点、礫片スクレイパー3点、円礫1点)、石製品1点(石棒)、チップ・フレーク127.9gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(81～122)、石器(317～321・381～389)、石製品(415)を掲載した。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉である。

7号住(第16図、写真図版15)

【位置・検出状況】6号住の北西側(斜面上側)に位置する。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。

【重複関係】本遺構は4・6号住に切られていた。

【平面形・規模】竪穴の北西隅部のみが検出された。現存部分は東西1.24m、南北0.96mを測る。

【周壁・床面】周壁の立ち上り高は30cmほどであった。床面は地山層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。

【堆積土】竪穴内の埋土は10YR2/3黒褐色シルトであった。

【炉・柱穴】検出範囲内の床面では炉は検出されなかった。床面上と周壁上で3基の柱穴(PP1～3)が検出された。また、南に約3m離れてPP4が検出されたが、全体の柱配置を想定するには至らなかった。

【遺物】(第26図123・第43図390、写真図版23・34)土器55g、礫石器6点(磨製石斧1点、磨石片4点、敲石片1点)、チップ・フレーク6.4gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器(123)、石器(390)を掲載している。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は縄文時代前期前葉である。

4 土 坑

最終的には7基の土坑を遺構登録した。現場時はさらに3カ所の土坑状プランを検出し、それぞれ4号・7号・8号土坑と命名し精査を行ったが、精査途中で風倒木根などであることが判明した。それらは、遺構登録から除外した。

1号土坑（第17図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区BIV g8グリッドに位置し、4号住の北に当る。II層の除去後、IV層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、長軸方向は0.81 m、短軸方向は0.58 m、深さは8 cmである。

【壁・底面】断面形は皿状で、底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色シルト（II層）であった。

【遺物】土器54 g、礫石器2点（磨石片1点、敲石片1点）が出土した。

【時期】出土土器は磨滅した小破片で時期の特定ができない。検出面からは時期の上限は縄文時代前期よりは新しいことは分かるが、時期の下限については不明である。

2号土坑（第17図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区BIV h 8グリッドに位置し、1号の東に当る。II層の除去後、IV層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、長軸方向は1.36 m、短軸方向は1.15 m、深さは18 cmである。

【壁・底面】断面形は皿状で、底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色粘土質シルト（II層）であった。

【遺物】（第26図124～127・第35図322・第43図391、写真図版23・28・34）土器763 g、剥片石器1点（力持型スクレイパー）、礫石器9点（磨石片6点、敲石1点、敲石片1点、礫片スクレイパー1点）、チップ・フレーク26 gが出土した。

【掲載遺物】そのうち土器（124～127）、石器（322・391）を掲載した。

【時期】出土遺物から、本遺構の年代は弥生時代後期と推定される。

3号土坑（第17図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区BIV h10グリッドに位置し、II層の除去後、III層上面で検出した。本遺構は沢跡の北部を切っている

【平面形・規模】平面形は不整な円形で、東西3.26 m、南北3.44 m、深さは約50 cmである。

【壁・底面】底面はほぼ平坦、壁は徐々に傾斜を増して立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色～褐灰色のシルト～粘土質シルト（図中の1～3層）からなり、いずれも周辺から泥質土が流入して堆積したものとみられた。また、最上位には焼土が投入されていた。

【遺物】（第35図323・第43図392、写真図版28・34）土器100 g、剥片石器1点（力持型スクレイパー）、礫石器28点（磨製石斧2点、磨石4点、磨石片11点、敲磨器3点、敲石片2点、凹石1点、礫器4点、円礫1点）が出土した。

【掲載遺物】石器（323・392）を掲載した。

4 土坑

【時期】明確には時期を特定できない。出土遺物からは縄文時代前期前葉の可能性がある。

5号土坑（第18図）

【位置・検出状況】中央調査区C IV b9 グリッドに位置する。II層の除去後、III層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は円形で、東西0.83 m、南北0.70 m、深さは10 cmである。

【壁・底面】底面は平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒褐色細礫混じりの粘土質シルトであった。

【遺物】（第43図393、写真図版34）土器10 g、礫石器1点（礫片スクレイパー）が出土した。

【掲載遺物】そのうち石器（393）を掲載した。

【時期】明確には時期を特定できない。出土遺物からは縄文時代前期前葉の可能性がある。

6号土坑（第18図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区北斜面の上方、C IV c6 グリッドに位置する。I層の除去後、VI層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は不整な楕円形で、長軸方向は1.12 m、短軸方向は0.89 m、深さは15 cmである。

【壁・底面】断面形は皿型、底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は褐色シルトが主体で、偽礫構造がみとめられ、人為的に埋め戻されていた。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。

9号土坑（第18図、写真図版16）

【位置・検出状況】中央調査区南斜面、C V d5 グリッドに位置し、沢の北岸に当る。II層の除去後、VI層上面で検出した。検出面からはTo - Cuより古期と判断される。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、長軸方向は1.53 m、短軸方向は1.23 m、深さは94 cmである。

【壁・底面】底面は平坦、壁の下部は急角度で立ち上がり、上方で緩やかになる。

【堆積土】埋土は、堆積状況からみて大きく3層に区分できた。上部は偽礫構造が顕著な黒褐色シルトを主体とする人為堆積層（図中の1・2層）、中部は壁面からの崩落土を挟みながら、周囲から徐々に泥質土が流入した自然堆積層（図中の3～7層）、下部は崩落土と加工時形成層であった（図中の8～10層）。形態からみて、狩猟用の陥し穴の可能性がある。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。また用途は陥し穴の可能性がある。

10号土坑（第18図、写真図版16）

【位置・検出状況】9号土坑の西、C V b5 グリッドに位置する。II層の除去後、VI層上面で検出した。

【平面形・規模】平面形は不整な楕円形で、長軸方向は1.34 m、短軸方向は0.87 m、深さは25 cmである。

【壁・底面】断面形皿状、底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】埋土は黒色シルト（基本層序II層）と暗灰黄色粘土質シルト（図中の1・2層）であった。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。

5 焼 土

5号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区B V g2グリッドに位置し、沢跡内のⅡ層中で検出された。焼土の分布は濃密ではなく、投棄された焼土の可能性もある。

【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は81×57cm、焼土層の厚さは4cmである。

【遺物】なし。

【時期】弥生時代若しくは古代の可能性のあるものの、時期の特定はできない。

9号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区の東端、C IV f7グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は63×42cm、焼土層の厚さは12cmである。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、竪穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

10号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】9号焼土のすぐ南に位置する。検出層位はⅢ層の上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は不定形である。規模は東西71×南北66cm、焼土層の厚さは5cmである。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、竪穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

11号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】10号焼土の南西C IV f8グリッドに位置し、10号焼土の南西に隣接する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は不整な楕円形である。規模は51×14cm、焼土層の厚さは4cmである。

【遺物】礎石器1点（磨石片）が出土した。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、竪穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

12号焼土（第19図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区の東端際、C IV g8グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。

【平面形・規模】平面形は不整な隅丸方形である。規模は62×61cm、焼土層の厚さは10cmである。

【遺物】なし。

【時期】時期の詳細は特定できないが、縄文時代に帰属する。推測の域は出ないが、竪穴住居跡と同じ縄文時代前期前葉の可能性も考えられる。

6 柱穴状土坑

柱穴状土坑群（第20図、写真図版17）

【位置・検出状況】中央調査区の1・2号住の間に当るBⅣi2・BⅣj2・BⅣh3グリッドで、5基の柱穴状土坑が検出された（柱穴状土坑1～5）。これらは、I層を除去後、Ⅳ層上面で検出され、1号柱穴状土坑は1号住埋土を切って掘られていた。

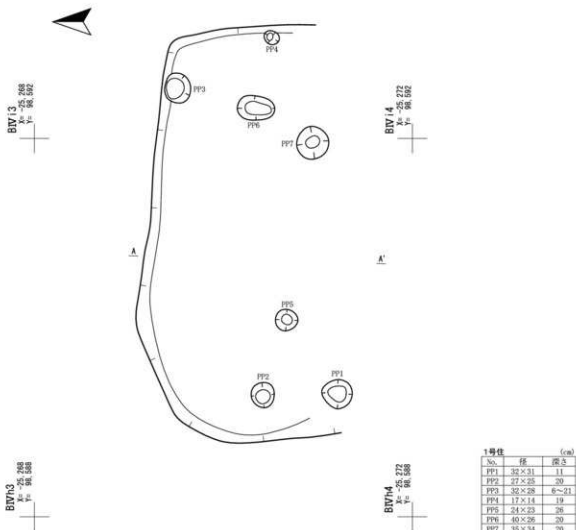
【平面形・規模】平面形は概ね円形で、直径20～35cm、深さ20cmほどのものが多い。

【柱穴・埋積土】明確に柱痕跡がみとめられたものはなく、建物も復元できなかった。

【遺物】出土遺物はなく、詳細な所属時期は不明であるが、切合い関係から1号住よりは新しい。

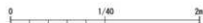
【時期】時期の詳細は特定できないが、時期の上限は1号住との重複関係から縄文時代前期前葉より新しい。埋土の様相からは判断が難しいが、あるいは縄文時代より新しい時期（古代？）の可能性もある。

1号住



1号住 (A-A')

1 10YB4/6褐色粘土 粘性中 締りやや密 土層片微量混入



第7図 1号住

2号住

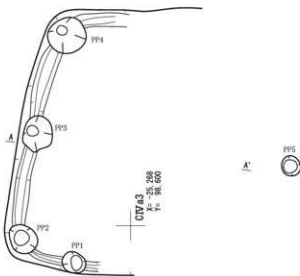
CIV22 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34

CIV23 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34



CIV22 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34

CIV23 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34



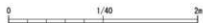
2号住 (m)		
No.	径	長さ
PP1	26×22	27~28
PP2	33×26	29~31
PP3	39×32	29~43
PP4	40×37	29~43
PP5	22×20	13

2号住 A ベルト

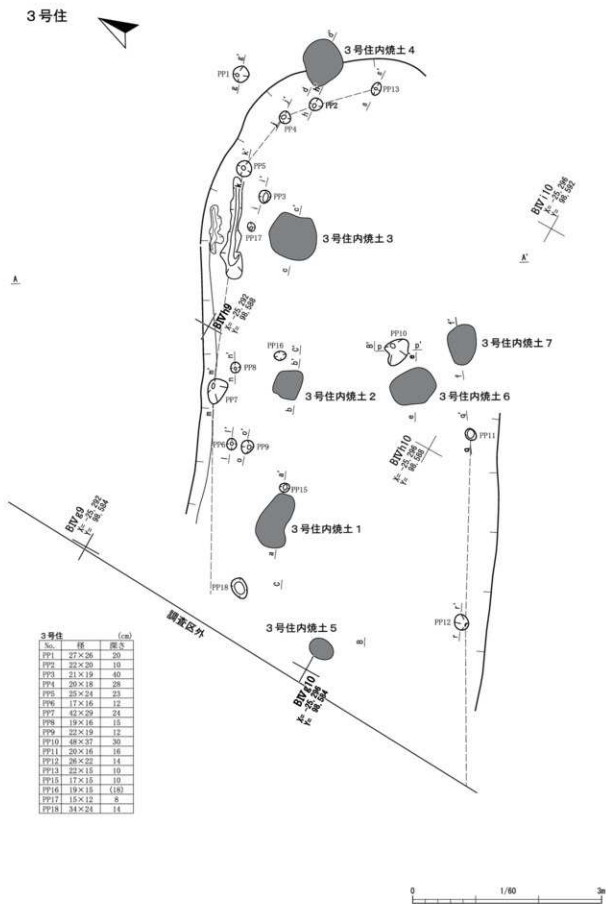


2号住 (A-A')

1 10192/2断面化粧シルト 粘性土や砂 継り中 黄褐色粘土ブロック3%混入 (要人為充填)



第8図 2号住

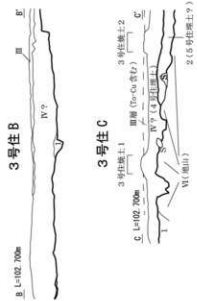


第9図 3号住 (1)



3号住 (A-A')

Ⅲ 2. 5YR6/4C2.5黄褐色粘質シルト	粘性弱	細りやや硬	細礫1%・Te-Cu:偽礫15%混入	3号住埋土	基本層序
Ⅳ 10YR4/2灰黄緑~10YR4/1靑灰色シルト	粘性弱	細りやや硬	赤褐色クサリ織(Φ3mm以下)2%混入	基本層序	基本層序
V 10YR5/4C1.5黄褐色中礫混じり粘土質シルト	粘性やや硬	細りやや硬	亜角礫(Φ50mm以下)2%混入	基本層序	基本層序
Ⅵ 10YR6/6暗黄褐色粘土質シルト	粘性やや硬	細りやや硬	→やや強(下段) 花崗岩クサリ織(Φ10mm以下)1%以下	基本層序	基本層序
1 10YR3/1黒褐色シルト	粘性弱	細りやや硬	赤褐色クサリ織(Φ3mm以下)5%・炭1%混入	3号住埋土	自然層序
2 10YR4/1靑灰色粘土質シルト	粘性やや硬	細りやや硬	赤褐色クサリ織(Φ3mm以下)5%・炭1%混入	3号住柱穴	人為層序
3 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト	粘性弱	細りやや硬	花崗岩クサリ織(Φ30mm以下)5%混入	5号住埋土	人為?
4 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト	粘性弱	細りやや硬	花崗岩クサリ織(Φ50mm以下)5%混入	5号住埋土	人為?

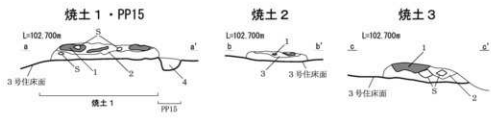
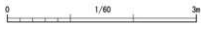


3号住 (B-B')

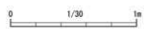
Ⅲ 2. 5YR6/4C2.5黄褐色粘質シルト	粘性弱	細りやや硬	細礫1%・Te-Cu:偽礫10%混入	4号住埋土	地山
Ⅳ? 10YR4/1黒褐色粘質シルト	粘性弱	細りやや硬	中~細礫7%混入	4号住埋土	地山
1 10YR4/2灰黄褐色シルト	粘性弱	細りやや硬	細礫2%混入	4号住埋土	地山

3号住 (C-C')

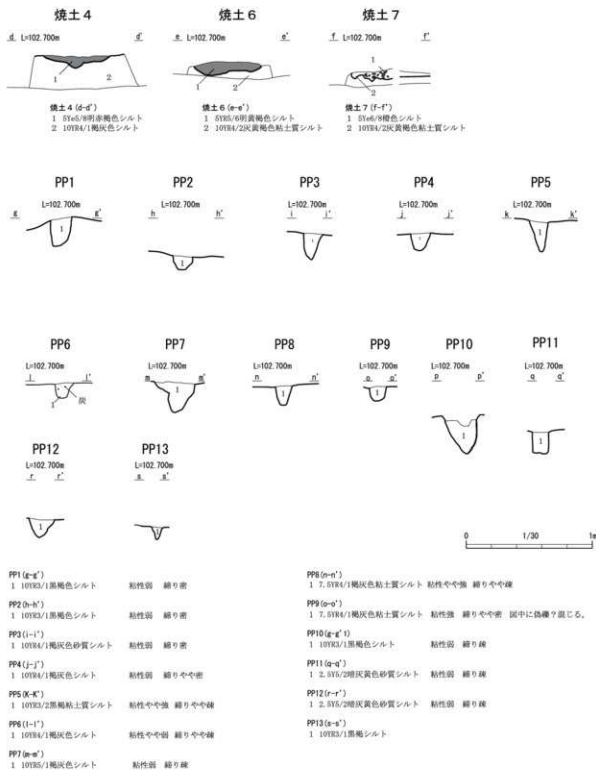
Ⅳ? 10YR4/2灰黄褐色中礫質シルト	粘性弱	細りやや硬	中~細礫5%混入	4号住埋土	地山
Ⅵ 10YR5/6黄褐色粘質シルト	粘性やや硬	細りやや硬	細礫5%混入	木の残片	人為?
1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト	粘性弱	細りやや硬	中礫2%混入	5号住埋土?	人為?
2 10YR5/4C1.5黄褐色砂質シルト	粘性弱	細りやや硬	中礫2%混入	5号住埋土?	人為?



焼土 1 (a-a')	焼土 2 (D-b')	焼土 3 (C-C')
1 2. 5YR6/6褐色シルト	1 2. 5YR6/8褐色シルト	1 5YR6/6褐色シルト
2 10YR4/1靑灰色シルト	2 10YR4/2灰黄褐色シルト	2 10YR4/3暗褐色砂質シルト
4 10YR3/1黒褐色シルト	3 10YR4/2灰黄褐色シルト	

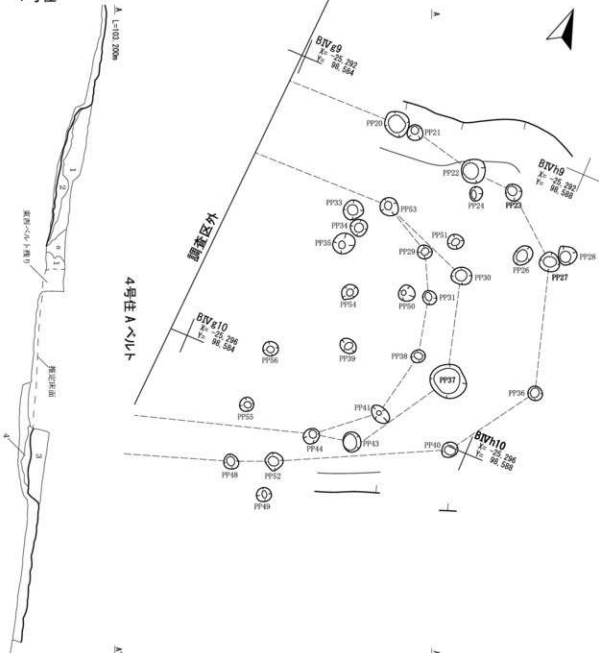


第10図 3号住 (2)



第11図 3号住 (3)

4号住



4号住(体A)

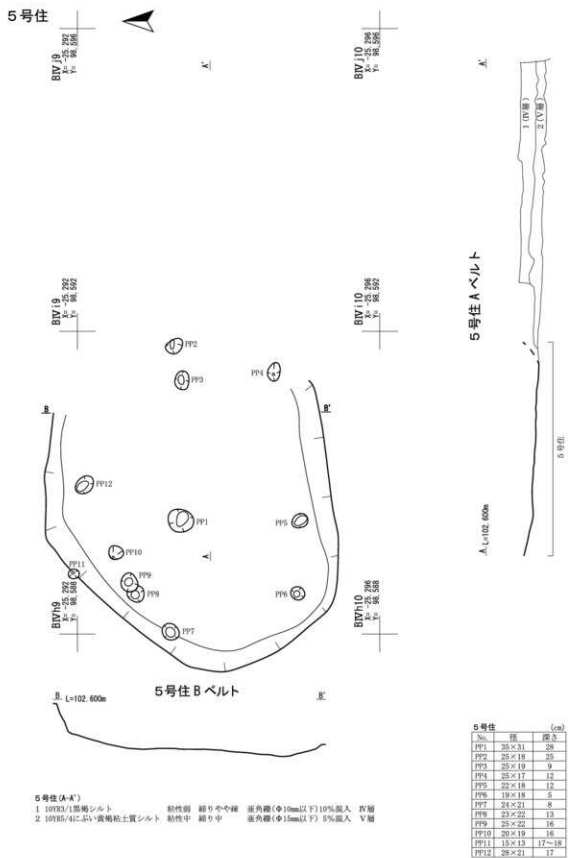
- 1. 10YR/2.0R黄褐色シルト 粘性や中弱 細りや中粒 タナリ層(Φ 5mm程度)1%以下混入
- 2. 10YR/6.0R黄褐色粘土質シルト 粘性中 細り層 白色層(Φ 10mm程度)1%程度混入
- 3. 10YR/7.0R黄褐色細砂 粘性弱 細り層 白色層(Φ 10mm以下)3%程度混入
- 4. 10YR/7.0R黄褐色粘土質シルト 粘性や中弱 細り中 白色層(Φ 3mm程度)1%程度混入
- 5. 10YR/7.0R黄褐色細砂 粘性弱 細り層 微細な粘土(1%以下)

- 4号住埋土
- 4号住埋土
- 4号住埋土
- 5号住埋土(西隣)
- 3号住柱穴

4号住 (m)					
No.	径	深さ	No.	径	深さ
PP20	36×34	18~31	PP38	19×17	11
PP21	32×31	14~22	PP39	24×19	8
PP22	32×32	31~35	PP40	23×20	6
PP23	24×22	26	PP41	29×19	20
PP24	20×17	21	PP43	27×24	6
PP26	20×22	17	PP44	22×20	18
PP27	27×20	19	PP48	21×19	17
PP28	25×25	22	PP49	30×19	11
PP29	20×19	11	PP50	22×22	17
PP30	20×24	16	PP51	22×20	28
PP31	20×18	18	PP52	23×22	9
PP33	27×25	22	PP53	26×24	14
PP34	23×23	17	PP54	24×19	20
PP35	31×27	21	PP55	20×19	10
PP36	20×19	17	PP56	21×20	6
PP37	30×16	21			



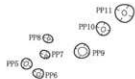
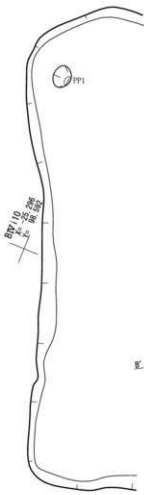
第12図 4号住



第13図 5号住

6号住

6号住 (m)		
No.	径	厚
PF1	36×29	27
PF2	22×20	18
PF3	32×27	24
PF4	31×26	27
PF5	17×17	7
PF6	17×15	12
PF7	16×13	15
PF8	17×13	7
PF9	24×24	12
PF10	23×20	15
PF11	30×28	15
PF12	43×44	27
PF13	28×21	21
PF14	30×28	17

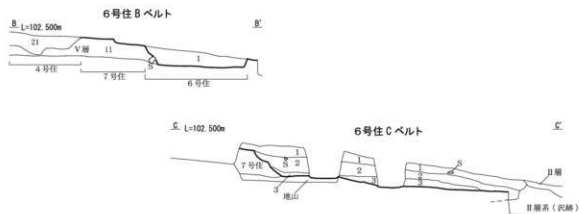


6号住 A ベルト

▲ L:102.500m



第14図 6号住 (1)



6号住(A-A'-C-C')

1	101K1/2にぶい黄褐色シルト	黏性やや強	細りやや密	Te-Cu(101K6/9、粉末状)5%混入 (自然堆積層、II層表)
2	101K2/3黒褐色シルト	黏性やや強	細りやや密	小礫5%混入 (IV層表、6号住厚土)
3	101K3/2〜3/3暗褐色〜黒褐色シルト	黏性やや強	細り密	小礫3%混入
4	101K2/3黒褐色シルト	黏性中	細り密	小礫(Φ3〜10mm)10%混入 (5号6号住)
11	101K2/2黒褐色シルト	黏性やや強	細りやや密	小礫3%混入 (IV層表、8号住厚土、2.3層と比較して小礫の粒径が小さい)
12	101K3/2黒褐色シルト	黏性やや強	細り密	小礫3%混入 (IV層表、8号住厚土、2.3層と比較して小礫の粒径が小さい)

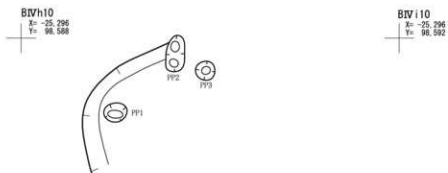
6号住(B-B')

1	101K2/2黒褐色シルト	黏性中	細り密	小礫(Φ3〜10mm)10%混入 (5号6号住)
11	101K2/2黒褐色シルト	黏性中	細り密	小礫(Φ3〜10mm)1%混入 (5号7号住)
21	101K3/4暗褐色シルト	黏性やや強	細りやや密	小礫(Φ3〜10mm)5%混入 (5号4号住)

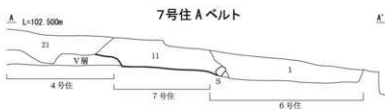


第15図 6号住(2)

7号住

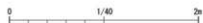


7号住		(cm)
No.	径	深さ
PP1	20×21	14
PP2	28×20	19
PP3	21×20	11
PP4	25×25	15



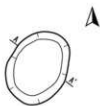
7号住 (A-A)

- 1 10YR2/3系棕色シルト 粘性中 細り密 小礫(Φ3~10mm) 10%混入 (6号住)
 11 10YR2/3系棕色シルト 粘性中 細り密 小礫(Φ3~10mm) 7%混入 (7号住)
 21 10YR3/4暗棕色シルト 粘性やや強 細りやや密 小礫(Φ3~10mm) 5%混入 (8号住)



第16図 7号住

1号土坑

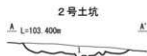
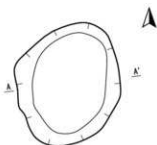


1号土坑(A-A')

1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや強 細り中 自然堆積

BVH9
X=-25.292
Y=98.588

2号土坑



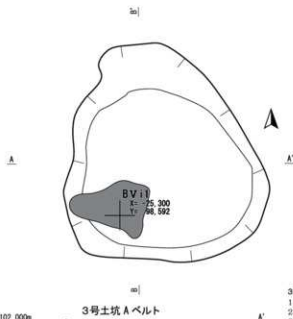
2号土坑(A-A')

1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 細り強 自然堆積

0 1/40 2m

BVH9
X=-25.292
Y=98.588

3号土坑



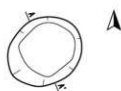
3号土坑(A-A'・B-B')

1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや強 細り強 自然堆積
2 10YR3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 細り強 自然堆積
3 10YR4/1黒褐色シルト 粘性やや強 細り強 自然堆積
4 2.5YR6/6褐色粘土質シルト 粘性強 細り強 粘土

0 1/50 3m

第17図 1・2・3号土坑

5号土坑



6号土坑



CVb10

X= -25, 296

Y= 98, 054



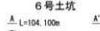
5号土坑

L=101.900m

CVd7

X= -25, 284

Y= 98, 912



6号土坑

L=104.100m

地山係露

5号土坑(A-A')

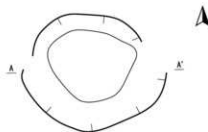
1 10YR3/1~3 2黄褐色細礫質じり粘土質シルト

粘性やや強 粘り強 自然堆積土?

6号土坑(A-A')

1 10YR3/2 2黄褐シルト 粘性弱 粘りやや密 地山係露・段崖じり(人為層?)

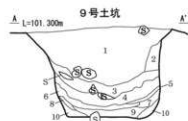
9号土坑



CVe5

X= -25, 316

Y= 98, 616



9号土坑

L=101.300m

9号土坑(簡穴穴) (A-A')

1 10YR3/1 黄褐色シルト

粘性弱 粘りやや密 赤褐色角礫(Φ3~5mm)混入

2 10YR4/2 灰黄褐色シルト~細粒砂

粘性弱 粘り強 偽礫多く、人為堆積層

3 10YR4/2 灰黄褐色シルト~細粒砂

粘性やや強 粘り強 地山層が自然堆積土か

4 10YR4/1 黄褐色粘土質シルト~細粒砂

粘性やや強 粘り強 偽礫含むが自然堆積か?

5 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂

粘性弱 粘り強 地山層崩落土か

6 10YR4/1 黄褐色粘土質シルト

粘性強 粘り強 地山係露並び自然堆積層

7 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂

粘性弱 粘り強 地山層崩落土か

8 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂

粘性弱 粘り強 地山層崩落土か

9 10YR4/2 灰黄褐色粘土~細粒砂

粘性強 粘り強

10 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂

粘性弱 粘り強 地山層崩落土か

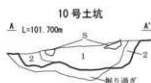
10号土坑



CVc6

X= -25, 320

Y= 98, 058



10号土坑

L=101.700m

粘り通ず

10号土坑(A-A')

1 7.5YR2/1 黒色シルト 粘性弱

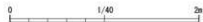
粘り強 地山係露(Φ30~30mm以下)、角礫(Φ30mm以下)混入

2 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂質じり粘土質シルト

土壌形成か暗色層、土壌層位a

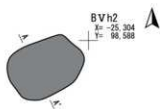
粘性やや強

粘りやや密 土壌形成かやや暗色層、土壌層位b,c



第18図 5・6・9・10号土坑

5号焼土



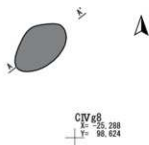
5号焼土



5号焼土 (A-A')

1 10YR3/1 赤褐色粘土質シルト 粘性やや強 細りやや硬

9号焼土



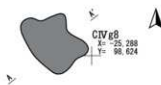
9号焼土



9号焼土 (A-A')

1 5YR3/2 暗褐色粘土 粘性やや強 細りやや硬 炭焼成不良

10号焼土



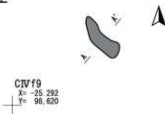
10号焼土



10号焼土 (A-A')

1 5YR4/4C 赤褐色粘土 粘性やや強 細りやや硬

11号焼土



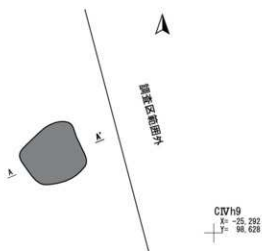
11号焼土



11号焼土 (A-A')

1 5YR5/6 赤褐色粘土 粘性やや強 細りやや硬 炭焼成が良好

12号焼土

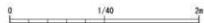


12号焼土



12号焼土 (A-A')

1 5YR3/2 暗褐色粘土 粘性やや強 細りやや硬



第19図 5・9・10・11・12号焼土

柱穴状土坑 (1~5号)



BIV J2
X: -25.264
Y: 98.592

BIV J2
X: -25.264
Y: 98.596

3号柱穴状土坑



4号柱穴状土坑



5号柱穴状土坑



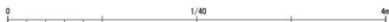
2号柱穴状土坑

BIV J3
X: -25.268
Y: 98.592

BIV J3
X: -25.268
Y: 98.596



1号柱穴状土坑



第20图 柱穴状土坑

V 出土遺物

遺物は大コンテナ(42×32×30cm)で約32箱分が出土した。内訳は、土器大コンテナ10箱分(101,266g)、土製品9点(円盤状土製品9点)、石器大コンテナ22箱分(2,748点)、石製品中コンテナ1箱分(17点)、チップ・フレーク小コンテナ1箱分(3,551.1g)である。

1 土 器

縄文土器、弥生土器、平安時代の土師器が出土した(※以後「時代」は省略)。主体は縄文前期初頭～前葉である(全体の9割以上を占める)。掲載に際しては、縄文前期前葉は堅穴住居跡出土を中心に文様・特徴が明瞭なもの(代表的なもの)を選択した。縄文前期初頭上川名2式・中葉～後葉大木3～5式・晩期・弥生土器・古代の土師器は当時期と判断したもの全て、その他の時期(※縄文中期・後期など)は文様から概ね土器型式が判然とするものを中心に選択した。

(1) 縄文土器

今回の調査で縄文土器は、前期、中期、後期、晩期に亘る時期が出土している。上記の通り主体は前期初頭～前葉である。出土地は、中央調査区に所在する堅穴住居跡及びその周辺に堆積する遺物包含層や沢跡から出土している。

【前期土器】前期の土器は、前期初頭～前期後葉まで認められ(※前期末葉は未確認)、主体は圧倒的に初頭～前葉である。胎土中には繊維の混入が認められるが、前期中葉を境に繊維は認め難い(繊維を含まない)様相に変わる。本稿では、胎土中の繊維量も時期を推定する際の目安とした(観察表の繊維の項には、多量、中量、少量、微量の4段階で記載した)。

① 前期初頭の出土量は、前期前葉と比較した場合はやや少ないものの、一定量の出土を得られた。今回掲載した中では、No.46・64・144～152・154などが該当しよう。

文様は、口縁部に集約され、縄文原体の側面の押圧による施文を中心とし、渦巻文や直線の押圧による並行する条線、その条線間に縦位の短沈線が施されるものに代表される。胴部地文は、2種類の原体を横方向に回転し、帯状に整然と走る非結束羽状縄文が多く、加えて使用される原体は0段多条である。器厚は10mmを超えるものが多く、胎土中の繊維量は、観察表への記載で中量や多量としたものがほとんどで、観察所見として次の前期前葉土器より明らかに多く含まれている。土器型式について、本稿では東北地方南部を中心に分布する上川名2式に相当すると捉え、同型式名を各所に用い表記している。この上川名2式の型式内容は、拡大解釈されてきた(早瀬：2008)とも言え、少なくとも本県に分布する当該期の土器群の内容や属性は明らかとは言えない現状がある。今後に細部の検討が必要と考えられることを付記しておく。

② 前期前葉は堅穴住居跡からも多くの土器量が得られ、今回調査の主体時期である。大木1～2b式までの時期幅で推定されるが、土器型式を特定できるメルクマール的な特徴や文様を持つものが少ない。観察表の時期の項には、土器型式への比定が困難なものは「前期前葉」とのみ記載した。

大木1式と捉えたのが、胎土中に繊維を含み、原体が環付き末端ループを施文するもの(No.28・29・79・95・165～170)を基調とする土器群である。また、組縄縄文が一定量以上しているが、厳密には大木1式に属するかわからない。ただ、大木1式と共伴気味に出土していることと、観察所見

として口縁部文様帯の形成が認め難い点で前期初頭土器と相違することや、厚さや胎土の様子にも差異が見て取れることから、組紐縄文を施文する土器は前期前葉大木1式期と捉え記述した。

大木2a式は不整然糸文を施文するものを基調としたが、単軸絡糸体第1A類を施文する№92・177なども属性と捉えた。そして、大木1式や大木2b式と比較して、口唇部が平滑なもの（面取りされているもの）が特徴的に認められる（№66・90・175・179・182・185など）。また、口縁部にS字状連鎖燃糸文・胴部に単節斜行縄文を施文する№22や、口縁部にS字状連鎖沈文・胴部に結束羽状縄文を施文する№14などは、大木2a式と大木2b式両者の属性を合わせ持つ土器である可能性が窺える。

大木2b式と認知したものは、S字状連鎖沈文を施文するものを基調とした。また、地文に組紐回転を採用するものが多く認められるが、これらも大木2b式若しくは白座式の特徴と捉えられそうである（※明らかな大木2a式には組紐が認められない）。№13・16などは、S字状連鎖沈文と白座式に特徴的な口縁部への斜めの刻み（観察表では「斜位の刻み」と表記）が、同一個体に併せて認められ、両者の並行関係が示唆される。上述のとおり3号住の層位的事実から、これらの土器はTo-Cu下位で主体的に出土している。近年の事例を見ると、大木2b式・白座式ともにTo-Cuの上下で出土している様子にとれるが、白座式については住田町山脈地遺跡などを見る限りTo-Cu上位出土が優勢のようにである。本遺跡で出土している大木2b式及びそれに伴う白座式相当はTo-Cu下位であることから、S字状連鎖沈文を施文する土器を大木2b式とするならば、To-Cuを跨いで存在する可能性や、地域差（※To-Cuテフラの下位で出土する地域と上位で出土する地域）などの存在が考えられようか。

補足として、前期初頭か前期前葉か判断できなかったものとして、№54・153・155・156などを挙げておく。これらの土器は、観察表では「前期初頭～前葉」と表記した。その中で平底ではない底部資料として、№54・153がある。№54は地文のみの胴部下半片であるが、その器形の連続性からは尖底あるいは丸底土器と推定される。№153は丸底の底部資料である。これらの縄文原体の様相からは前期前葉の可能性もある。

③ 前期中葉～後葉は、少量の出土である。文様や特徴から土器型式に比定できそうなものとしては、大木3式が1点、大木4式が5点、大木5式が5点（推定を含む）の出土である。大木3式と捉えたものとしては、LR横回転→円文を施文する№231がある。層位的にはTo-Cuテフラ上位出土である。【中期】中期は、初頭大木7a式、前葉大木7b式、後葉大木9式の出土が少数認められる。全て遺構外出土で、尚且つ小破片であることから、時期のメルクマールとなる特徴的な文様が認められるものに限定して掲載した。

大木7a式、若しくはそれと推定されるのが、№241～247・249である。全般に、器厚6mm前後の薄い作りが目立ち、バラエティーに富む特徴が看取される。№242・244は、口縁部が折り返し口縁を呈し、三角形印刻文がみられる。また、特徴的な文様が無く時期を断定するものではないが、胴部に植物茎の回転圧痕？（擬似縄文）を施文する№131・132・246・248・275についても、胎土の様相や器厚などから、中期初頭の可能性がある。

大木7b式は、明確に特定できるのは№130の1点のみで、押圧縄文による文様施文が認められる。また、隆線によるX字状モチーフを持つ№275や、貼付隆線の側線に交互刺突文を施文する№276についても、大木7b式の可能性がある（※№276は大木7a式の可能性もあるが）。

大木9式は、地文→沈線による楕円形のモチーフ→磨消縄文の手法をみる№251・252・277が挙げられる。それ以外に、口縁頂部に隆線による渦巻文が施文される№250は、大木9式古段階若しくは大木8b式と推定されるが、特定できかねた。

【後期】 後期は、初頭が少量出土した。窪窪式相当と推定される。出土地として、北調査区の南斜面に堆積する遺物包含層が主体である。この遺物包含層は縄文後期の単純包含層ではないものの、To-Cuを含まないことから、縄文前期前葉よりは新しいと判断される。№253と№254は、共にRL横回転→沈線による文様がモチーフされる。№279と№280は、接点はないものの、同一個体と推定される資料である。№279は、貼付隆線による幾何学的な文様を持つ土器で、口縁頂部から縦に垂下する2条の貼付隆線を基調に、弧状気味に隆線が充填される。そして、隆線には押圧縄文と刺突文が併用してみられる。

【晩期】 晩期は3点出土した（認知した）。何れも小破片であることから、土器型式への比定には躊躇あるが、№133が大洞A式、№255が大洞B式、№270が大洞C2式若しくは大洞A式と、それぞれ推定しておく。

(2) 弥生土器

弥生土器が少量出土した。前期～後期まで時期幅の広い出土が認められる。上述のとおり、弥生土器と推定されるものは全点（25点）掲載した。

前期と推定したのが№259～262の鉢の破片で、これらは接点がないものの同一個体である。

中期は№256が甔形皿式の可能性があるものの特定できない。それ以外に、№134～136についても、中期の可能性がある。

後期（赤穴式）と推定されるものとしては、№124～126、137～140、258、263～266、269など、交互刺突文、羽状縄文、付加条縄文などを施文する。2号土坑や沢跡を中心に出土した。これらの全体的な傾向としては、縄文土器と比較して器厚が薄く3.5～7mmの範疇で平均的には5mm前後を測る。

(3) 古代の土器

土師器2点と須恵器2点が認められた。№141の土師器甕は外面に縦方向に調整痕（ナデ）と推定される）が認められる。10世紀前半～中頃と捉えられる。他は平安時代と推定されるが、小片で詳細な時期は特定できない。

2 土製品

土製品は、土器片を再利用した円盤状土製品9点が出土した。

土器片の縁を打ち欠き円形気味あるいはそれに準ずる形に成形したもので、縁辺は全て打ち欠きのままである（※全て研磨が施されていない）。また、形状は全般にきれいな円盤状（平面形が円形）とは言い難い。法量値は、直径約4cm、重量17gの平均値となる。時期は、施文される原体や胎土中の繊維の混入様相などから判断すると、№282～287は前期前葉、№281・288は中期初頭と、それぞれ推定される。時期不明としたのが№289であるが、縄文後期あるいは弥生後期の可能性がある。

3 石 器

石器類は大コンテナに換算して22箱分と、多量に出土した。圧倒的に礫石器が多い。以下には剥片石器と礫石器を分けて記述する。

(1) 剥片石器

剥片石器は301点出土した。内訳は石鏃51点、尖頭器4点、石匙32点、石錐1点、石筥6点、スクレイパー56点、コア7点、力持型スクレイパー127点、Uフレ17点である。

【石鏃】51点出土し、10点掲載した。基部形態が把握できる資料をみると、平基が37点、挟りを呈するもの3点である。また、欠損品が13点ある。規模は、長辺の平均値約2.4cm、平均重量1.5gである。石材は黒曜石製1点を除き全て頁岩である。

【尖頭器】4点出土し、1点掲載した。掲載したNo.329は、形状は両側縁が平行するスリムな作りであるが、側縁の加工状況としては、粗い加工にみとれる。尖頭器としたが、先端部は尖らない(未成品か)。長さ6.8cm、幅1.5、厚さ0.8cm、重さ7gである。石材は頁岩である。

【石匙】32点出土し、9点掲載した(No.302・303・310・330・331～335)。摘みを上にした場合、主要な刃部と想定される辺が、縦(縦型)、横(横型)、斜(斜型)の、3種類が認められる。また、刃部加工は片面(一面※表面として図化)にのみ二次剥離が施されるものがほとんどであることから、いわゆる片刃と捉えた。今回の調査では縦型で片刃が多い。No.332は不明瞭ではあるが、刃部を縦に巡るように黒色物質の付着が認められる(アスファルトか?)。石材は、No.331が凝灰岩で、他は全て頁岩である。

【石錐】錐部の一部と捉えられる破片が1点出土し、石錐として登録した(不掲載とした)。

【石筥】片面に広く自然面(礫面)を残し、切断面側に粗い剥離が施され平面形が筥状を呈するものである。力持型スクレイパーに類似するが、刃部の加工具合や刃部角度に相違があり、石筥の器種名で呼ぶこととする。それらは、石筥や磨製石斧の未成品段階の可能性もある。6点出土し、全て不掲載とした。

【スクレイパー】刃部の加工具合や微細剥離の様子から、削搔器と推定したものである。加えて、形状は全般に規格性が認め難く(弱く)、不定形な形状にある。上述の内容の石器をスクレイパーの名称で一括した。56点出土した。その内、楔形に近い形状を呈するNo.304・336の2点掲載した。石材は2点ともに頁岩である。補足として、掲載した2点はピエス・エスキューと呼ばれる類の石器にも類似する。

【コア】剥片を剥した際にのこされた残核と捉えたものをコアとした。7点出土したが、全て不掲載とした。

【力持型スクレイパー】127点出土し、28点掲載した(No.305～314・319～323・337～350)。剥片石器に占める割合は42%で、非常に高い割合を示す。力持型スクレイパーは、力持遺跡(岩手埋文:2008)で呼称された石器で、片面のほぼ全面に自然面(礫面)で母岩表皮と判断される)が残り、切断面側の周縁を打点とした直接打撃によって平面形が楕円形～長方形に整形されたもので、先端に鈍角(※65°以上が多い)の刃部が形成された石器である。力持遺跡で実施した石器使用痕分析の結果からは、対象物は軟らかいもので動作などからスクレイピングに使用された石器と考察される。図化に際しては切断面の剥離側を表面とした(※力持遺跡報告書中では自然側を表面にし掲載・図化されて

いる)。加えて、礫石器ではなく剥片石器として表記する。

典型的な力持型スクレイパーとしては、長辺6～10cm、短辺4～7cm、重さ100g以下のものが挙げられる。掲載した中では、No.305・320・321・323・337などがある。また、やや大形のものとして、No.350が挙げられる（長辺15.8cm、短辺8.3cm、重量555gと逸脱した規模・法量にある）。

石材は10種類以上が認められるが、細粒閃緑岩、花崗斑岩、ヒン岩、頁岩、砂岩の順に多い。用いられる石材を見る限り、磨製石斧に用いられているものと共通性が高く、あるいは磨製石斧の未成品が混在する可能性も否定するものではない。特に裏面にも刃部を意図した加工が認められるものは検討を要する。

【ユーティライズドフレイク（いわゆるUF）】フレイクに微細剥離などの使用痕が認められるもので、17点出土したが、全て不掲載とした。

（2）礫石器

礫石器は2408点出土した。磨製石斧162点、特殊磨石39点、磨石1,609点、敲磨器102点、敲石165点、凹石2点、砥石1点、石錘1点、石皿7点、台石13点、礫器151点、礫片スクレイパー95点、板状礫12点、棒状礫1点、円礫48点である。

【磨製石斧】162点出土し（磨製石斧？1点含む）、10点掲載した。成品と未成品の割合としては、未成品が138点全体の85%を占める。成品としては、No.383・394・396を掲載したが、全て欠損品である。No.396は擦り切り痕が認められる。石材は細粒閃緑岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、頁岩などが多く用いられている。

【特殊磨石】側面に平坦気味の磨面を持つものについて、本稿では特殊磨石と呼ぶこととする。39点出土し（内、特殊磨石片14点含む）、10点掲載した。側面の磨面幅は0.8～2.5cmの範囲で認められ、平均すると1.5cm前後になる。この磨面はNo.354・355・356・397・398など、ザラザラした感触のものが多い。また、磨面の側縁にはNo.354・397・398などのように磨痕を載る剥離が施されるものが一定量認められる。石材は細粒閃緑岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、花崗岩などが主体である。ただし、今回は全点の石質鑑定を実施できなかったことと、同じ宮古市田老地区に所在する乙部遺跡などの出土品を見る限り、石材は非常に多様にある（※乙部遺跡は大木2a式を主体とする集落遺跡で、平成27年度に岩手県教育委員会で調査した際には、多量の特殊磨石が出土している）。重量をみると、310～610gの範疇にあり、平均重量は410g前後となる。

使用用途について、今回は使用痕分析などを実施していないため、多くを言及できる状況にはないが、対象物への使用に際して、磨面の幅が1.5cm前後で磨面はザラザラ感を保持する必要があるような内容と捉えられる。加えて、重量が410g前後であることを考慮すると、デリケートな作業には向かないと推定される。

類例の分布をみると、沿岸部に限らず内陸部の遺跡においても出土を確認できる。時期について、詳細な集成などを行っていないため不透明感が拭えない内容であくまで所見になるが、縄文前期・中期を中心とする遺跡からの出土が多いと思われ、特に沿岸中央～北部においては縄文前期前葉土器を出土する遺跡から顕著に認められる傾向が窺える。

【磨石】磨痕が認められる石器を磨石とした。全面磨痕が認められるものや表面若しくは裏面に広く磨痕が認められるものなどを基調とする。1,609点出土した内、代表的なもの5点を掲載した。特徴的なものとして、①縁辺に複数の打ち欠き痕があるもの、②磨石を輪切状にしたもの、③石斧の形状は成していないが磨痕の在り方から磨製石斧の制作初期段階の未成品と推定されるものなど、多様な

様相にある。石材は、掲載した5点のみ石材鑑定を実施したが、花崗閃緑岩、花崗斑岩、閃緑岩などが認められる。なお、敲打痕と併用？気味に認められるものは、原則敲磨器として登録・命名し、本器種とは区分して示す。ただし、磨痕を敲打痕が載る場合は敲石とし、磨痕に対して敲打痕が不明瞭なものも磨石とした。

【敲磨器】磨痕と敲打痕が併用して認められるものを敲磨器とした。102点出土した内、代表的なもの3点を掲載した。石材はデイサイトやヒン岩である。

【敲石】165点出土した内、使用痕が明瞭な8点を掲載した。加えて、その対象物が石の可能性が高いと判断したもので、磨製石斧の加工具である可能性が考えられるものを中心に掲載した。石材は、多様にあるが、デイサイト、流紋岩、ヒン岩などがみられる。

【凹石】石器中央部付近において敲打による凹部を持つ石器を凹石とした。2点出土し2点とも掲載した。2点ともに表裏両面に凹部が形成されている。また、No.392は縦長に凹部が形成される特徴が認められる。重量はNo.392が517g、No.407は585gである。力持遺跡で実施した石器使用痕分析では、クルミの殻の先端を敲き飛ばす用途が指摘されていたが、そのようなデリケートな作業を行うには今回出土した2点はやや重い感がある。石材は、デイサイトと閃緑岩である。

【砥石】1点出土した。扁平気味の礫破片の一面において、やや平坦気味の面があり、砥痕と捉えられる溝状の磨痕が認められた。破片であることから掲載とした。

【石錘】両端に抉りのある坊岩礫で石錘と判断した。1点出土し不掲載とした。

【石皿】7点出土し1点掲載した。7点全て破片での出土である。掲載したNo.360の皿部は、ツルツルの使用痕で、明確な溝状を呈するものではないものの、砥痕の可能性も想起される。石材は砂岩である。

【台石】広い平坦面を持ち、台としての用途が推定される礫を台石とした。13点出土し2点掲載した。平坦面には磨り痕と敲打痕が併用して認められる。石材はデイサイトと花崗岩である。

【礫器】形状、加工の状況、使用痕などからは、他の礫石器に分類するのが躊躇されたものを一括して「礫器」の名称で呼ぶこととする。加えて、形状は斧に類似するものの、磨製石斧未成品とするには根拠が弱いと捉えたものも含めた。151点出土し、代表的なもの11点を掲載した。掲載に際しては磨製石斧未成品の可能性のあるものを優先して選択した。具体的には、No.362～366・378・408～410は磨製石斧の制作初期工程段階、No.373はそれより若干制作工程の進んだ段階と推定したい。石材は、デイサイト、細粒閃緑岩、ヒン岩、安山岩、花崗閃緑岩などである。

【礫片スクレイパー】厚さ1～2cmの薄めの円礫片あるいは磨石片を用いて、その切断面（破損面を含め）側の先端をスクレイピングなどに使用したと捉えた石器を「礫片スクレイパー」と仮称して呼ぶこととする。95点出土し7点を掲載した。力持型スクレイパーと呼称した石器と比較すると、共通点としては円礫などの礫面（自然面）を残すこと（自然面側には意図的な加工痕が認め難いこと）。相違点としては、切断面側に加工が施されるものは力持型スクレイパー、加工がほとんど施されず切断面そのものを刃部としているものを礫片スクレイパーとした。加えて、刃部角度も力持型スクレイパーは65°以上が多いのに対して、礫片スクレイパーと仮称したものは35～50°とより鋭利なものが多い。留意点も述べておくと、礫片スクレイパーと仮称したものは、あくまで肉眼からの使用痕観察である（※電子顕微鏡などを用いた使用痕分析を実施していない）。ただ、扁平気味の円礫やそれらを打ち欠いた可能性のある礫片、及び同様の厚さの磨石片（薄いものが多い）が多量に出土している状況から、このような石器製作を意図して石材が遺跡内に持ち込まれている可能性を示唆し、問題提起を兼ねてこの石器名称を提示しておくこととする。石材は、細粒閃緑岩、細粒花崗岩、凝灰岩、

デイサイトなどがみられる。

【板状礫・棒状礫・円礫】今回の調査では扁平な板状の礫や、石棒に似た棒状礫、円盤状の形をした円礫が比較的多く出土した。それらは、形状的には人工品にも見て取れるものの、加工痕（打ち欠いた痕跡）や使用痕（磨ったり敲いた痕跡）が不明瞭なものであったことから、サンプル的に板状礫12点（掲載したNo.380に線状痕あり）、棒状礫1点、円礫48点を持ち帰り仮登録し、その他は野外調査時に廃棄した経緯がある。板状礫として掲載したNo.380は、2片の頁岩が接合したもので、平坦面の一面（表面として図化した面）に認められる線状痕は人為的なものと判断される。他に接合片が確認できなかったが、本来的には25cm以上の礫と推定できよう。実用品（※例えば台石とかあるいは土掘りの道具とか）なのかどうかは不明にある。棒状礫は、人為による磨り痕などは認められないため（※自然摩擦と捉えたことから）石棒とは認知できない。円礫については、上述した礫片スクレイパーや石錘などへの加工・使用を目的に、遺跡に持ち込まれた可能性を有するが、棒状礫と同様に人為的な加工痕や使用痕が認め難い。

（3）チップ・フレーク

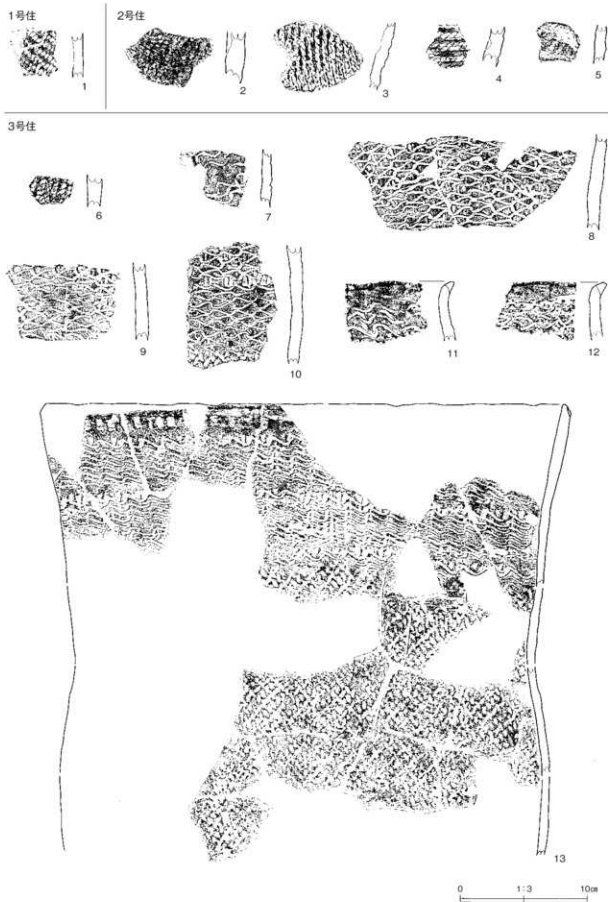
チップ・フレークは3,551.1g出土した。そのほとんどが中央調査区で、特にBⅣi9～j9グリッド付近では縄文前期初頭～前葉の土器と一緒に多量に出土した。

4 石製品

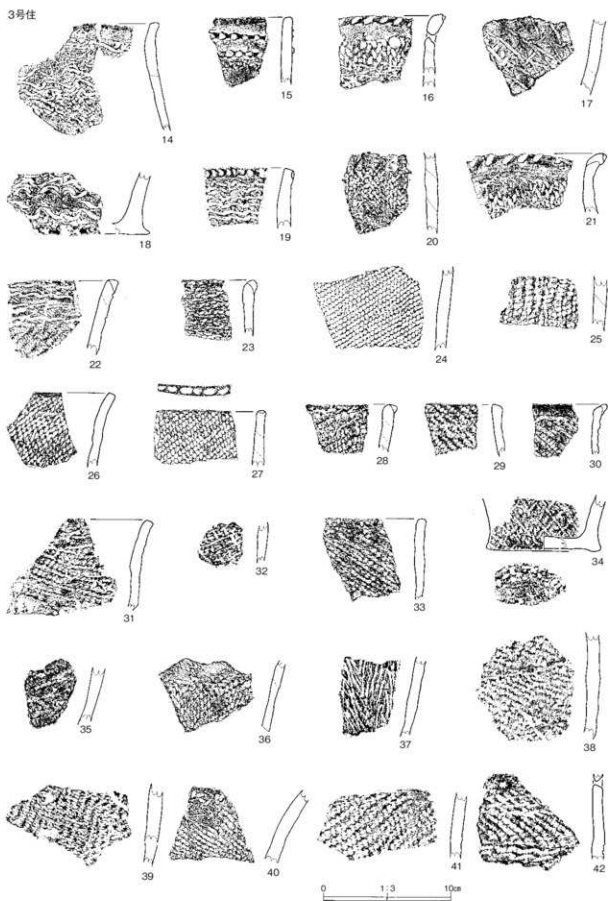
石製品は17点出土した。内訳は、軽石製石製品5点、石刀・石棒は12点である。

【軽石】5点出土した。今回の調査で出土したものは、何れも実用品とは捉え難いことから、石製品として登録・提示しておきたい。4点掲載した。No.411は、3号住の埋土中(To-Cuテフラ層より下位)から出土したもので、磨痕や加工痕は不明瞭であるが、楕円形の形に整えられている可能性がある。その他は全て遺構外出土である。No.416・417は、中央付近に穿孔が認められる。No.418は、複数ある孔は自然に空いたものと判断され、意図的な加工痕や使用痕は認め難い。石材の産地について、十和田火山新第四紀と鑑定をいただいた。十和田起源のテフラの中で新第四紀に噴出したものは多く、その種類や年代は特定できないようである。

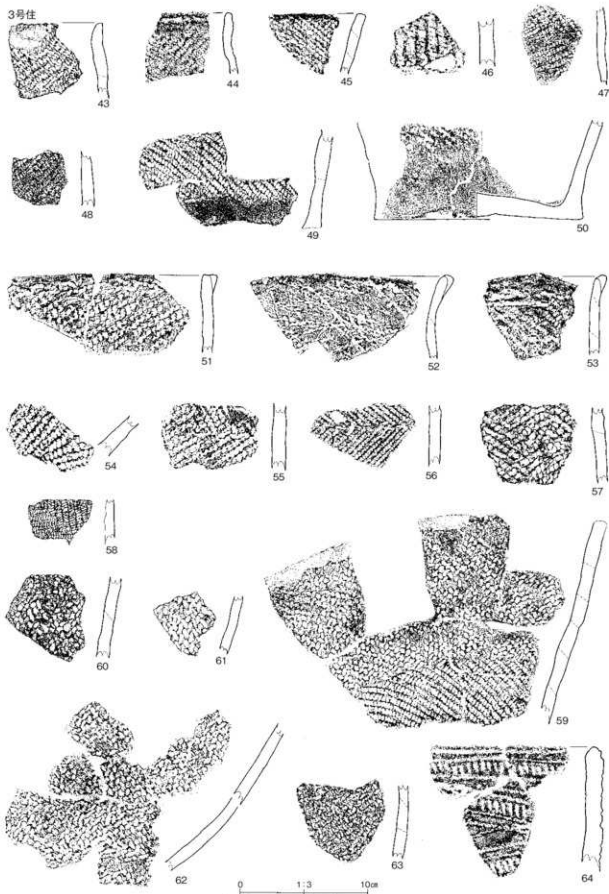
【石刀・石棒】棒状の礫の中で、人工品と判断したものを石刀若しくは石棒として12点登録し、その内4点を掲載した。石刀と石棒の区分に際しては、断面形の形状が方形基調は石刀に、円形に近いものを石棒とした。掲載したものの石材はホルンフェルス、ヒン岩、砂岩である。追記として、何れも整形の際の打撃や磨痕が明瞭ではない。帰属遺構から、全て前期前葉と判断される。



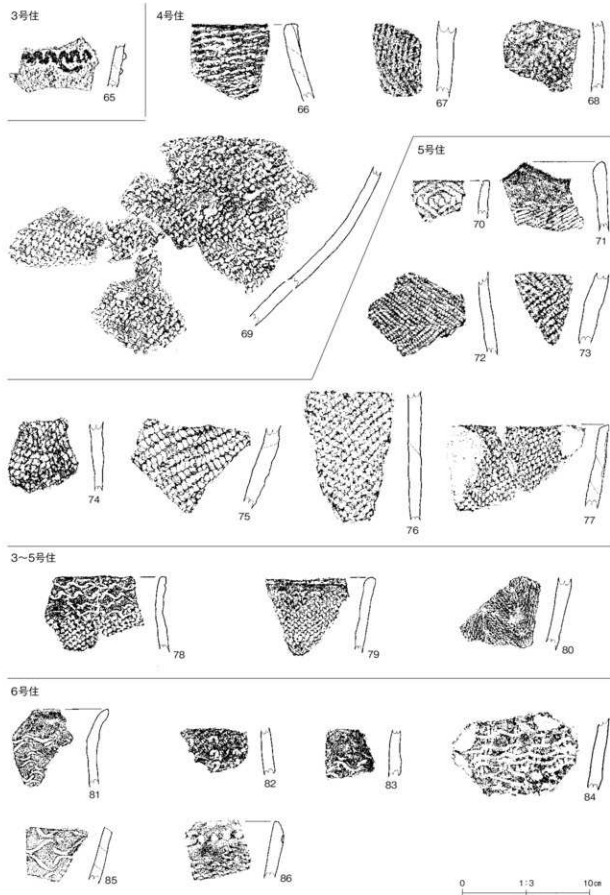
第21图 1・2号住、3号住(1)土器



第22図 3号住(2)土器

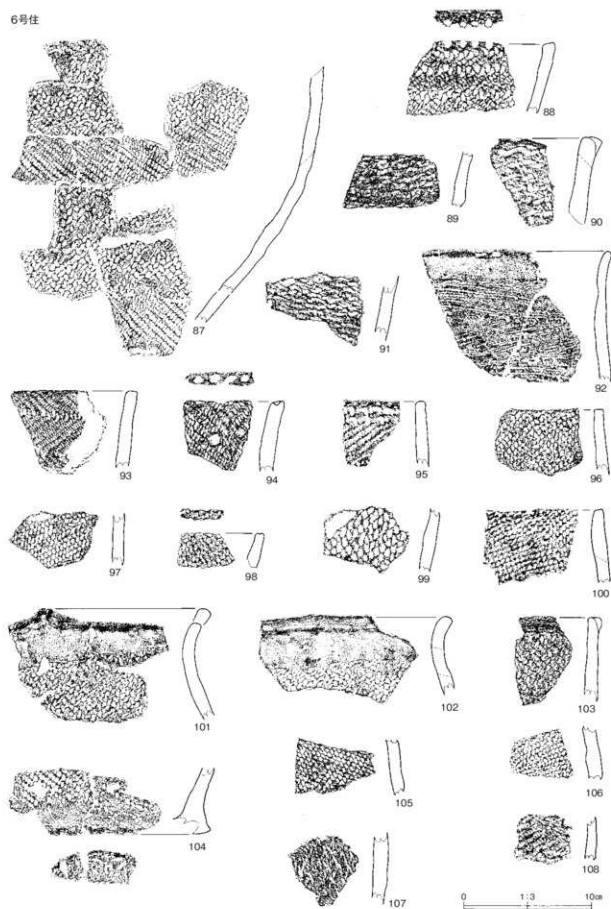


第23图 3号住(3)土器

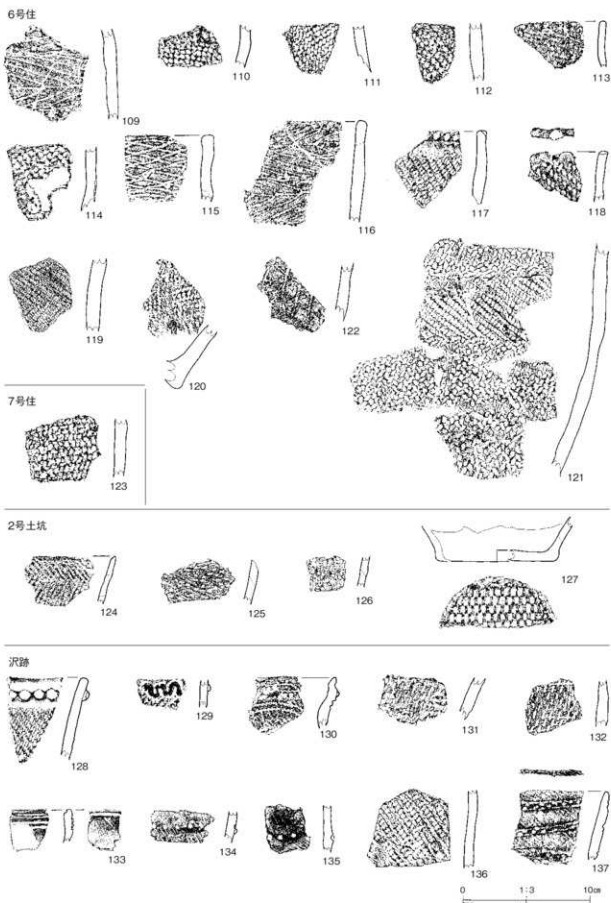


第24图 3号住(4)、4·5号住、6号住(1)土器

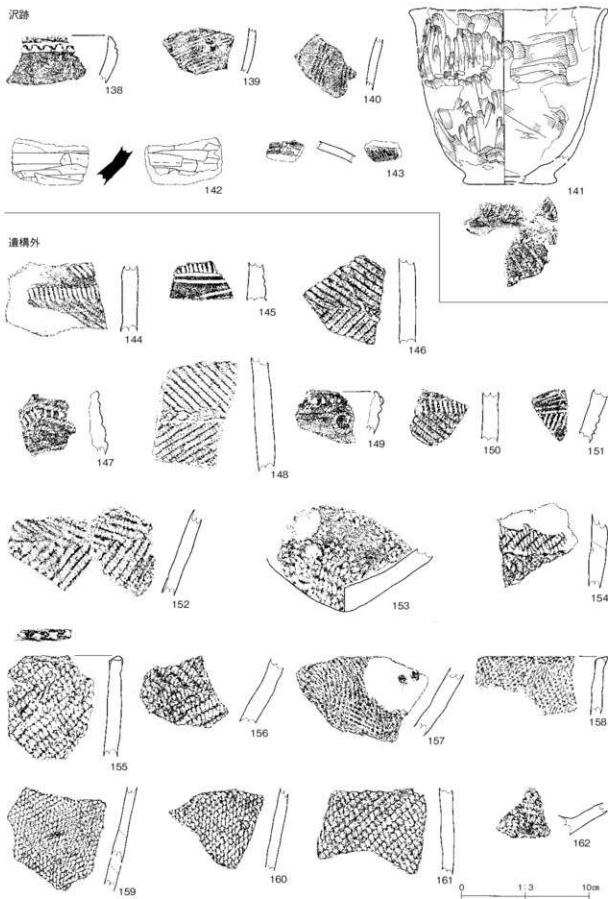
6号住



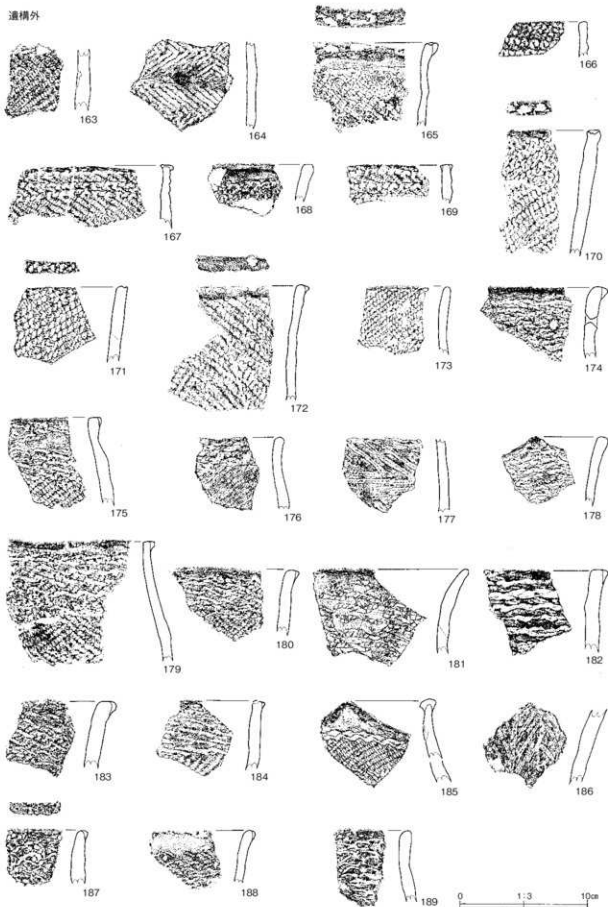
第25图 6号住(2)土器



第26図 6号住(3)・7号住、2号土坑、沢跡土器

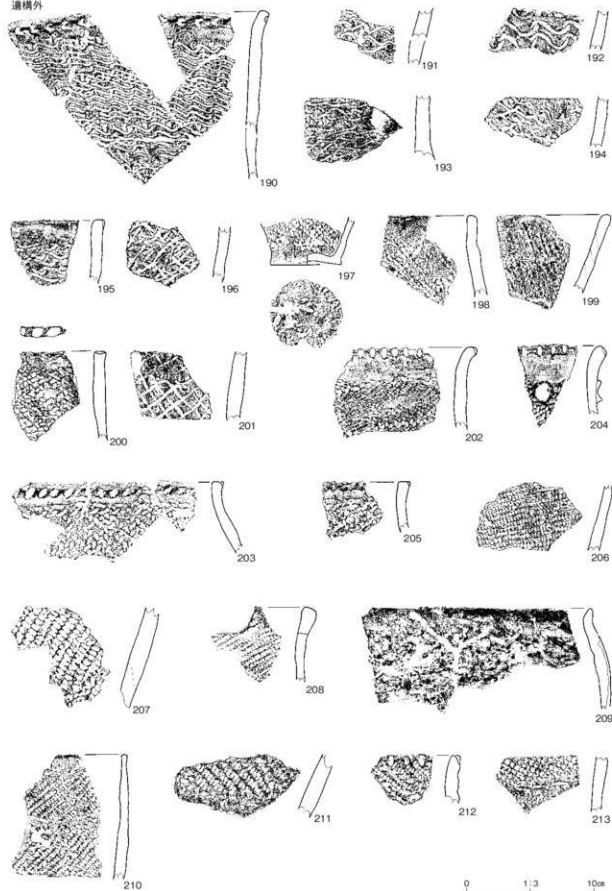


第27図 沢跡、遺構外(1)土器

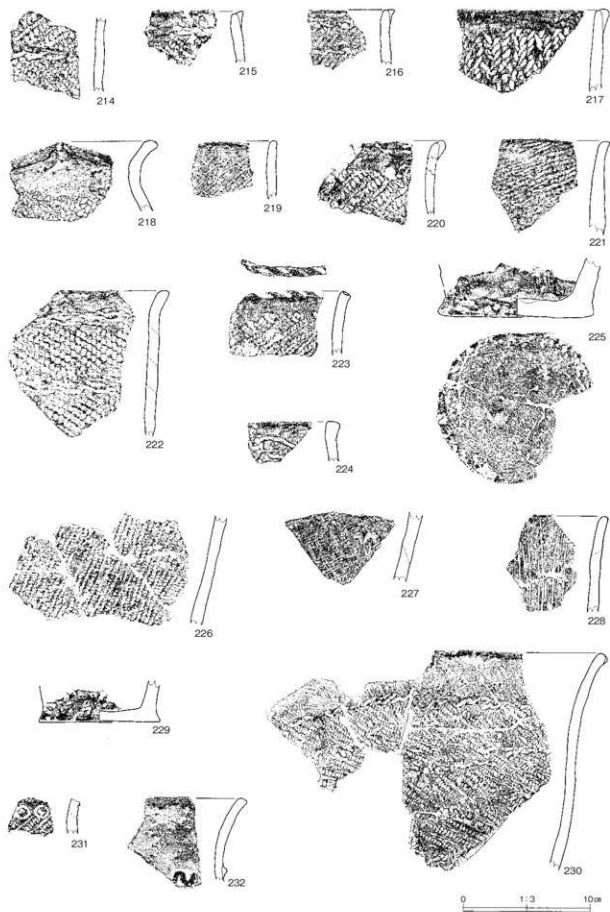


第28圖 遺構外(2)土器

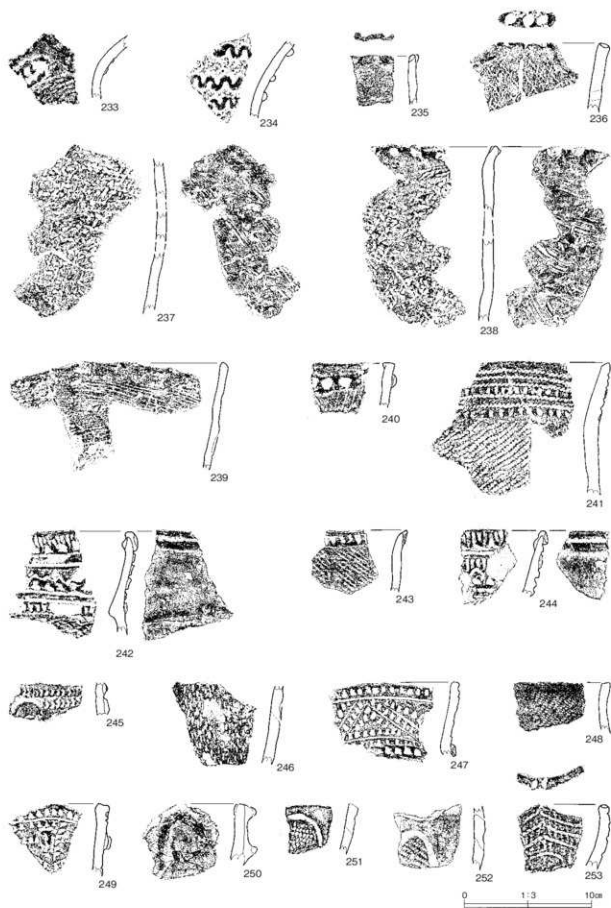
遺構外



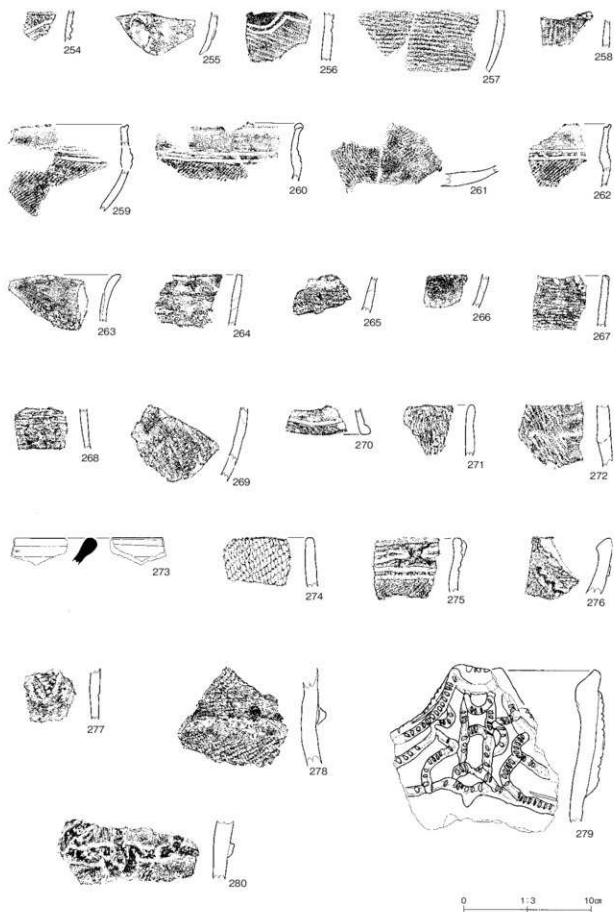
第29圖 遺構外 (3) 土器



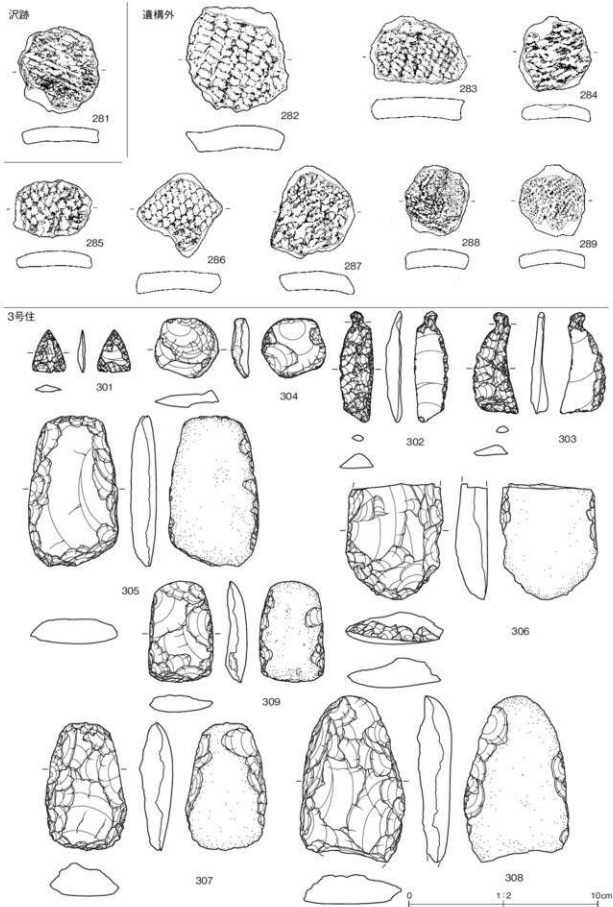
第30圖 遺構外(4)土器



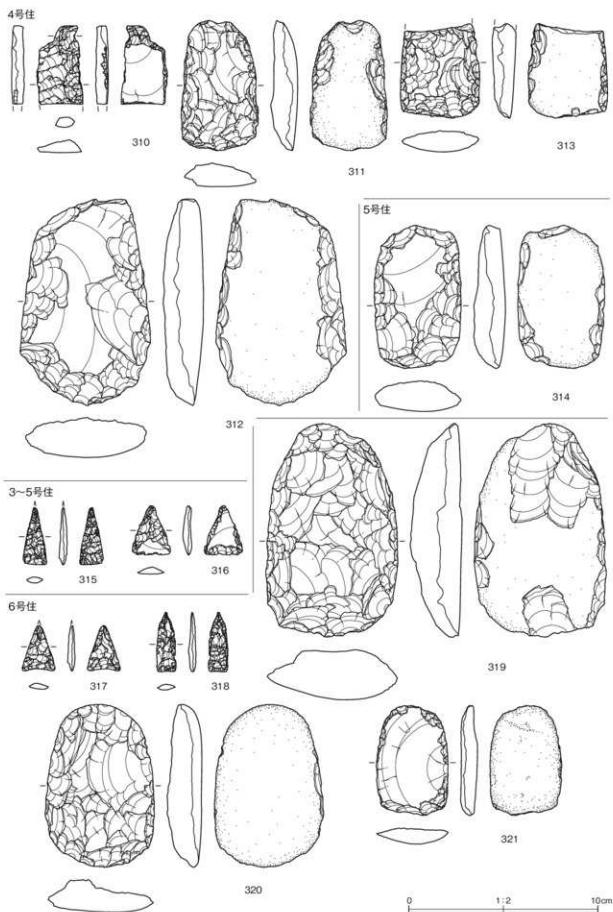
第31圖 遺構外(5)土器



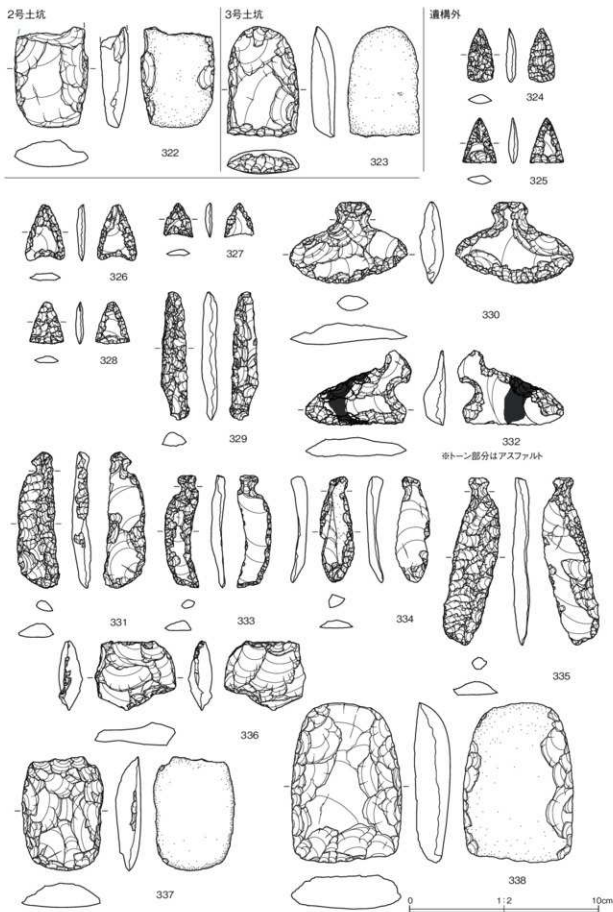
第32圖 遺構外(6)土器



第33図 土製品・3号住剥片石器

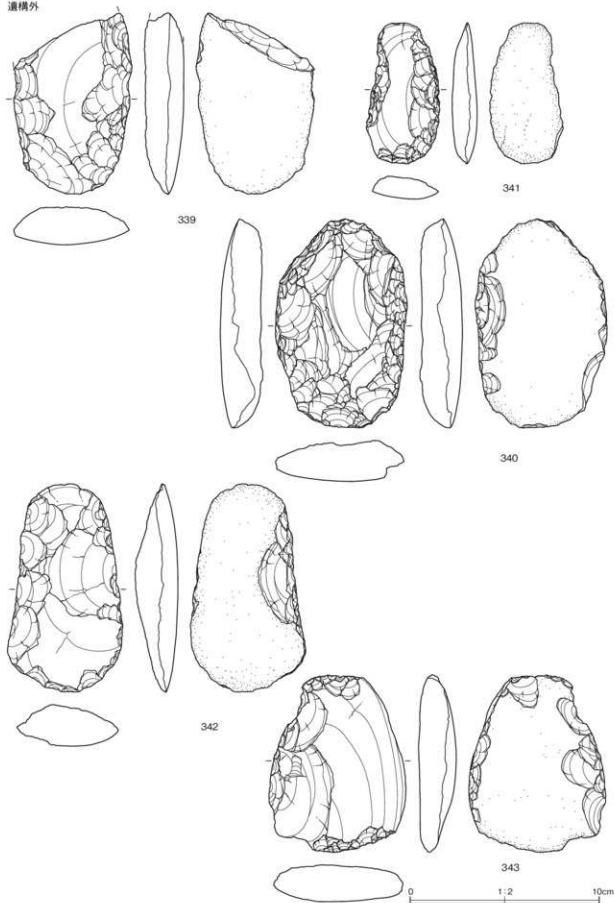


第34图 4・5・6号住剥片石器



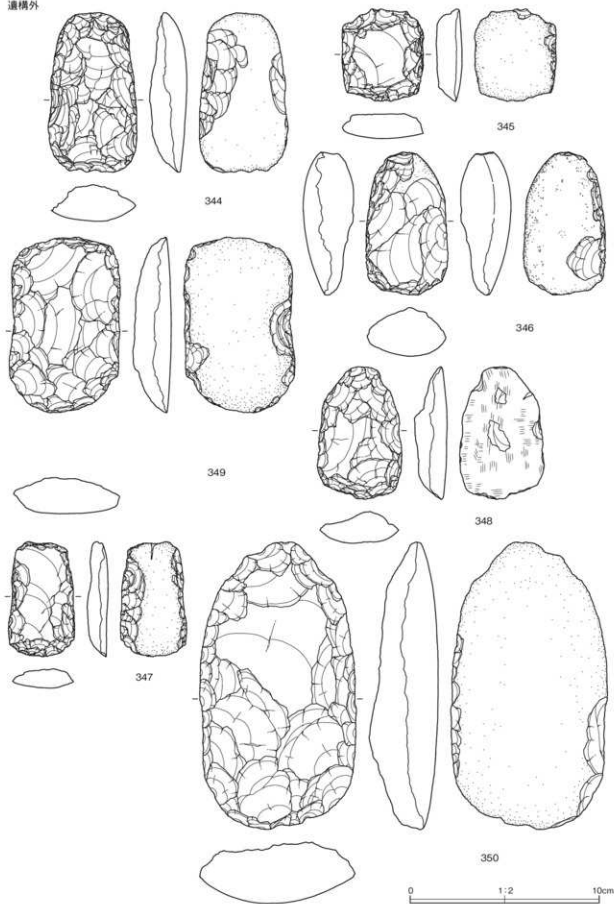
第35図 2・3号土坑、遺構外(1) 剥片石器

遺構外

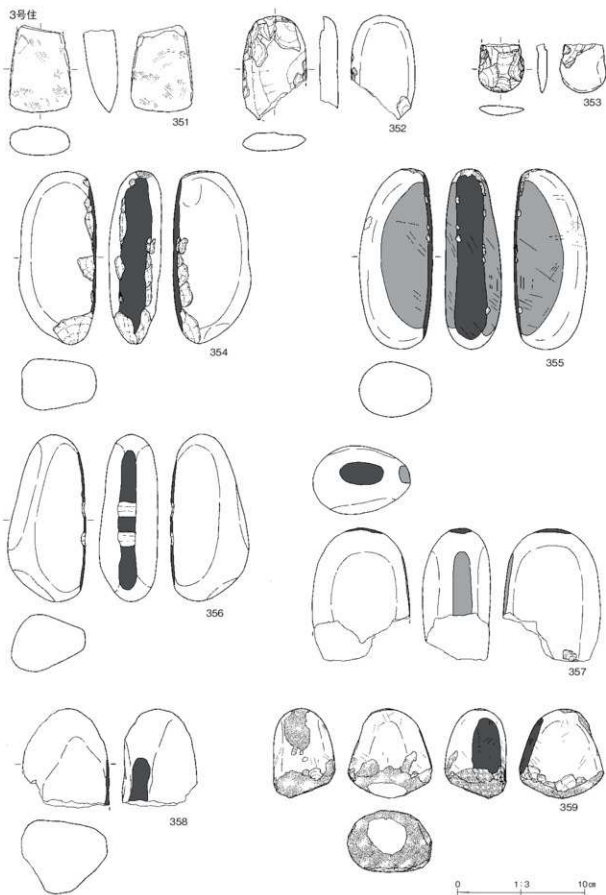


第36図 遺構外(2) 剥片石器

遺構外

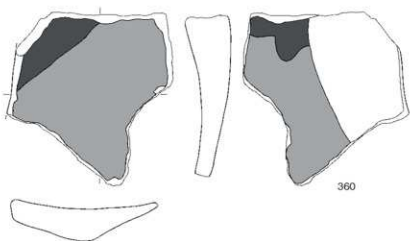


第37図 遺構外(3) 剥片石器



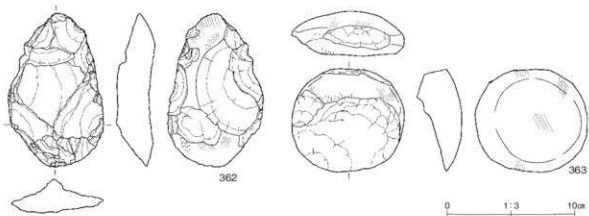
第38图 3号住(1) 礫石器

3号住



360

361



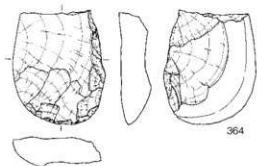
362

363

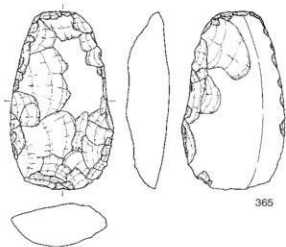
0 1:3 10cm

第39图 3号住(2) 礫石器

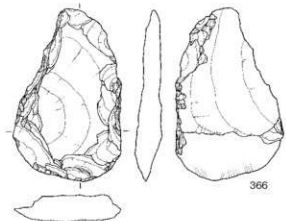
3号住



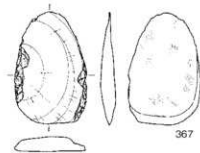
364



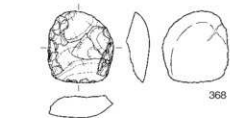
365



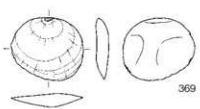
366



367

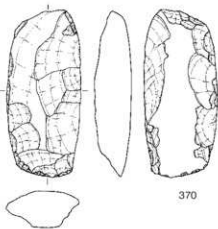


368

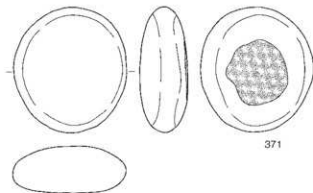


369

4号住



370

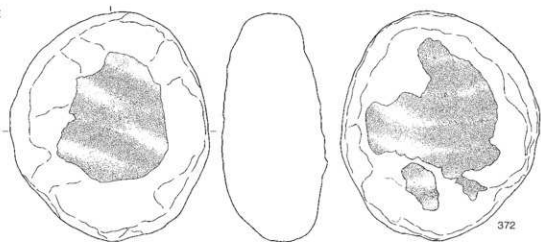


371

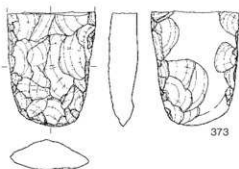
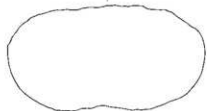
0 1:3 10cm

第40图 3号住(3)、4号住(1) 礫石器

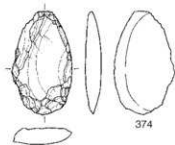
4号住



372

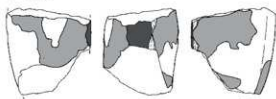


373



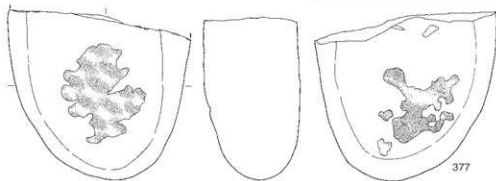
374

3~4号住

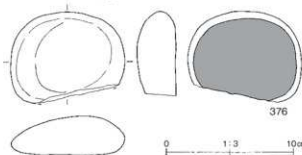
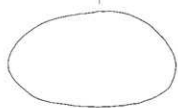


375

5号住



377

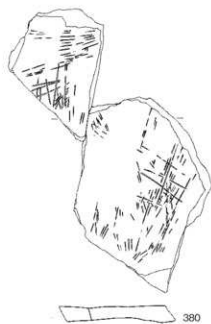
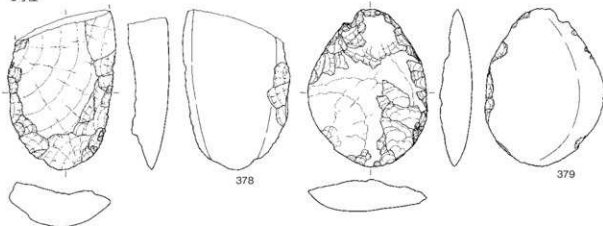


378

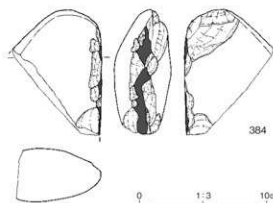
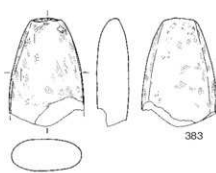
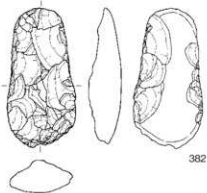
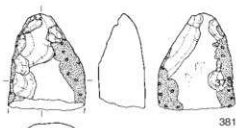
0 1:3 10cm

第41图 3号住(4)、4号住(2)、5号住(1) 燧石器

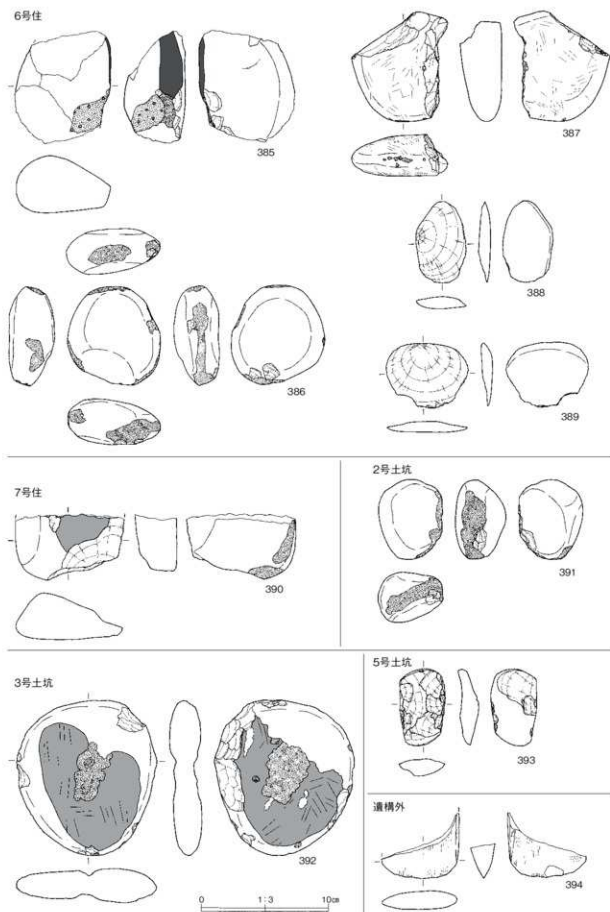
5号住



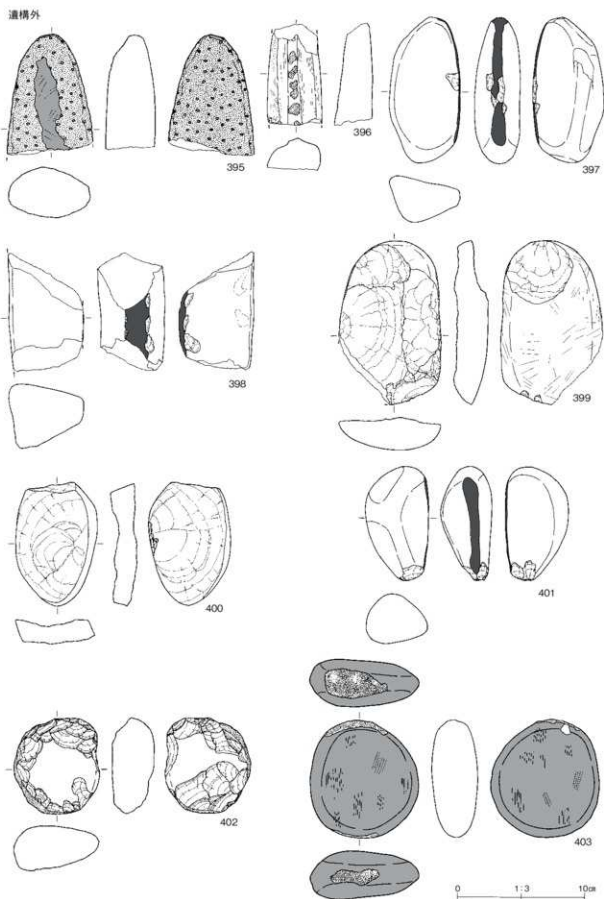
6号住



第42図 5号住(2)、6号住(1) 礫石器



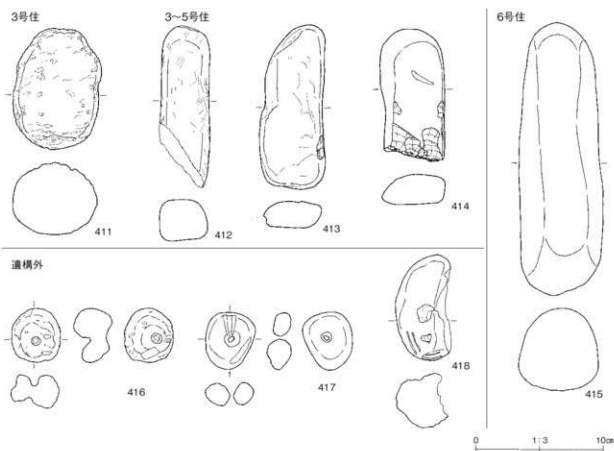
第43图 6号住(2)、7号住、2·3·5号土坑、遺構外(1) 礫石器



第44図 遺構外（2）礫石器



第45図 遺構外 (3) 礫石器



第46図 石製品

第4表 土器観察表(3)

種別	出土地点	層位	器種	存在部位	口縁-口首	文様など	内面	縦径 部寸(mm)	時期	備考	
101	16号住 Q2-A ベルト	1層-埋土上段	深鉢	口縁部	平縁、丸み、口首 状突起	口縁線無文、縦線同紋	横ナテ	少量	9.0-9.5	白瓷・大 木2b	40・49・59・87・ 102・121・128と同一 個体(長点なし)
102	6号住 Q2	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み	口縁線無文、縦線同紋	横ナテ	少量	9.0-9.5	白瓷・大 木2b	40・49・59・87・ 101・121と同一個体 (長点なし)
103	6号住 Q1	埋土上段	深鉢	口縁部	平縁、丸状(面取?)	口縁線無文、縦線同紋	横ナテ	少量	7.5-8.0	前期前期	
104	6号住 Q1	埋土上段	深鉢	胴一部	丸、縁部	丸、縁部	横ナテ	中量	10.0-12.5	前期前期	平底
105	6号住 Q2	埋土中	深鉢	胴部		縦線無文	横ナテ	中量	7.5-8.0	大木1	早稲田6番位?
106	6号住 Q2	埋土中	深鉢	胴部		縦線無文	横ナテ	中量	9.5	大木1	早稲田6番位?
107	6号住 Q2	埋土中	深鉢	胴部		早輪線糸体第4番?	横ナテ	少量	9.5	前期前期	厚唇付着
108	6号住 Q2	埋土中	深鉢	胴部		L.R.縁部	ナテ	中量	6.0-7.0	前期前期	内腹付着
109	6号住 Q1	埋土中	深鉢	胴部		早輪線糸体第1A 胴線部	横ナテ	中量	7.5-9.0	前期前期	116と同一個体
110	6号住 A-Aベルト	2層	深鉢	胴部		縦線無文	ナテ	中量	8.0-8.5	大木1	
111	6号住 Q2	埋土中	深鉢	胴部		縦線無文	横ナテ	中量	8.0	大木1	
112	6号住 C-Cベルト	1層	深鉢	胴部		縦線無文	横ナテ	中量	7.5	大木1	
113	6号住 Q2	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	丸、L.R.非線装具状縄文縁部	横ナテ	中量	5.0	前期前期	径2-5mmの縄目入
114	6号住東部	埋土中(中層下)	深鉢	胴部		縦線同紋	横ナテ	微量	7.5-8.0	前期前期	白瓷?
115	6号住	埋土上段	深鉢	口縁部	平縁	縦目状縄文(早輪線糸体 第5番)	横ナテ	少量	9.0	前期前期	
116	16号住子沢アグリ 1層土中下3層	1層土中下3層	深鉢	口縁部	平縁、丸状(面取?)	早輪線糸体第1A 胴線部	横ナテ	中量	6.5-8.0	前期前期	109と同一個体
117	6号住	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸状(面取?)	口縁線部に斜線の痕み、丸、 縁部	横ナテ	少量	6.0-8.5	白瓷	白瓷?
118	6号住	埋土上段	深鉢	口縁部	平縁、微細な縄文	L.R.縁部	横ナテ	微量	5.5-7.0	前期前期	
119	6号住	埋土中(中層前後)	深鉢	胴部		中段多糸丸、L.R.非線装具状 縄文縁部	横ナテ	中量	10.0-10.5	前期前期	
120	6号住	埋土中(中層前後)	深鉢	胴部		L.R.縁部	横ナテ	中量	9.5-11.5	前期前期	施部足取(洗滌状)
121	16号住 Q1-Q2 3層土中下タリ	1層土中下3層	深鉢	胴部		丸、縁部、縦線同紋	横ナテ	微量	7.5-9.0	白瓷・大 木2b	40・49・59・87・ 101・121と同一個体 (長点なし)
122	6号住東部	埋土中(中層下)	深鉢	胴部		早輪線糸体第5番	横ナテ	7.5	時期不明		
123	7号住	埋土上段	深鉢	胴部		縦線無文	ナテ	中量	8.0	大木1	
124	2号土坑	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	丸、非線装具状縄文(前方内 縁文)	横ナテ	3.5-5.0	発生時期	胎土中に砂粒多	
125	2号土坑	埋土中	深鉢	胴部		付加糸(丸、L)	ナテ	5.5-6.0	発生時期	胎土中に砂粒多	
126	2号土坑	埋土中	深鉢	胴部		付加糸(丸、L)	ナテ	4.5-5.0	発生時期	胎土中に砂粒多	
127	2号土坑	埋土中	深鉢	胴部		網代瓦	ナテ	5.5-6.5	発生	胎土中に砂粒多、発生 時期	
128	防線トレンチ1	1-3層	深鉢	口縁部	平縁、丸状	丸、縁部	横ナテ	無し	7.0-7.5	前期前期	大木7a式類あるいは 前期前期大木5式類
129	防線トレンチ1	2層	深鉢	胴部		胎付段縁に2mm小波状文	ナテ	無し	6.0	大木4	
130	防線トレンチ1	2層	深鉢	口縁部	平縁	押付縄文(丸)	横ナテ	無し	6.5-7.0	大木7b	
131	防線トレンチ1	2層	深鉢	胴部		縦線無文?	横ナテ	無し	7.0-8.5	中期前期	植物葉の残留痕あり
132	防線トレンチ1	2層	深鉢	胴部		縦線無文?	横ナテ	無し	6.0-9.0	中期前期	植物葉の残留痕あり
133	防線(田V)A3アグリ 2層	口縁部	深鉢?	口縁部	平縁	平行する縦線の胎付痕跡	ミガキ	5.0-5.5	大木4		
134	防線(田V)A2-A3 アグリ	1-3層	鉢?	1-3層部		1) 無文、胎付痕跡(環 縁上に印判の刺突文)、早輪 線糸体第1層	横ナテ	6.0	発生中- 後期	135と同一個体?	
135	防線(田V)A2-A3 アグリ	1-3層	鉢?	1-3層部		1) 無文、胎付痕跡(環 縁上に印判の刺突文)、早輪 線糸体第1層	横ナテ	6.0	発生中- 後期	134と同一個体?	
136	防線(田V)A2-A3 アグリ	1-3層	鉢	1-3層部		付加糸(丸、L)	横ナテ	6.0-6.5	発生中- 後期		
137	防線(田V)A3-A4 アグリ	1-3層	鉢	口縁部	小波状、丸	丸、縁部→平行状縁部+交互刺 突文	横ナテ	6.0-7.0	赤穴		
138	防線(田V)A2-A3 アグリ	1-3層	鉢	1-3層部	不明	口縁部	平縁	交互刺突文	ミガキ	6.5	赤穴
139	防線(田V)A2-A3 アグリ	1-3層	鉢?	胴部		付加糸(丸)	ナテ	5.0	発生時期		
140	防線(田V)A2-A3 アグリ	1-3層	鉢?	胴部		付加糸(丸)	ナテ	5.0	発生時期		
141	防線(田V)A2-A3 アグリ	2層	土師器	口-胴部	平縁		横ナテ	4.5-5.0	10世紀前	巻戻しの縄目痕では Toaより前期	
142	防線(田V)A3アグリ	2層	灰土器	胴部		ヘラズリ	横ナテ	8.0-9.0	平安		
143	防線(田V)A2アグリ 2層(カクラン古 砂)	土師器	鉢	土師器		ヘラズリ	横ナテ	6.0	平安		
144	B号赤アグリ	2層	深鉢	胴部		押付縄文(押付縄文間に斜 線刺突)、中段多糸丸、胎部	横ナテ	中量	11.5-12.5	土川2番	145と同一個体
145	B号赤アグリ	2層	深鉢	胴部		左側文、押付縄文(押付縄 文に平行して縦線刺突)	横ナテ	中量	11.5-13.0	土川2番	144と同一個体
146	B号赤-C8アグリ	V層	深鉢	胴部		中段多糸丸、L.R.非線装具状 縄文縁部	横ナテ	中量	11.0-12.0	前期前期	

第5表 土器観察表(4)

図版	出土地点	層位	器種	発見層位	口縁口径	文様など	内面	編年 相(年)	時期	備考
147	C Ⅱ 5a アウツド	V層	深鉢	胴部		押圧縄文(L, 押圧縄文)類 北條河内, 押圧縄文に2本の ノズル(褐色3位のモノ?)	多量		上川表2	
148	C Ⅱ 5b アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		5段多条(LR+RL, 非結実状 縄文類)	多量	120-123	前期古銅	
149	C Ⅱ 5c アウツド	古銅	深鉢	胴部		5段多条(LR+RL, 非結実状 縄文類)	多量		上川表2	
150	C Ⅱ 5d アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		粗文類, 押圧縄文による ノズル(褐色3位のモノ?)	多量	115-120	上川表2	
151	C Ⅱ 5e アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		押圧縄文(L, 押圧縄文)類 に粗文類	多量	110-115	上川表2	
152	C Ⅱ 5f アウツド	古銅	深鉢	胴部		5段多条(LR+RL, 非結実状 縄文類)	多量	90-95	前期古銅	上川表2式?
153	①Ⅱ 5g Ⅱ 5g アウツド ②Ⅱ 5g Ⅱ 5g	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		1本(口縁方向は粗文?)	少量	130-133	前期古銅 -古銅	施部丸底
154	C Ⅱ 5h アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		粗文, LR, 非結実状縄文類 (現在は5段多条?)	多量	95-120	前期古銅	
155	C Ⅱ 5i アウツド	古銅	深鉢	口縁部	平縁, 刺突文	5段多条(LR+RL, 非結実状 縄文類)	多量	90-110	前期古銅	
156	C Ⅱ 5j アウツド	古銅	深鉢	胴部		5段多条(LR+RL, 非結実状 縄文類)	多量	110-120	前期古銅 -古銅	
157	C Ⅱ 5k アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		車輪縁条第1類(LR) 重帯 粗文	多量	110	前期古銅	上川表2式から大木1 式への過渡型?
158	C Ⅱ 5l アウツド	Ⅱ層上段・古銅	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	粗縄縄文	多量	70-80	大木1	
159	C Ⅱ 5m アウツド	Ⅱ層中位	深鉢	胴部		粗縄縄文	多量	70-85	大木1	
160	C Ⅱ 5n アウツド	Ⅱ層中位	深鉢	胴部		粗縄縄文	多量	70-75	大木1	
161	C Ⅱ 5o アウツド	Ⅱ層	深鉢	胴部		粗縄縄文	多量	80-100	大木1	
162	C Ⅱ 5p アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		粗縄縄文	多量	85-95	大木1	
163	C Ⅱ 5q アウツド	古銅	深鉢	胴部		LR, 非結実状縄文(前方内 縄文)	少量	95-100	前期古銅	
164	C Ⅱ 5r アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	直状	LR, 非結実状縄文類	多量	90	前期古銅	大木1式期?
165	C Ⅱ 5s アウツド	古銅	深鉢	口縁部	平縁	6-7段ノーズLR類	多量	60-65	大木1	
166	C Ⅱ 5t アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	6-7段ノーズLR類	多量	60-70	大木1	
167	C Ⅱ 5u アウツド	①Ⅱ層中位②Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	6-7段ノーズ④段多条類, 粗 縄文	多量	50-80	大木1	口縁部が特に突出
168	C Ⅱ 5v アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	6-7段ノーズLR類	多量	70-90	大木1	
169	C Ⅱ 5w アウツド	Ⅱ層・Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	6-7段ノーズLR類	多量	60-70	大木1	
170	C Ⅱ 5x アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	平縁, 刺突文	6-7段ノーズLR類	多量	90-100	大木1	
171	C Ⅱ 5y アウツド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 縄文	LR類	多量	75	大木1	粗縄縄文?
172	C Ⅱ 5z アウツド	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	粗ノズル・粗文	多量	60-70	大木1	粗縄縄文?
173	C Ⅱ 5aa アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁	LR類	多量	60	大木1	
174	C Ⅱ 5ab アウツド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 丸み	不整然赤文	多量	75-90	大木2a	輪飾丸有
175	C Ⅱ 5ac アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	①: 不整然赤文 ②: LR類 粗文	多量	80	大木2a	
176	C Ⅱ 5ad アウツド	古銅	深鉢	口縁部	平縁, 丸み	①: 不整然赤文 ②: LR類 粗文	少量	55-75	大木2a	
177	C Ⅱ 5ae アウツド	古銅	深鉢	胴部		車輪縁条第1類(LR) 粗 縄文	少量	65	大木2a	
178	C Ⅱ 5af アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	波状, 山形突起	不整然赤文	少量	60-70	大木2a	
179	C Ⅱ 5ag アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	①: 不整然赤文 ②: LR類 粗文 ③: 非結実状縄文(要形を 確認)	多量	60-70	大木2a	
180	6b トロンク	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 1.5ギテ	①: 不整然赤文 ②: LR類 粗文 ③: 非結実状縄文類	多量	70-85	大木2a	
181	中央遺跡区東端	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	波状	不整然赤文	多量	70-90	大木2a	
182	C Ⅱ 5ah アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	平縁, 舟状(面取り)	不整然赤文	多量	90-100	大木2a	
183	C Ⅱ 5ai アウツド	古銅	深鉢	口縁部	直状	LR類①-結節印粗文	多量	110	大木2a	
184	C Ⅱ 5aj アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁	①: 結節印粗文 ②: LR類 粗文	多量	65-80	大木2a?	
185	C Ⅱ 5ak アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	山形突起, 舟状 (面取り)	LR(片末端処理) 粗文	多量	65-90	大木2a?	
186	C Ⅱ 5al アウツド	Ⅱ層	深鉢	胴部		車輪縁条第1A類	多量	100	大木2a	
187	C Ⅱ 5am アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	口縁部	平縁	5字状通筋状文	多量	95-100	大木2a	
188	C Ⅱ 5an アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	波状	5字状通筋赤文(車輪縁 条第3類)	無し	65-75	大木2b	
189	C Ⅱ 5ao アウツド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 丸み	5字状通筋状文	多量	80-90	大木2b	
190	①Ⅱ 5ap Ⅱ 5ap アウツド ②Ⅱ 5aq Ⅱ 5aq	Ⅱ層中位②Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁	①: 口縁部部に刺突文, 5字 状通筋状文 ②: 粗縄縄文	多量	50-95	大木2b	①と同部類
191	C Ⅱ 5ar アウツド	Ⅱ層上段	深鉢	胴部		5字状通筋状文	多量	無し	90-95	径2mm程度の窪み
192	C Ⅱ 5as アウツド	Ⅱ層下位	深鉢	胴部		5字状通筋状文	多量	無し	70-85	大木2b
193	C Ⅱ 5at アウツド	Ⅱ-V層	深鉢	胴部		5字状通筋状文	多量	95-130	大木2b	

第6表 土器観察表(5)

陶種	出土地点	層位	器種	存在部位	口縁・口首	文様など	内面	編年 相(年)	時期	備考
194	C N a9 アラッド	Ⅱ層	深鉢	胴部	平縁	5字状連続文	ナテ	無し	8.5	大木2b
195	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁	5字状連続文	ナテ	少	8.0-8.5	大木2b
196	C N a8 アラッド	B-V層	深鉢	胴部		縦線同軸→縦線同軸文	横ナテ	中	9.0-10.0	大木2b
197	C N a8 アラッド	Ⅱ層上段	小形深鉢	胴・底面		縦→縦線同軸 横→横線多	横ナテ	少	10.0-5.0	白雲・大木2b
198	C N a10 アラッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸ム	車輪線条体第1期 (K)	横ナテ	中	7.5-10.0	前期前葉
199	C N a7 アラッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、ナテ	縦線同軸(片未施埋)	横ナテ	中	6.5-7.5	大木2b
200	C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁、刺突文	縦線同軸	横ナテ	少	7.0	白雲・大木2b
201	B V a7 アラッド	B層	深鉢	胴部		付加条(口)・縦文	ナテ	中	10.0	大木2b
202	C N a4 込アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁	口縁縁部に肩位の筋のみ、幅1.5-2cmの無文帯、LR、LR、車輪線同軸文、縦線同軸文	横ナテ	中	8.5-9.0	白雲
203	C N a8 アラッド	①Ⅱ層-Ⅱ層中②Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取?)	口縁縁部に肩位の筋のみ、LR、縦線同軸文	横ナテ	中	6.5-9.0	白雲
204	C N a8 アラッド	Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁、丸ム	口縁縁部に筋のみ、縦文、付加条(口)・無文帯、LR、LR、横線同軸文	横ナテ	中	6.0-8.0	白雲
205	C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取?)	口縁縁部に肩位の筋のみ、縦文不明	横ナテ	中	6.0-7.5	白雲
206	B V a9 アラッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		LR、縦文	ナテ	中	7.0-8.0	前期前葉
207	①B V a9 アラッド ②C N a9 アラッド	①Ⅱ層②Ⅱ層中	深鉢	胴部		LR、縦文	横ナテ	中	10.0-11.0	前期前葉
208	C N a9 アラッド	B層	深鉢	口縁部	平縁、山形状突起	LR、縦文	横ナテ	中	6.0-7.0	前期前葉
209	①B V a9 アラッド ②B V a9-9 アラッド	①Ⅱ層-Ⅱ層中②Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁	①LR、縦文? ②LR、縦文	横ナテ	中	6.5-8.0	前期前葉
210	B V a9 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁、丸ム	LR、縦文	横ナテ	中	10.0-7.0	前期前葉
211	B V a9 アラッド	Ⅱ層上段	深鉢	胴部		付加条・LR、縦文	ナテ	中	10.0-11.0	前期前葉
212	B V a9 アラッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸ム	口縁縁部に肩位の筋のみ、LR、縦線同軸文	横ナテ	少	8.5-10.0	白雲
213	B V a9-C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	胴部		付加条・LR?・縦線同軸文・縦文	横ナテ	中	7.0-8.5	前期前葉
214	B V a9-C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	胴部		付加条・付加条(口)・LR・LR、車輪線同軸文	ナテ	中	6.5	前期前葉
215	C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取?)	LR、縦文→縦線同軸文	ナテ	中	7.0-8.0	前期前葉
216	C N a8 アラッド	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取?)	LR、縦文→縦線同軸文	横ナテ	中	7.0	前期前葉
217	B V a9 アラッド	Ⅱ層下段	深鉢	口縁部	平縁、丸ム	縦線同軸	ナテ	少	7.5-8.5	前期前葉
218	B V a9-C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	胴部	底状、山形状突起	縦線同軸	横ナテ	中	7.0-9.0	前期前葉
219	B V a9-C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁	付加条(口)・付加条(口)	横ナテ	中	6.0	前期前葉
220	C N a9 アラッド	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	平縁、内側突起	付加条(口)・LR、LR、縦文	横ナテ	中	5.0-6.0	前期前葉
221	C N a7 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁	付加条(口)・LR、LR、縦文	横ナテ	少	6.5-10.0	前期前葉
222	C N a7 アラッド	V層	深鉢	口縁部	平縁、内側突起	付加条(片未施埋) 縦文	横線多	中	6.5	前期前葉
223	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、段状	付加条(口)・LR(片未施埋)	ナテ	少	7.0-8.5	前期前葉
224	B V a9-C N a9 アラッド	B-V層	深鉢	口縁部	平縁	皮筋による弧状のモチーフ	横ナテ	少	7.0	前期前葉
225	C N a7 アラッド	B層	深鉢	底面		縦→車輪線条体第1期(L) 横→縦文・LR、縦文	横ナテ	中	13.5	前期前葉
226	C N a7 アラッド	B-V層	深鉢	胴部		車輪線条体第1期 (K)	横ナテ	少	9.0	前期前葉
227	B V a9 アラッド	B層	深鉢	胴部		無文不明	ナテ	少	8.5-9.0	前期前葉
228	16 トレンチ	Ⅱ層中	深鉢	口縁部	平縁、L字条	縦目文縁文	ナテ	少	6.0-8.0	時期不明
229	B V a9 アラッド	Ⅱ層	深鉢	底面			横ナテ	少	8.0	前期前葉
230	①B V a9-C N a9 アラッド ②C N a9 アラッド	①Ⅱ層-Ⅱ層中②Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	平縁?、丸ム	①付加条(口)・付加条(口)・LR、LR→縦線同軸文 ②LR、LR、縦文	ナテ	中	7.0	前期前葉
231	B V a9 アラッド	Ⅱ層上段(中層より上段)	深鉢	胴部		LR、縦文→付加条	横ナテ	無し	7.0-8.0	大木2
232	C N a7 アラッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取?)	無文、縦線同軸による筋のみ	LR、ナテ	無し	6.5	大木4
233	B V a9 アラッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		L(無筋) 縦文→縦線同軸による弧状のモチーフ	横ミゼホ	無し	6.0-6.5	大木4
234	B V a9 アラッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		付加条(口)・LR、縦文→縦線同軸による小湾状文	横ナテ	無し	6.0	大木4
235	B V a9 アラッド	Ⅱ層(中層より上段)	深鉢	口縁部	平縁、段状突起	無文	横ナテ	無し	5.0	大木5
236	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	底状、山形状突起(面取)・刺突文	車輪線条体第5期	横ナテ	無し	8.0	大木5
237	①B V a9-C N a9 アラッド ②C N a9 アラッド	①Ⅱ層-Ⅱ層中②Ⅱ層上段	深鉢	胴部		縦線同軸	横ナテ	無し	7.0-8.0	大木5
238	①B V a9-C N a9 アラッド ②C N a8 アラッド	①Ⅱ層-Ⅱ層中②Ⅱ層上段	深鉢	口縁部	底状、花弁状	口縁縁部に筋状突起文、縦線同軸	横ナテ	無し	7.5-8.0	大木5

第7表 土器観察表(6)

陶種	出土地点	層位	器種	残存部位	口縁・口部	文様など	内面	編年 相(年)	時期	備考	
239	〔1〕B Ⅱ-9 アグッド 〔2〕B Ⅱ-9 C Ⅱ-9 アグッド	Ⅱ-9層	深鉢	口部	微沈状	車輪跡全体第1層	黒い點ナゲ	無し	5.0-5.5	大木3	外側に厚付帯、口縁の作りは此層位に古い
240	〔1〕B Ⅱ-9 C Ⅱ-9 アグッド	Ⅱ-9層	深鉢	口部	微沈状	車輪跡全体第1層 (r) 微付 →粘付帯(隆起上層位)	黒ナゲ	無し	6.0-7.0	前期後半	
241	〔1〕C Ⅱ-9 アグッド 〔2〕B Ⅱ-9 C Ⅱ-9 アグッド	Ⅱ-1層(Ⅱ)-Ⅱ層	深鉢	口部	平縁、丸み	微付に平行する隆起帯文 (r) 粘付帯、粘付帯	黒ナゲ ミギキ	無し	9.0-10.0	大木7	
242	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口部	底状、斜り返し	〔1〕 車輪跡文(車輪跡)、 平行沈帯、底状文 器、粘付 帯、粘付帯	黒ナゲ	無し	5.0-6.5	大木7	内面に残りはじけ多
243	16 トレンチ	Ⅱ層(深)	深鉢	口部	平縁、ミギキ	微沈状、L 隆起	ミギキ	無し	5.0-5.5	大木7	
244	16 トレンチ	Ⅱ層(深)	深鉢	口部	平縁、斜り返し	〔1〕 車輪跡文(車輪跡)、平行 沈帯、粘付帯	ミギキ	無し	6.5-7.0	大木7	
245	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		微付粘帯(隆起上層位)、 平状粘付帯、ボタン状粘付 帯	黒ナゲ	無し	6.0	大木7	
246	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		底状隆起?		7.0	中期前半	植物葉の同定可	
247	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	口部	平縁、丸み	沈帯キョウマツ→粘付帯、微 付粘帯(隆起上層位)	黒ナゲ ミギキ	無し	6.0-8.0	大木7	
248	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	口部	平縁	底状隆起	黒ナゲ ミギキ	無し	6.5	中期前半	
249	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	口部	底状、台形状突起	粘付帯、沈帯文、ボタン状 粘付帯	黒ナゲ	無し	6.5-8.0	大木7	
250	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層(中層より上 部)	深鉢	口部	突起	底状文	ナゲ	10.0	中期後半		
251	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		微付粘帯(底状文→微粘付 帯)	ミギキ	6.0	大木9		
252	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層(中層より上 部)	深鉢	胴部		L 隆起→沈帯による粘付粘 文→微粘付帯	ナゲ	7.0	大木9		
253	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層(中層より上 部)	深鉢	口部	底状、粘付帯	底状文	黒ナゲ ミギキ	6.5-7.5	前期後半		
254	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	胴部		L 隆起→沈帯文	ミギキ	無し	3.0-4.0	後期前半	
255	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	口部	底状、粘付帯	L 隆起、底状文	黒ナゲ	4.0	大木10		
256	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	胴部		L 隆起→沈帯による隆起 帯	黒ナゲ	6.0	後小前期	無形別式群	
257	C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	胴部		L 隆起	黒ナゲ ミギキ	3.5-5.0	後小期- 中期	胎土中に金雲母	
258	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	胴部		L 隆起	黒ナゲ	4.0	赤次	底付不明、底状粘	
259	〔1〕B Ⅱ-90 アグッド 〔2〕B Ⅱ-90 C Ⅱ-90 アグッド 〔3〕B Ⅱ-90 C Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ-1層-Ⅱ層土層上 部(Ⅱ)層土上	鉢	口部	平縁、沈帯	〔1〕 胎文 器、平行沈帯 器 L 隆起	ミギキ	5.0	後小前期	259-261・262 と同一 器体(底点無し)	
260	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	口部	平縁、小突起、沈 帯	〔1〕 胎文 器、平行沈帯 器 L 隆起	ミギキ	無し	4.0-5.0	後小前期	259-261・262 と同一 器体(底点無し)
261	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	底面		L 隆起-粘付帯	ミギキ	無し	5.0-9.0	後小前期	259-260・262 と同一 器体(底点無し)
262	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	口部	平縁、沈帯	〔1〕 胎文 器、平行沈帯(底 状隆起)粘付帯 器、L 隆起	ミギキ	無し	4.0-4.5	後小前期	259-260・261 と同一 器体(底点無し)
263	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	口部	微沈状、口部微起 り	底状隆起	ミギキ	6.0	後小前期	越境文?	
264	中央調査区東端	Ⅱ層	深鉢	口部	平縁	L 隆起文、L 隆起	ナゲ	4.0-5.0	後小前期	内面に最少粘付帯	
265	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	胴部		L 隆起	ナゲ	5.0-6.0	後小前期		
266	16 トレンチ	Ⅱ層	深鉢	胴部		底面隆起に粘文(L 隆起)	ナゲ	5.0	後小前期		
267	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	口部	小突起	L 隆起隆起に粘付帯、車輪跡 全体第1層 (r) 微付	黒ナゲ	無し	5.0	後小?	266 と同一器体?
268	〔1〕B Ⅱ-90 C Ⅱ-90 ア グッド	Ⅱ層	鉢	胴部		車輪跡全体第1層 (r) 微付	黒ナゲ	無し	4.0-5.5	後小?	267 と同一器体?
269	16 トレンチ	Ⅱ層	鉢?	胴部		付加条(器)	黒・微 ミギキ	5.0-6.0	後小前期	胎土の植物から古代土 器器底前期?	
270	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	付付鉢	胴部		L 隆起、微付粘帯	ミギキ	4.0	後期前半		
271	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	鉢	口部	平縁	付加条(L 隆起)	黒ナゲ	5.0-6.0	時期不明		
272	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	深鉢	胴部		車輪跡全体第1層 (r)	ミギキ	9.0	時期不明		
273	B Ⅱ-90 アグッド	Ⅱ層	底面影響	口部	平縁	ロケロケ	ロケロケ	9.5-10.0	前期		
274	北調査区(南側①)	Ⅱ層	深鉢	口部	平縁、丸み	L 隆起	黒ナゲ	中層	5.0-6.0	前期	
275	北調査区(南側②)	Ⅱ層	深鉢	口部	平縁、ミギキ	〔1〕 隆起による文字状文、 平行沈帯、器、L 隆起	微ミギキ	無し	5.5-6.0	中期前半	
276	北調査区(南側③)	Ⅱ層	深鉢	口部	底状?	粘付粘帯(隆起に交互粘付 帯)、車輪跡全体第1層 (r)	黒ナゲ	無し	9.0-11.0	大木7	口縁内面肥厚
277	北調査区(南側④)	Ⅱ層	深鉢	胴部		L 隆起→沈帯による粘付粘 文→微粘付帯	黒ナゲ	6.0	大木9		
278	北調査区(南側⑤)	Ⅱ層	深鉢	口部		〔1〕 口縁-粘付帯、胎土粒 器 L 隆起	黒ナゲ	無し	9.5-11.0	後期後半	
279	北調査区(南側⑥)	Ⅱ層	深鉢	口部	山形状口縁、L 脚 付粘帯	粘付粘帯による棒状突起を起 点に底面隆起をテーパー(隆 起)上の粘文、粘付帯	ミギキ	無し	9.0-12.5	高度	280 と同一器体(底点 無し)
280	北調査区(南側⑦)	Ⅱ層	深鉢	胴部		粘付粘帯による幾何学的な テーパー(隆起)上の粘文、 粘付帯	黒ナゲ ミギキ	無し	9.0-12.0	高度	279 と同一器体(底点 無し)

第8表 土製品観察表

図録No	部種	出土地点	層位	文様・特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期	備考
281	円盤状土製品	穴トレンチ	Ⅱ層	付加糸(LR+L)	4.6	4.2	0.8	157	前期前期?	全周打ち欠き
282	円盤状土製品	CN/a9グリッド	Ⅱ層	LR	5.6	5.2	1.2	37.5	前期前期	全周打ち欠き
283	円盤状土製品	CN/a9グリッド	Ⅱ-V層	LR	3.5	4.4	1.0	22.5	前期前期	半円形、全周打ち欠き
284	円盤状土製品	BN/a10グリッド	Ⅱ-V層	不整磨糸文	4.0	3.6	0.7	11.7	前期前期	全周打ち欠き
285	円盤状土製品	B/a9グリッド	Ⅱ層上段	LR?	3.0	2.9	0.8	10.2	前期前期	楕円形、全周打ち欠き
286	円盤状土製品	CN/a9グリッド	Ⅱ層中段	LR/L	4.5	4.4	1.0	15.4	前期前期	正方形基調、全周打ち欠き
287	円盤状土製品	CN/a9グリッド	Ⅱ層上段	不整磨糸文	4.7	3.9	1.0	19.9	前期前期	半円形、全周打ち欠き
288	円盤状土製品	北部調査区南壁	Ⅱ層	結節回転文	3.5	3.2	0.9	11.7	中期前期?	全周打ち欠き
289	円盤状土製品	北部調査区南壁	Ⅱ層	LR	3.8	3.4	0.7	8.7	不明	全周打ち欠き、縄文後期調査or弥生後期

第9表 石器観察表(1)

図録No	部種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
301	石錐	3号住南北ベルト	Ⅱ層上段 (中期直下)	2.3	1.7	0.4	1.1	頁岩	北上山地	中生代	平基
302	石砧	3号住	Ⅱ層中	3.9	1.8	0.6	8.0	頁岩	北上山地	中生代	縦型・片刃
303	石砧	3号住	検出箇	5.4	2.4	0.9	6.1	頁岩	北上山地	中生代	縦型・片刃
304	スクレイパー	3号住	Ⅱ層上	3.2	3.4	0.9	8.4	頁岩	北上山地	中生代	
305	方持型スクレイパー	3号住 地土3	焼土層	8.0	4.8	1.3	75.5	ゲイサイト	原山山麓	中生代白亜紀	
306	方持型スクレイパー	3号住	Ⅱ層中段 (中期下段)	(6.2)	5.2	1.7	65.7	頁岩	北上山地	中生代	
307	方持型スクレイパー	3号住南北ベルト	Ⅱ層上	6.8	4.3	1.8	60.6	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
308	方持型スクレイパー	3号住北部	Ⅱ層中	9.80	5.6	1.8	105.1	セシ岩	北上山地	中生代白亜紀	
309	方持型スクレイパー	3号住北西部	Ⅱ層中	5.4	3.5	1.1	27.7	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	小形
310	石砧	4号住南部	Ⅱ層中	(4.2)	2.5	0.7	8.2	頁岩	北上山地	中生代	縦型・片刃、身部中央より土欠損
311	方持型スクレイパー	4号住	Ⅱ層上	6.9	4.1	1.4	50.1	頁岩	北上山地	中生代	
312	方持型スクレイパー	4号住	Ⅱ層上	10.9	6.9	2.1	234.5	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
313	方持型スクレイパー	4号住	Ⅱ層中	(5.0)	4.2	1.3	33.5	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	欠損品
314	方持型スクレイパー	3号住南北ベルト	Ⅱ層上	7.6	4.6	1.7	84.7	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
315	石錐	3号住	Ⅱ層中	(3.0)	1.3	0.4	1.1	頁岩	北上山地	中生代	平基
316	石錐	3号住	Ⅱ層中	2.6	2.0	0.5	2.0	頁岩	北上山地	中生代	平基
317	石錐	6号住Q1	Ⅱ層上	(2.4)	1.7	0.4	1.2	頁岩	北上山地	中生代	平基
318	石錐	6号住Q1	Ⅱ層中	3.2	1.1	0.4	1.2	頁岩	北上山地	中生代	平基・細長の形状
319	方持型スクレイパー	6号住	Ⅱ層下段	11.3	7.0	2.7	252.5	セシ岩	北上山地	中生代白亜紀	
320	方持型スクレイパー	6号住Q1	Ⅱ層中	8.6	5.8	1.8	114.4	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
321	方持型スクレイパー	6号住Q1	Ⅱ層上	5.8	3.8	0.9	25.5	セシ岩	北上山地	中生代白亜紀	小形
322	方持型スクレイパー	2号土坑	Ⅱ層上	(5.3)	3.9	1.5	39.7	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	胴部中央以下欠損
323	方持型スクレイパー	3号土坑	Ⅱ層上	5.8	3.8	1.3	38.5	砂岩	原山山麓	中生代白亜紀	
324	石錐	Ⅱ層上-CN/a9グリッド	V層	2.8	1.4	0.5	1.9	黒曜石	不明	不明	平基、石質異
325	石錐	B/a9グリッド	Ⅱ-V層	2.4	1.8	0.5	1.7	頁岩	北上山地	中生代	平基
326	石錐	CN/a9グリッド	Ⅱ-V層	3.0	2.1	0.4	2.2	頁岩	北上山地	中生代	やや狭り
327	石錐	CN/a9グリッド	Ⅱ-V層	1.8	1.6	0.4	0.8	頁岩	北上山地	中生代	やや狭り
328	石錐	CN/a9グリッド	Ⅱ層中段	2.2	1.8	0.4	1.5	頁岩	北上山地	中生代	平基
329	矢頭器	CN/a9グリッド	Ⅱ層	6.8	1.5	0.8	7.4	頁岩	北上山地	中生代	
330	石砧	B/a9グリッド	Ⅱ-V層	4.3	6.3	1.2	22.8	頁岩	北上山地	中生代	横型・両刃
331	石砧	B/a9グリッド	Ⅱ層上段	7.2	2.3	1.1	11.2	編戻岩	北上山地	中生代	縦型・片刃
332	石砧	B/a9グリッド	Ⅱ層上段	3.9	5.6	1.1	16.8	頁岩	北上山地	中生代	斜型・片刃?
333	石砧	CN/a9グリッド	Ⅱ-V層	5.9	1.8	0.7	5.9	頁岩	北上山地	中生代	縦型・片刃
334	石砧	CN/a9グリッド	Ⅱ層	5.6	1.8	0.9	6.2	頁岩	北上山地	中生代	縦型・片刃
335	石砧	北部調査区南壁	Ⅱ層	8.9	3.0	0.9	18.9	頁岩	北上山地	中生代	縦型・片刃
336	スクレイパー	CN/a9グリッド	Ⅱ層上段	3.7	4.3	1.2	18.0	頁岩	北上山地	中生代	
337	方持型スクレイパー	B/a9グリッド	Ⅱ層上段	6.1	4.3	1.3	43.6	頁岩	北上山地	中生代	
338	方持型スクレイパー	B/a9グリッド	Ⅱ層上段	8.1	5.9	1.9	139.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	

第10表 石器観察表(2)

順番No	品名	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
329	方持型ステイバー	BⅡB9グリップ	Ⅱ層中位	96.0	6.3	2.1	148.8	砂岩	原山山層	中年代白濁紀	刃部欠損
340	方持型ステイバー	BⅡB9グリップ	Ⅱ-V層	11.1	7.0	2.3	226.5	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
341	方持型ステイバー	BⅡB9グリップ	Ⅱ-V層	7.5	3.9	1.8	41.6	細粒花崗岩	北上山地	中年代白濁紀	
342	方持型ステイバー	BⅡB9グリップ	Ⅱ-V層	11.0	6.1	2.3	161.0	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
343	方持型ステイバー	BⅡB9グリップ	V層	9.4	7.3	2.0	171.5	砂岩/頁岩(燧石)	北上山地 原山山層	中年代白濁紀	
344	方持型ステイバー	BⅡB9グリップ	Ⅱ-V層	8.4	4.7	2.0	92.1	砂岩	原山山層	中年代白濁紀	
345	方持型ステイバー	CⅡV e8-1Bグリップ 東西ベルト	Ⅱ-V層	4.9	4.3	1.4	41.1	細粒花崗岩	北上山地	中年代白濁紀	平面形状不明
346	方持型ステイバー	CⅡV a8グリップ	V層	7.6	4.4	2.7	110.3	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	磨削未成品の可能性有
347	方持型ステイバー	CⅡV b9グリップ	Ⅱ層中位	6.1	3.5	1.1	32.5	ヒン岩	北上山地	中年代白濁紀	
348	方持型ステイバー	CⅡV b9グリップ	V層	7.0	4.5	1.7	64.3	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
349	方持型ステイバー	BⅡV c2グリップ	V層	9.3	5.9	2.1	158.7	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
350	方持型ステイバー	北浦南西南壁2	まろ層	15.3	8.3	3.7	105.5	細粒は入れい岩	北上山地	中年代白濁紀	大型
351	磨削石斧	3号住	Ⅱ土上段 (中層下段)	6.99	4.9	2.7	136.6	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	基部欠損
352	磨削石斧	3号住北西部	Ⅱ土上-中 位	8.25	5.1	1.5	84.2	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	未成品
353	磨削石斧	3号住東部	Ⅱ土上段	5.88	4.6	0.8	13.7	頁岩	北上山地	中年代	未成部品
354	特殊磨石	3号住	Ⅱ土中	13.7	6.1	4.2	503.5	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	
355	特殊磨石	3号住	Ⅱ土中	14.2	4.8	4.5	570.5	砂岩	原山山層	中年代白濁紀	
356	特殊磨石	3号住	Ⅱ土中	13.3	6.2	4.6	507.0	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
357	特殊磨石	3号住南部	Ⅱ土中	10.06	7.7	5.4	607.3	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
358	特殊磨石片	3号住北西部	Ⅱ土上-中 位	7.91	6.8	5.7	356.3	花崗岩	北上山地	中年代白濁紀	
359	磨石片	3号住晩土3	晩土層	7.1	6.6	4.9	302.3	花崗岩	北上山地	中年代白濁紀	
360	石皿	3号住	Ⅱ土上-中 位	13.60	13.11	3.6	896.5	砂岩	久慈磨石 野田層	中年代白濁紀 -新年代古属 三記	欠損部、砥石か
361	古石	3号住東部	Ⅱ土上-中 位	21.4	14.11	10.4	4180.0	花崗岩	北上山地	中年代白濁紀	レン字状で裏面に焼成痕有
362	礫石	3号住	Ⅱ土中	12.2	7.6	3.1	286.5	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	
363	礫石	3号住	Ⅱ土中	8.2	8.9	3.6	363.5	ヒン岩	北上山地	中年代白濁紀	
364	礫石	3号住東部ベルト	Ⅱ土中	9.1	7.3	2.6	227.7	ヒン岩	北上山地	中年代白濁紀	磨削未成部品
365	礫石	3号住	Ⅱ土中	14.2	8.2	3.5	415.9	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	形状は斧状で片面に自然磨痕有
366	礫石	3号住	Ⅱ土上段 (中層下段)	13.7	8.6	2.2	258.8	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	形状は斧状
367	礫片ステイバー	3号住	Ⅱ土中	8.9	5.8	1.3	75.4	凝灰岩	北上山地 原山山層	中年代白濁紀 原山山層	磨削未成部品
368	礫片ステイバー	3号住	Ⅱ土中	5.7	5.2	1.8	62.7	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
369	礫片ステイバー	3号住北北ベルト	Ⅱ土中	5.0	6.7	1.1	34.4	凝灰岩	北上山地	中年代白濁紀 原山山層	
370	磨削石斧	4号住Q1	Ⅱ土中	13.3	5.9	3.0	292.1	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	未成品、方持型ステイバーにも類似する
371	磨石	4号住南部	Ⅱ土中	9.9	8.9	3.8	320.3	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
372	台石	4号住	Ⅱ土中	18.2	15.7	8.4	3428.0	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	種別不明(磨石に打痕(加工痕?)あり)
373	礫石	4号住	Ⅱ土中	9.11	7.0	2.4	223.0	安山岩	北上山地	中年代白濁紀	磨削未成部品
374	礫片ステイバー	4号住	Ⅱ土中	8.2	4.8	1.4	69.8	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
375	特殊磨石	3-4号住東四上 レンタ	Ⅱ土中	6.59	6.7	5.9	340.9	花崗岩	北上山地	中年代白濁紀	
376	磨石	5号住	Ⅱ土中	7.3	9.0	3.1	323.9	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	
377	磨石	5号住Q1	Ⅱ土中	13.33	14.4	7.7	2054.6	アイサイト	原山山層	中年代白濁紀	
378	礫石	5号住	Ⅱ土中	12.27	8.5	3.5	478.0	細粒は入れい岩	北上山地	中年代白濁紀	磨削未成部品
379	礫石	5号住Q1	Ⅱ土中	12.5	9.4	2.6	343.2	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白濁紀	片面自然磨

第11表 石器観察表(3)

図録No	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
380	板状礫	15号住区C Nの9 グリッド付近	埋土中上層 E-Ⅲ層	225.5	16.0	1.3	451.0	頁岩	北上山地	中年代	約15cm覆れて出土した2片を組合
381	磨製石斧	6号住A-A'ベル ト	1層	77.8	6.2	3.7	200.3	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	未成品
382	磨製石斧	6号住C-C'ベル ト	1層	11.1	5.5	2.6	177.0	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	未成品、力押しステ ッパーの副産品
383	磨製石斧	6号住Q1	埋土中	8.6	6.0	2.5	216.9	頁岩	北上山地	中年代	刀部欠損
384	特殊磨石	6号住A-A'ベル ト	1層	10.0	7.0	4.5	334.4	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	
385	特殊磨石	6号住Q2	埋土中	8.9	7.5	4.8	381.4	花崗岩	北上山地	中年代白亜紀	
386	磁石	6号住Q2	埋土中	7.9	7.4	3.6	385.3	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	
387	磁石片	6号住Q2	埋土中	8.7	7.6	3.3	306.5	頁岩	北上山地	中年代	
388	礫片ステレイパー	6号住A-A'ベル ト	1層	6.5	4.0	1.0	28.7	細粒花崗岩	北上山地	中年代白亜紀	
389	礫片ステレイパー	6号住A-A'ベル ト	1層	5.1	6.5	0.9	32.5	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	
390	磨石片	7号住	埋土中	5.2	8.6	3.7	303.6	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	
391	磁石	2号土坑	埋土中	6.3	5.1	4.0	173.1	ヒン岩	北上山地	中年代白亜紀	
392	閃石	3号土坑	埋土中	12.3	11.1	2.7	517.0	閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	両面に凹有
393	礫片ステレイパー	5号土坑	埋土中	6.2	3.6	1.6	37.9	アイサイト	原山山群	中年代白亜紀	
394	磨製石斧	B Nの9グリッド	Ⅲ層	5.2	6.1	2.0	47.2	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	刀部のみ残存
395	磨製石斧	C Nの9グリッド	Ⅲ-Ⅳ層	9.6	6.8	4.0	333.5	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	未成品
396	磨製石斧	16トレンチ	Ⅲ層	8.0	4.4	3.0	142.0	頁岩	北上山地	中年代	未成品、磨り切り残有
397	特殊磨石	B Nの9グリッド	Ⅲ-Ⅳ層	11.6	5.6	3.7	324.0	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	
398	特殊磨石	C Nの9グリッド	Ⅲ層	9.4	5.9	5.4	384.9	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	
399	磨石	B Nの9グリッド	Ⅲ-Ⅳ層	13.0	8.1	2.7	352.5	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	打ち欠き残有
400	磨石片	C Nの9グリッド	Ⅲ層	9.8	6.5	2.1	179.0	アイサイト	原山山群	中年代白亜紀	輪切状
401	磁磨器	B Nの9グリッド	Ⅲ層上位	9.0	5.0	4.1	227.5	アイサイト	原山山群	中年代白亜紀	
402	磁磨器	B Vの9グリッド	Ⅳ層	7.5	6.7	3.5	300.1	ヒン岩	北上山地	中年代白亜紀	
403	磁磨器	B Nの9グリッド	Ⅲ-Ⅳ層	9.3	8.6	3.9	437.5	アイサイト	原山山群	中年代白亜紀	
404	磁石	B Nの9グリッド	Ⅲ層	10.1	8.8	5.5	666.0	アイサイト	原山山群	中年代白亜紀	
405	磁石	B Nの9グリッド	Ⅲ層	6.3	7.1	3.1	308.3	流紋岩	北上山地	中年代白亜紀	
406	磁石	C Nの9グリッド	Ⅳ層	6.4	5.2	5.1	247.1	流紋岩	北上山地	中年代白亜紀	
407	閃石	C Nの9グリッド	Ⅳ-V層	9.3	8.7	5.2	385.0	アイサイト	原山山群	中年代白亜紀	
408	礫器	B Nの9グリッド	Ⅲ-Ⅳ層	11.8	9.5	4.7	630.0	細粒閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	打ち欠きある礫で磨 ぎ未成品か
409	礫器	B Nの9グリッド	Ⅳ層	10.4	7.3	2.7	341.9	花崗閃緑岩	北上山地	中年代白亜紀	磨ぎ未成品か
410	礫器	C Nの9グリッド	V層	8.7	10.2	2.6	329.2	ヒン岩	北上山地	中年代白亜紀	片面自然面、磨ぎ未成 品か

第12表 石製品観察表

図録No	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
411	軽石製石製品	3号住北西部	埋土中(中 層下位)	9.6	7.0	5.8	47.9	軽石	十和田火山	新生代新第四紀	
412	石棒	3-5号住	埋土中	12.8	4.0	3.3	283.0	ヒン岩	北上山地	中年代白亜紀	
413	石刀	3-5号住	埋土中	13.0	5.2	2.1	235.8	ホルンフェルス	北上山地	中年代(変成は 中年代白亜紀)	
414	石刀	3-5号住	埋土中	10.5	5.2	2.4	218.9	砂岩	北上山地	中年代	(変成は 中年代白亜紀)
415	石棒	6号住Q1	埋土上層	21.6	6.6	6.6	1372.0	ホルンフェルス	北上山地	中年代(変成は 中年代白亜紀)	
416	軽石製石製品	B Nの9グリッド	Ⅲ層下位	4.3	3.9	3.1	9.6	軽石	十和田火山	新生代新第四紀	穿孔有り
417	軽石製石製品	C Nの9グリッド	Ⅳ層	4.6	3.9	1.9	5.8	軽石	十和田火山	新生代新第四紀	穿孔有り
418	軽石製石製品	B Nの9グリッド	Ⅳ-V層	8.5	4.4	4.3	40.6	軽石	十和田火山	新生代新第四紀	自然に変化した孔と 磨跡される。

VI 自然科学分析

重津部 I 遺跡出土火山灰分析

(株) 火山灰考古学研究所

1 はじめに

東北地方北部の三陸沿岸域の地層や土壌の中には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、鳴子、肘折など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、始良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物^{さいせつぶつ}砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載の特徴がテフラ・カタログ（町田・新井、1992、2003、2011 など）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行って年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古遺物・遺構の層位や年代などに関する情報を得られるようになってきている。

宮古市田老地区に位置する重津部 I 遺跡の発掘調査でも、テフラの可能性のある堆積物が検出されたことから、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスの屈折率測定）を行って、テフラ粒子を検出してその岩石記載の特徴を把握し、指標テフラとの同定を行うことで、堆積物の層位や年代を明らかにすることになった。分析対象試料は、発掘調査担当者により採取・送付された、試料 1（3号住居址・上位火山灰）と試料 2（中央東調査区境・C IV h10）の 2 試料である。

2 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

試料 1（3号住居址・上位火山灰）と試料 2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするために、最初に簡易的なテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を観察して、高純度部から試料 10g を採取。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥機により 80°C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。試料 1（3号住居址・上位火山灰）には、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型や分厚い無色透明の中間型、そして淡褐色のバブル型の火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

また、試料 2（中央東調査区境・C IV h10）にも、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型や無色透明の中間型、そして淡褐色のバブル型の火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

3 テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

（1）分析試料と分析方法

試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれるテフラ粒子の量や特徴を、定量的に明らかにするために、火山ガラスの色調形態別含有率と、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析と、重鉱物組成分析（火山ガラス比分析と合わせてテフラ組成分析とする）を実施した。テフラ組成分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析済みの試料を対象に、分析篩により、 $>1/4\text{mm}$ 、 $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ 、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 、 $<1/16\text{mm}$ の粒子に篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の250粒子を観察して、火山ガラスの色調形態別含有率、軽鉱物と重鉱物の含有率をそれぞれ求める（火山ガラス比分析）。
- 3) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析）。

（2）分析結果

テフラ組成分析の結果をダイアグラムにして図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳をそれぞれ表2と表3に示す。

試料1（3号住居址・上位火山灰）に含まれる火山ガラスの含有率は15.2%で、含有率が高い順に繊維束状軽石型（6.4%）、スポンジ状軽石型（6.0%）、中間型（2.8%）が含まれている。軽鉱物および重鉱物の含有率は、それぞれ72.4%と7.2%である。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石（46.0%）と単斜輝石（28.4%）である。

試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれる火山ガラスの含有率は21.2%で、含有率が高い順に繊維束状軽石型（9.6%）、スポンジ状軽石型（7.6%）、中間型（4.0%）が含まれている。軽鉱物および重鉱物の含有率は、それぞれ60.4%と10.0%である。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石（42.8%）と単斜輝石（27.2%）である。

4 屈折率測定（火山ガラス・鉱物）

（1）測定試料と測定方法

試料1（3号住居址・上位火山灰）と試料2（中央東調査区境・C IV h10）に含まれるテフラと、指標テフラとの同等精度を向上させるために火山ガラス（ n ）の屈折率測定を行った。測定方法は、温度変化型屈折率法（塩原, 1993）で、測定には温度変化型屈折率測定装置を使用した。測定対象は、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 粒子中の火山ガラスと、実体顕微鏡を用いて $>1/4\text{mm}$ 粒子から手選した後に軽く粉砕した斜方輝石である。

（2）測定結果

屈折率の測定結果を表4に示す。この表には、三陸沿岸域の後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて掲載した。なお、屈折率の値の詳細を付表に示した。

試料1（3号住居址・上位火山灰）に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（ n ）は、1.510-

1514である。また、試料2(中央東調査区域・CIV h10)に含まれる火山ガラス(32粒子)の屈折率(n)も、1510-1514である。

5 考 察

試料1(3号住居址・上位火山灰)と試料2(中央東調査区域・CIV h10)に含まれるテフラ粒子の多くは、火山ガラスの色調や形態、斜方輝石や単斜輝石に富む両輝石型の重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率特性から、約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ(To-Cu, 大池ほか, 1966, 早川 1983, 町田・新井, 1992, 2003, 2011)に由来すると思われる。

分析者は現地において試料が採取された堆積物の層相を実現する機会を得ていないが、本遺跡周辺において、To-Cuの一次堆積層が認められる際には、下部が細粒の黄色火山灰層、上部が比較的細粒の灰色火山灰層の組み合わせからなる場合が多い。今回のテフラ同定結果を有効に活かすためには、試料の採取時に現地で得られている試料採取層相の層相に関する情報などと照会して、試料中のTo-Cuの層位および年代の指標としての有効性に関して議論を行う必要がある。

6 ま と め

宮古市田老地区の重津部I遺跡で採取されたテフラ分析試料2点を対象に、テフラ分析(テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施した。その結果、試料中に十和田中振テフラ(To-Cu, 約6,000年前)が多く含まれていることが判明した。

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフクロロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p.138-149.
- 壇原 徹 (1993) 温度変化型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」, p.149-158.
- 早川由紀夫 (1983) 十和田中振テフラ層の分布, 粒度, 組成, 年代, 火山, 28, p.263-273.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫 (2011) 新編火山灰アトラス(第2刷), 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ, 科学, 51, p.562-569.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰, 第四紀研究, 5, p.29-35.

表1 テフラ検出分析結果

試料(採取地点)	軽石・スコリア			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)
	量	色調	最大径	量	形態	
試料1(3号住居址・上位火山灰)	***	pm(sp, fb), md, bw	白, 黄色透明, 淡褐	opx, cpx		
試料2(中央東調査区域・CIV h10)	***	pm(sp, fb), md, bw	白, 黄色透明, 淡褐	opx, cpx		

***: とくに多い, **: 多い, *: 中程度, *: 少ない, bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スコリア型, sp: スコリア状, fb: 繊維状,

ol: カンラン石, cpx: 斜方輝石, opx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, (): 量が少ないことを示す。

表2 火山ガラス比分析結果

試料(採取地点)	火山ガラス						軽鉱物	重鉱物	その他	合計
	bw(c)	bw(ab)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)				
試料1(3号住居址・上位火山灰)	0	0	0	7	15	16	181	18	13	250
試料2(中央東調査区境・CIVh10)	0	0	0	10	19	24	151	25	21	250

bw: (b)型, md: 中間型, pm: 粒石型, sc: スコア型, cl: 無色透明, ab: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数。

表3 重鉱物組成分析結果

試料(採取地点)	ol	opx	cpz	am	bi	opq	その他	合計
試料1(3号住居址・上位火山灰)	0	115	71	0	0	61	3	250
試料2(中央東調査区境・CIVh10)	0	107	68	0	0	71	4	250

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpz: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, opq: 不透明鉱物(黒色で光沢をもつもの), 数字は粒子数。

表4 屈折率測定結果

地点・試料・指標テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定点数	
重津部Ⅰ遺跡-試料1(3号住居址・上位火山灰)	1.510-1.514	30	本報告
重津部Ⅰ遺跡-試料2(中央東調査区境・CIVh10)	1.510-1.514	32	本報告
三陸沿岸域の指標テフラ(後期更新世以降)			
十和田a(To-a, 青森)	1.496-1.508		町田・新井(2011)
十和田a(To-a, 岩手・秋田)	1.500-1.508		町田・新井(2011)
十和田b(To-b)	1.496-1.508		町田・新井(2011)
十和田中堰(To-Cu, 青森)	1.510-1.514		町田・新井(2011)
十和田中堰(To-Cu, 岩手・秋田)	1.508-1.512		町田・新井(2011)
十和田南部(To-Nb)	1.512-1.517		町田・新井(2011)
秋田駒郷沢(Ak-Y)	未詳		町田・新井(2011)
肘折尾花沢(Hj-O)	1.499-1.504		町田・新井(2011)
秋田駒小岩井(Ak-K)	未詳		町田・新井(2011)
十和田八戸(To-H)	1.505-1.509		町田・新井(2011)
浅間板鼻黄色(Ag-YP)	1.501-1.505		町田・新井(2011)
鳴子濁沼上原(Nk-U)	1.492-1.500		町田・新井(2011)
始良Tn(AT)	1.498-1.501		町田・新井(2011)
十和田大不動(To-Of)	1.505-1.511		町田・新井(2011)
西岩手雪涌・生出(Iw-Y, Od)	1.508-1.508		町田・新井(2011)
鳴子郷沢(Nr-Y)	1.500-1.503		町田・新井(2011)
焼石山形(Yk-Y)	1.501-1.503		町田・新井(2011)
焼石村崎野(Yk-M)	1.503-1.508		町田・新井(2011)
十和田川口(Kw)	未詳		町田・新井(2011)
阿蘇4(Aso-4)	1.506-1.510		町田・新井(2011)
鳴子荷坂(Nr-N)	1.500-1.502		町田・新井(2011)
肘折北原(Hj-Kth)	1.499-1.502		町田・新井(2011)
三瓶木次(SK)	1.496-1.498		町田・新井(2011)
洞爺(Toya)	1.494-1.498		町田・新井(2011)

本報告における屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法(増原, 1993)による。

テフラ・カタログ(町田・新井, 2011)の屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

付表1 重津部 I 遺跡・試料1に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の内訳

屈折率(n)	粒子数	測定粒子数:30
1.5000-1.5009	0	最小値:1.5102
1.5010-1.5019	0	最大値:1.5141
1.5020-1.5029	0	mean:1.5122
1.5030-1.5039	0	median:1.5120
1.5040-1.5049	0	
1.5050-1.5059	0	
1.5060-1.5069	0	
1.5070-1.5079	0	
1.5080-1.5089	0	
1.5090-1.5099	0	
1.5100-1.5109	4	
1.5110-1.5119	11	
1.5120-1.5129	6	
1.5130-1.5139	7	
1.5140-1.5149	2	
1.5150-1.5159	0	
1.5160-1.5169	0	
1.5170-1.5179	0	
1.5180-1.5189	0	
1.5190-1.5199	0	
合計	30	

付表2 重津部 I 遺跡・試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の内訳

屈折率(n)	粒子数	測定粒子数:32
1.5000-1.5009	0	最小値:1.5104
1.5010-1.5019	0	最大値:1.5151
1.5020-1.5029	0	mean:1.5123
1.5030-1.5039	0	median:1.5123
1.5040-1.5049	0	
1.5050-1.5059	0	
1.5060-1.5069	0	
1.5070-1.5079	0	
1.5080-1.5089	0	
1.5090-1.5099	0	
1.5100-1.5109	5	
1.5110-1.5119	8	
1.5120-1.5129	8	
1.5130-1.5139	9	
1.5140-1.5149	2	
1.5150-1.5159	0	
1.5160-1.5169	0	
1.5170-1.5179	0	
1.5180-1.5189	0	
1.5190-1.5199	0	
合計	32	

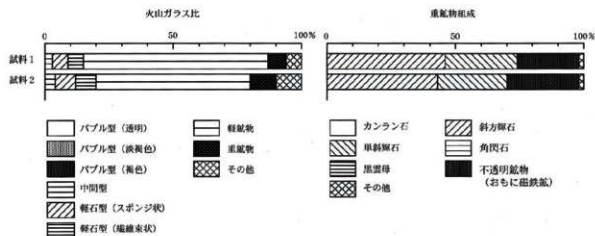


図1 重津部 I 遺跡のテフラ組成ダイヤグラム

Ⅶ 総 括

今回の重津部Ⅰ遺跡の調査は計画道路敷を対象とし、概ね南北250m、東西110mの範囲で、調査面積は8,700㎡であった。調査地は北・中央・南の3つの調査区に分割した。北・南調査区は、試掘を行ったところ、遺構・遺物ともにほとんど発見されなかったことから、県教委との協議の結果、本格的な発掘調査は行わなかった。遺構・遺物のほとんどは中央調査区で検出された。

1 遺 構

発見された遺構は竪穴住居跡7棟、土坑6基、陥し穴状土坑1基、焼土12か所（うち単独のもの5）、柱穴状遺構5基である。上述のとおり、主要な遺構は全て中央調査区で発見され、中でも竪穴住居跡など居住に関係する遺構は同調査区の南向き斜面で発見された。その内容は、縄文時代前期前葉を中心とする遺構、遺物である。その他にも少数ながら弥生時代と平安時代の遺物が検出された。また、南向き斜面の裾には東に下る沢跡があり、その沢跡に流入・堆積した地層からも縄文時代前期を中心とする遺物が出土した。

竪穴住居跡は、1・2号住が南向き斜面上方に散在し、3～7号住は斜面の下方、沢の北岸に密集して見つかった。3～5号住はほぼ同一地点で重複し、古い方から5号住→4号住→3号住の順に変遷することを確認できた。出土遺物も前期前葉の範囲の中で、前期前葉前半大木1式期（5号住）→前期前葉後半大木2b式期（3号住）の変遷が読み取れた。住居の構造は、5号住が不整形の竪穴の中央に一本の主柱穴を配するもの、4・5号住は大形住居で、長楕円形の竪穴をもち、周壁際に小柱穴を配するものであった。こうした構造の変化は、同年に調査を行った越田松長根Ⅰ遺跡で想定した住居の大形化の趨勢と合致し（※岩手埋文2017年第666集として報告書発刊予定）、大形住居出現の時期も従来考えられてきたものに抵触しない（須原拓2007）。6・7号住からも縄文時代前期前葉の遺物が出土した。1・2号住からは詳しく時期を特定できる遺物量は発見されなかったが、上記住居とほぼ同じ時期のものとみて大過はないであろう。これらの住居を含む集落の広がり、調査区内東方には求められず、地形的にみて西側（谷頭の方）、あるいは1・2号住がある斜面上方に広がっていて、それが割平されたものとみてよいであろう。

土坑・焼土遺構・柱穴状遺構も住居跡が発見された周辺に散在しており、このあたりが集落の縁辺部にあったことを示している。

一方、陥し穴とみられる9号土坑は、集落推定地からは沢を挟んだ対岸の北向き斜面下方に位置しており、この種の遺構が集落外に設けられたことがわかる。

2 遺 物

土器101,435g、土製品9点（円盤状土製品9点）、剥片石器301点、礫石器2,408点、石製品17点、チップ・ブレイクは3,551.1gが出土した。この遺跡の特徴の一つとして、礫石器が非常に多く、土製品と石製品が少ない遺跡であることが分かる。遺構や土器の主体時期は、縄文前期前葉であることから、当該期の特徴として直結する内容と考えられる。以下には遺物の種類毎に概要をまとめてみる。

(1) 土 器

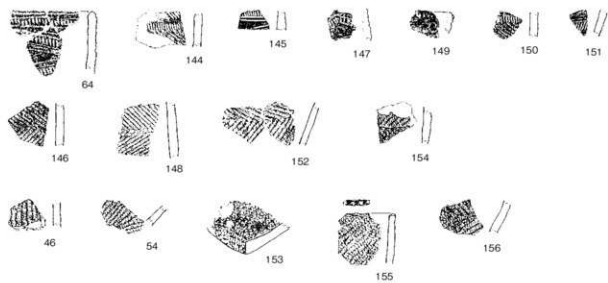
今回の調査では、縄文時代前期初頭～晩期、弥生時代前期～後期、平安時代までの、多岐に亘る時期の土器が出土した。以下には時期毎にまとめてみる。

【縄文前期初頭】 縄文前期初頭の土器は、出土量は前期前葉に次ぐが、多量という量ではない。特徴としては、口縁部に縄文原体による押圧縄文（原体の側面圧痕※早蕨状のループ文、渦巻文、平行条線など）や短沈線（刻み列）などの属性を持ち、胴部の地文には0段多条の原体による非結束羽状縄文が整然と横方向に施文される（横帯状に施文される）ものに代表される。これらの土器群は従来の土器型式編年に準拠すれば、関東地方の花積下層式に並行し、東北地方南部では上川名2式として周知されているものに比定・相当する。

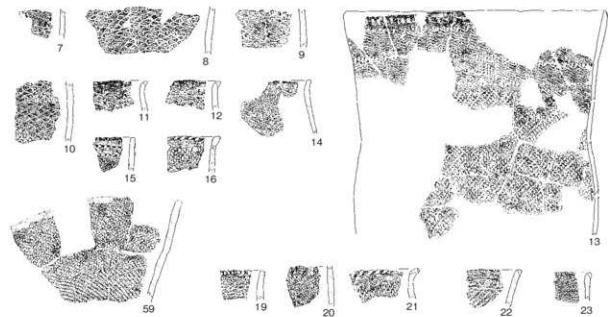
さて、今回の調査で出土した当該期土器の内、代表的なものを集成し第47図上段に示した。比較資料として、県内の良好事例である住田町小松I遺跡20号住、24号住、26・52号住、27号住出土土器や、宮古市千鶴遺跡第17号竪穴住居跡出土土器を第48～50図に示した。3遺跡の共通点として、口縁部文様に押圧縄文や短沈線などが採用され、胴部地文に0段多条の原体を用いた羽状縄文が横方向に回転施文されるものが顕著に認められる。相違点として、小松I遺跡20号住・27号住出土土器には口縁の器形がキャリバー状を呈するものが一定量存在するが、本遺跡や千鶴遺跡17号住出土土器には明確にキャリバー状を呈するものを認め難い（概ね外傾気味・直立気味、僅かに内湾気味などがある。註1）。また、平成27年度に調査を実施した宮古市田老越田松長根I遺跡出土の前期初頭土器においても、同様に口縁の器形が明らかにキャリバー状を呈するものは認められない。つまり、気仙地域（県南部）と本地域の地域差に関わらず文様構成や文様手法には共通点が多いものの、器形の観点では非共通点も存在する可能性を示唆させる。ただ、ここで取り上げた資料では口縁部～底部までの土器全体の器形を窺う資料がほとんど無いことから、資料不足は否めず、今後の検討課題は多い。

なお、東北地方北部の前期初頭の指標として用いられている長七谷地Ⅲ群について若干記述するなら、口縁部に条が横走（0段多条の縄文原体による斜回転）するものや、同じく口縁部に縄の末端を用いて刺突する手法により刺突列を構成するものに代表され、胴部地文は上川名2式と同様に非結束羽状縄文が横帯する。また、あくまで所見的であるが、口縁部文様帯を意識・形成し胴部の文様帯とは明確に区分しているものと、口縁部～胴部まで同一の地文のみを施文するものがある。すなわち、本遺跡で出土している土器は、口縁部文様帯に施文される文様や文様の施文手法からは長七谷Ⅲ群土器に相当するものを見いだせないが、胴部への地文（0段多条の原体により非結束羽状縄文が横帯に巡る）は共通性が高く、必然的に胴部だけの破片資料では両者を区分することは難しいと捉えられよう。また、断定できる内容ではないが、筆者の知見の範囲で言及すると、長七谷Ⅲ群土器に口縁部がキャリバー状を呈するものは認め難い。

【縄文前期前葉】 前期前葉は今回の調査では最も多い出土量を得られた。遺構単位では、3号住が良好資料を提供した。この3号住からは、大木2b式の他に白座式（※S字状連鎖沈文と口縁端部の斜位の刻みが、同一個体に共存してみられるものも複数ある）が主体的に出土している（※大木2b式より古い土器も若干混じることを付記しておく）。第47図下段に代表的なものを集成した。層位的には、遺構本来の燻属時期より古い土器も出土していると捉えられるが、大木2b式より新しい時期の土器（大木3式など）が含まれない（認め難い）。この内容は重要で、前期前葉後半を中心とした土器群と判断される。また、埋土上位にTo-Cuテフラの堆積が認められ、テフラ分析からもTo-Cuテ

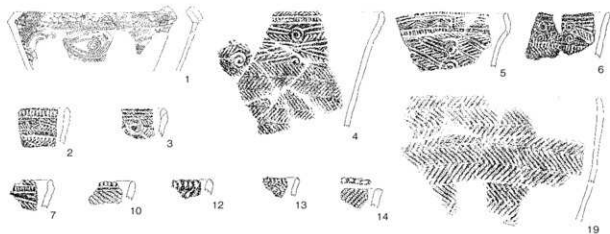


縄文前期初頭土器集成図（上川名2式期）

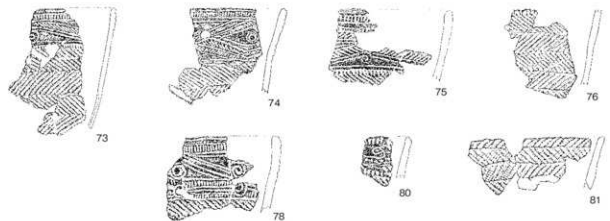


3号住出土土器集成図（大木2b式・白座式）

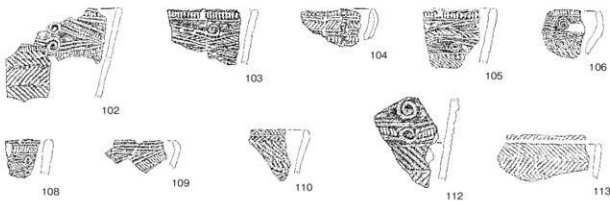
第47図 重津部I遺跡出土縄文前期土器



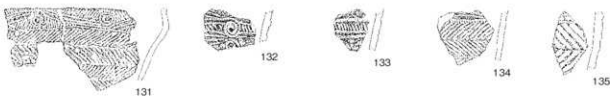
小松 I 遺跡20号住居跡出土土器



小松 I 遺跡24号住居跡出土土器

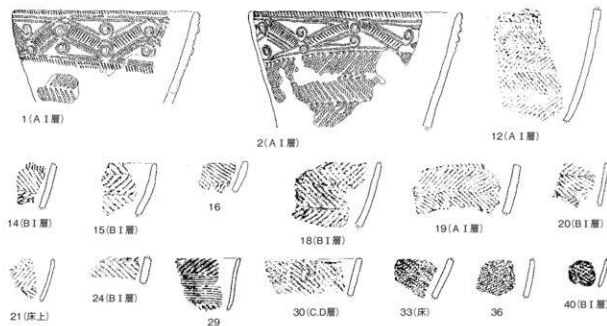


小松 I 遺跡26・52号住居跡出土土器



小松 I 遺跡27号住居跡出土土器

第48図 小松 I 遺跡20号住居跡、24号住居跡、26・52号住居跡、27号住居跡出土土器



第49図 千歳遺跡第17号竪穴住居跡出土土器

フラである裏付けを得られた。状況から To-Cu テフラ降下以前の住居と判断される。このことから、この3号住出土土器は同テフラ降下期より古い土器群である可能性が高い。参考までに、3号住の下位から検出したのが4号住で、さらにその下位に5号住があり、新旧関係を整理すると古い方から5号住→4号住→3号住の順になる。3号住の出土土器は上記のとおり大木2b式中心と判断され、尚且つ白座式が共存する。4号住は、№66の大木2a式、№67の大木1式?、№68・69の組紐を施文する土器（大木2b式か）などが出土した。5号住は、組縄縄文を施文する土器や羽状縄文（結束、非結束の両方あり）などが出土し、あるいは大木1式と大木2a式の中間時期を担う土器群である可能性もある。大木1式と捉えたのは、胎土中に繊維を含む、原体が環付き末端ループを施文するものを基調する土器群であるが、それらと共存して一定量以上組縄縄文を施文する土器が出土する。このことから、これら組縄縄文土器も大木1式期に帰属する可能性が高いと調査判断される。

【縄文前期中～後葉】大木3～5式と捉えられるもので、少量の出土であったことから、認知したものは全て掲載した。掲載した中では、№65・231・235は To-Cu テフラより上位層で出土していることから、同テフラの降下時期より新しいと判断される。

【縄文中期初頭～前葉】大木7a式は、沢跡や中央調査区を中心に少量の出土があった。大木7a式の前後型式を模索すると、大木6式は認め難く、大木7b式は極少数（※№276）である。

【縄文中期後葉】中央調査区で少量出土した。出土層位は To-Cu テフラより上位層であることから、層位的に矛盾はない。

【縄文後期初頭】中央調査区で少量と、北調査区の急傾斜の縁（観察表の出土地には北調査区南壁と明記）で少量（※250×130mmのポリ袋で約5袋分）出土した。当該期の遺構検出もなく、また層位的には縄文前期土器が混じることから、位置性を保っている状態には見て取れない。

【縄文晩期】大洞B式と大洞A式が各1点と、晩期中葉～後葉1点が中央調査区で出土した。

【弥生】弥生土器は出土点数は少ないが、前期～後期まで認められる。主体は後期赤穴式である。中

中央調査区の沢跡や2号土坑からの出土が主体的である。

【古代】土師器2点と須恵器2点が出土した。全て平安時代と推定される。4点中3点が中央調査区の沢跡出土である。弥生土器の出土地・出土層位とはほぼ同様にある。あるいは、沢跡の上流である調査区外西側に遺構が存在するものか。

時期・分類	最大 (mm)	最小 (mm)	最大平均 (mm)	最小平均 (mm)	厚差平均 (mm)	分析点数
上川名2	13.5	9.0	12.0	11.1	0.9	12
前期初頭～前葉	13.5	9.0	12.1	10.5	1.6	4
前期前葉(形式不特定)	14.5	4.0	8.6	7.7	0.9	92
大木1	10.5	5.0	8.1	7.0	1.0	23
大木2a	13.5	5.5	8.8	7.8	1.0	22
大木2b	13.0	5.0	8.7	7.5	1.1	34
白座	10.0	4.0	8.6	7.4	1.2	22
大木3～5	8.0	5.0	6.8	6.4	0.4	13
前期全体	14.5	4.0	8.7	7.7	1.0	222
中期	10.0	5.5	7.8	7.0	0.9	8
大木7a～7b	11.0	5.0	7.7	6.6	1.1	9
大木9	7.0	6.0	6.3	6.3	0.0	3
中期全体	11.0	5.0	7.5	6.7	0.8	18
後期	12.5	3.0	9.4	7.4	2.0	5
晩期	9.5	4.0	4.5	4.3	0.2	3
弥生	9.0	3.5	5.7	5.0	0.7	25

第13表 重津部Ⅰ遺跡出土土器の厚さ

【土器の厚さ】さて、第13表には今回出土した土器の厚さを時期毎に示した。先に表の項目を説明すると、「最大」は全体で最も厚い数値を示した土器の値、「最小」は全体で最も薄い数値を示した土器の値、「最大平均」は各土器の最大値の平均、「最小平均」は各土器の最小値の平均、「厚差平均」は各土器の最も厚い部分から最も薄い部分を引いた値である。以下には導かれる情報を抽出してみる。【最大】・【最大平均】・【最小平均】最大値をみると、縄文前期初頭～前葉が13.5mmと厚い土器が存在し、また最大平均値も12.1mmと、厚い土器を制作する傾向が看取される。縄文前期前葉は「最大平均」や「最少平均」をみる通り前期初頭に比べて薄い作りの土器が主体であることが分かる。

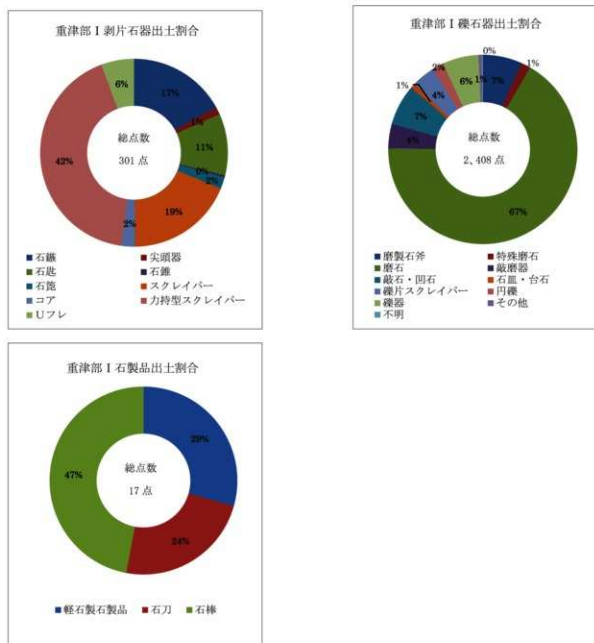
【最小】縄文晩期や弥生が薄い作りが多いことが分かる。

【厚差平均】縄文前期や縄文後期は10mm前後と高い値を示すが、大木9式や縄文晩期はほぼ均等の厚さに仕上げられていることが窺える。

【小結】今回の調査で出土した各時期の土器の厚さの計測値を分析することで、概ね各時期の傾向は捉えられたと考えられる。厚い土器は縄文前期初頭に、薄い土器は縄文晩期と弥生、均一気味の厚さが大木9式に多い結果を導かれた。上記の結果は、今までの土器観察経験からの「印象」や「感覚」と矛盾しない、妥当な結果が分析値も示していると考えている。ただ、分析点数に多・少のバラツキがあることと、いわゆる精製、粗製の違いを加味していないことから、正確な分析データとは言えないかもしれない。今回、土器の厚さを計測しデータ化した目的は、出土土器全般に地文のみが多く、それらにある程度の時期の方向性を示せないものかを意図して観察・計測を行った。他の事例との比較・検証を行うことで、地域性なり時期差なり、さらに多くの情報が抽出可能と考えられる。

(2) 石 器

剥片石器は301点出土した。内訳は、石鏃51点、尖頭器4点、石匙32点、石錐1点、石篋6点、スクレイパー56点、コア7点、力持型スクレイパー127点、Uフレ17点である。礫石器は2,408点出土した。内訳は、磨製石斧162点、特殊磨石39点、磨石1,609点、敲磨器102点、敲石165点、凹石2点、砥石1点、石錐1点、石皿7点、台石13点、礫片スクレイパー95点、板状礫12点、棒状礫1点、円礫48点、である。石製品は、17点出土した。軽石製石製品5点、石刀4点、石棒8点である。チップ・フレークは3551.1g出土した。下記には剥片石器、礫石器、石製品の組成を表した。石鏃、スクレイパー、磨石が多いことは、一見すると通常の縄文遺跡とほぼ同じ様相に見て取れるが、剥片石器の42%を占める力持型スクレイパーの割合は特殊な出土状況といえる。



第14表 重津部Ⅰ遺跡出土石器組成表